ＳＧＨ報告書　「はじめに」

同志社国際中学校・高等学校　校長　川井 国孝

早いもので本校が文部科学省により SGH に指定されてから３年が終わろうとしている。2015 年度に入学してきた SGH 第１期生は、３年間の学びの結果、ささやかではあるが地球規模の深刻な課題であるグローバルイシューの解決に向けた自分たちの提言を発表まで持って行くことができた。グローバルイシューそのものが非常に大きな課題であり、高校生が簡単に画期的な解決策を出せるようなものではない。しかし、グローバルな深刻な課題に真剣に取り組み、解決策を考えることで、自分たちの身近なところにもグローバルイシューに繋がる問題が存在していることに気付けるようになった。そして自分たちに何ができるかを考え、高校生にもできるところから、実際に行動を起こすことができるところまで成長した。彼らが今後大学の学びで、これをより発展させて、将来グローバルなステージで世の中のために活躍してくれることを心から願っている。

SGH の取り組みは汎用性の高いカリキュラム開発が大きな目的であるため、本校では構想調書に示した目的を共通に持ちながらも、指導順序や指導方法は各学年により多少異なっている。SGH 関係の授業については担当者が一つの学年を持ち上がることで、学年毎にそれぞれ継続して３年間指導できるようにしている。そのため２期生である現在２年生の海外フィールドワークは 3 月に実施することになっている。１期生とは違う形でのアプローチになっているので、学年の特長を活かした政策提言をまとめてくれることを期待している。

また、昨年も触れたことだが、海外へのフィールドワークが行われることや、本校を訪問する留学生との交流、そして国際機関への提言をすることも想定されているので、英語力を高めたいという意欲は学校全体に高まっている。The Global Enterprise Challenge や The World Scholar’s Cup など、英語を使うプログラムへの参加生徒数も増加している。これらのプログラムでは、世界大会への出場権が得られ、世界を舞台にチャレンジする生徒が増えてきた。これは、そういう生徒の動きを負担が増えるにもかかわらず、しっかりサポートしてくれる献身的な本校教職員の存在に支えられていることは言うまでもない。

SGH という恵まれた環境を活用し、これからも生徒達にとって有効な学びの仕組みを、学校全体に拡げて行きたい。

2017 年度（平成 29 年度）ＳＧＨ報告書目次

はじめに …… 校長　川井国孝　1

発信と連携、そして再考と行動へ　～SGH 指定校として～ …… ＳＧＨ委員長　山本真司　4

研究開発完了報告書 ……6
中間評価を受けて 2017 年度総括と展望 ……14
GPA-Academic 診断レポート ……16

Ⅰ　スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要 ……22
Ⅱ　実施報告 ……24
　1　文科省提出概念図 ……24
　2　開発カリキュラム ……25
　　2-1　2017 年度開発カリキュラム GUS-B=Global Understanding Skills Basic（第 1 年次）…25
　　2-2　2017 年度開発カリキュラム GUS-I=Global Understanding Skills Ⅰ（第 2 年次）……26
　　2-3　2017 年度開発カリキュラム GUS-II=Global Understanding Skills Ⅱ（第 3 年次）……27
　3　研究開発の実際 ……28
　　3-1-1　GUS-B「第一回　Global Understanding Skills BASIC「クラス展開」」 ……28
　　3-1-2　GUS-B「METHOD」 ……29
　　3-1-3　GUS-B「「持続可能」な世界とは？MDGs から SDGs へ」 ……29
　　3-1-4　GUS-B「GPS-Academic 実施」 ……30
　　3-1-5　GUS-B「映画『TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して』」 ……31
　　3-1-6　GUS-B「映画　TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して　－振り返り」 …32
　　3-1-7　GUS-B「1 学期のまとめ　－マイクロラボにて」 ……33
　　3-1-8　GUS-B「「興味を持って、ぜひ参加して欲しい」　2016 年度フィールドワーク体験者」 …34
　　3-1-9　GUS-B「「フードドライブの実現に向けて」　生徒会より」 ……35
　　3-1-10　GUS-B「GPS-Academic 結果返却」 ……36
　　3-1-11　GUS-B「もったいない　－TASTE THE WASTE」 ……37
　　3-1-12　GUS-B「フィールドワーク参加者による報告会」 ……38
　　3-1-13　GUS-B「行ったことのない場所、触れたことのない文化」 ……39
　　3-2-1　GUS Ⅰ「第一回 Global Understanding Skills Ⅰ「お互いを知る」」 ……40
　　3-2-2　GUS Ⅰ「問題解決法トレーニング」 ……40
　　3-2-3　GUS Ⅰ「情報収集 - ドイツでの環境問題･政策」 ……41
　　3-2-4　GUS Ⅰ「ドイツの環境政策について - 調査」 ……42
　　3-2-5　GUS Ⅰ「フィールドワークに向けた事前学習 －チーム分け」 ……43
　　3-2-6　GUS Ⅰ「レポートのまとめ方　－間違いから手法を学ぶ」 ……44
　　3-2-7　GUS Ⅰ「フィールドワークに向けた事前学習　－レポートの小項目の整理」 ……45
　　3-2-8　GUS Ⅰ「フィールドワークに向けた事前学習　－チームにてリサーチ項目の再確認①」 …46
　　3-2-9　GUS Ⅰ「フィールドワークに向けた事前学習　－チームにてリサーチ項目の再確認②」 …46
　　3-2-10　GUS Ⅰ「一学期の総まとめ　－work sheet を完成させ夏休みの課題を整理する」 ……47
　　3-2-11　GUS Ⅰ「夏の課題図書に関するプレゼンテーション」 ……48
　　3-2-12　GUS Ⅰ「レジュメの制作、プレゼンテーションに向けて」 ……49
　　3-2-13　GUS Ⅰ「レジュメのテーマ　各グループによるプレゼンテーション」 ……50
　　3-2-14　GUS Ⅰ「グループプレゼンテーションとリサーチブックの改善案作成」 ……51
　　3-2-15　GUS Ⅰ「ドイツでの環境政策をまとめたリサーチブックの完成に向けて」 ……51

3-2-16　GUS Ⅰ「2 学期最後の授業」……52
3-2-17　GUS Ⅰ「脱炭素革命の衝撃」……53
3-2-18　GUS Ⅰ「ディスカッションとグループワーク」……54
3-2-19　GUS Ⅰ「SGH 活動報告会に向けて」……55
3-2-20　GUS Ⅰ「iPad を取材の現場で使いこなす」……56
3-2-21　GUS Ⅰ「ヨーロッパフィールドワークに向けての最終準備　ブログを作って情報を共有しよう　OECD 参加者の先輩より」…56
3-3-1　GUSⅡ「第一回 Global Understanding Skills Ⅱ「WALLS」」……57
3-3-2　GUSⅡ「新聞記事から調べ学習の方法論」……58
3-3-3　GUSⅡ「『少女は自転車に乗って（Wadjda）』- 文化の違いを理解する」……59
3-3-4　GUSⅡ「具体的な提言に向けて」……60
3-3-5　GUSⅡ「映画 『TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して』」……60
3-3-6　GUSⅡ「『映画 TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して』　－振り返り」…61
3-3-7　GUSⅡ「倫理的な発想が動かしたドイツの脱原発」……62
3-3-8　GUSⅡ「SGH ブース＠文化祭・同国でフードドライブ」……63
3-3-9　GUSⅡ「もったいない　－TASTE THE WASTE」……64
3-3-10　GUSⅡ「提言書作成」……65
3-3-11　GUSⅡ「提言のプレゼンテーション」……66
3-3-12　GUSⅡ「最後のクラス」……67
3-4-1　GUS-B 講演「現代のキーワード「持続可能な社会」　－聖書を手がかりとして考えるー」…68
3-4-2　GUS-B 講演「身近な“Tomorrow”を探して　－岡山県真庭市の取り組み」……70
3-4-3　GUS-B 講演「共生社会の条件」……71
3-4-4　GUS-B 講演「福島原発事故の前後」……72
3-4-5　GUS-B 講演「コスモポリタン」……73
3-4-6　GUSⅡ講演「フードバンク京都の取り組み」……74
3-4-7　GUSⅡ講演「提言し、行動する人たち」……75
3-4-8　GUSⅡ講演「「持続可能な社会」を考えるために」……76
3-4-9　GUSⅡ講演「持続可能社会の希求　ジャーナリストの立場から」……78
3-4-10　GUSⅡ講演「提言に向けて　企画書の作成方法を学ぶ」……79
3-4-11　GUSⅡ講演「生徒が講演者に」……80
3-4-12　GUSⅡ講演「生徒が講演者に」……81
3-5-1　GUS-B フィールドワーク「バイオマスツアー真庭」……82
3-5-2　GUS-B フィールドワーク「東京フィールドワーク　大使館・国際機関訪問」……83
3-5-3-1　GUS Ⅰフィールドワーク「ヨーロッパ研修 環境先進国 ドイツ連邦共和国・デンマーク王国」…84
3-5-3-2　GUS Ⅰフィールドワーク「ヨーロッパ フィールドワーク ドイツ連邦共和国･デンマーク」…85
3-5-3-3　GUS Ⅰフィールドワーク「ヨーロッパ研修 旅程 研修内容計画表」……90
3-5-3-4　GUS Ⅰフィールドワーク「ヨーロッパ研修旅行　－生徒たちの報告－」……91
3-6-1　その他の活動「The Global Enterprise Challenge　高校生対象の 12 時間の国際競技」…114
3-6-2　その他の活動「WORLD SCHOLAR'S CUP 2017　世界大会へ！」……114
3-6-3　その他の活動「ハーバード大学 Mary C. Brinton 教授の講演会」……117
3-6-4　その他の活動「第４回　同志社英語プレゼンテーション大会－立石杯－」……117
3-6-5　その他の活動「2017 年度 SGH 全国高校生フォーラムに参加してきました」……118
3-6-6　その他の活動「経済協力開発機構(OECD)特別講義」……119
3-7　2017 年度 SGH 活動報告会開催のご報告……120
3-8-1　第 3 回同志社国際高等学校 SGH 運営指導委員会……121
3-8-2　第 3 回同志社国際高等学校 SGH 運営指導委員会【別紙様式 1 自己評価表】……122
4　SGH 事務室……138

発信と連携、そして再考と行動へ　～SGH 指定校として～

SGH 研究開発委員会　委員長　山本 真司

与えられている 5 年間の中間点を過ぎ、指定校一期生が卒業していきます。「持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム～環境先進国に学び世界に提言～」という壮大な試みは徐々に果実を生み出しています。一方、わたしたちの地域や国が実は「派手」ではないけれど、当初イメージした「環境先進国」に負けず劣らず環境保全と持続可能社会への施策を官民で展開していることにも改めて気づくことができました。

1)「もったいない！」フードバンク京都とコラボ

SGH 指定一期生は夏期休暇中に「フードバンク京都」の実践に出会い、GUS-Ⅱ受講生、生徒会と共に文化祭期間を軸に校内で「フードドライブ」を実施しました。1 月にその成果を全校で共有し、次世代へ継承することができました。環境先進国からの学びで始まったクラスは主体的な気付きを多方面にわたって開花させています。

合言葉は “taste the waste” さらに、京田辺市市民部市民参画課への発信から「スマイルダイニング（こども食堂)」とのコラボが視野に入ってきました。学校と地域活動との連携が SGH 研究開発から生み出されようとしています。

2)「プロの流儀」で発信を学ぶ

指定 3 年目、提言準備に必要なプロの仕事の流儀に触れることができました。(GUS-Ⅱ) 9 月　「ドイツの脱原発　倫理的な発想」　小原克博氏　同志社大学神学部教授　10 月　「公害　原発の現場から」大島英利氏　毎日新聞社論説委員　11 月　「企画書作成の実際　シミュレーション」山本知恵氏　京都 YWCA 主事また、GUS-B では、リンクする社会的課題を読み解くために、「共生社会を求めて」と題して、NPO 法人「そら」代表　地主明広氏に講演していただき、ここから特別支援学校に通学する児童たちとの共生ボランティアを始めようとしています。

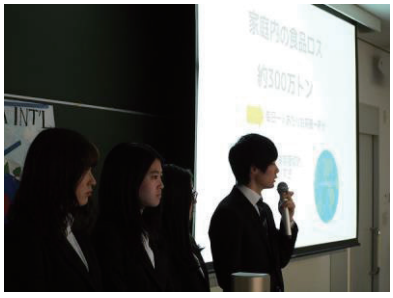
3）SGH 全国高校生フォラーム、SGH 甲子園に参加

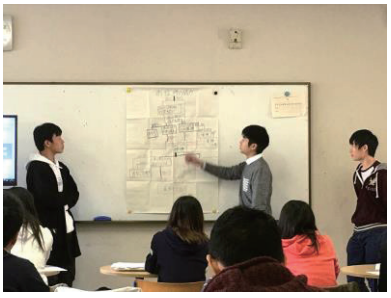
11 月 25 日（土）横浜パシフィコで開催された「SGH 全国高校生フォーラム」（文部科学省、筑波大学主催、全国の指定校から 95 校が参加）に 4 名の高 3 生徒が参加し、「敢えてアナログ」手作りのポスター発表を英語で実施しました。

2018 年 3 月 24 日（土）関西学院大学で開催された「SGH 甲子園」に初めて参加しました。

4）構想でイメージした取り組みを始めるために

わたしたちのプログラムで残されている課題は「世界に提言」です。京都府をハブとして学びから具体的な運動へと展開するための歩みを始めようとしています。言い古された言い回しですが、“Think Global, Act Local” すでに実施されている施策を学び直して、実行可能な企画を提言できるように SGH 指定期間を有効に利用していきます。





（別紙様式３）

平成３０年３月３０日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住　　所　京都府京都市上京区今出川通烏丸
東入玄武町 601 番地
管理機関名　　学校法人　同志 社
代表者名　　理事長　八田　英二

平成２９年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

平成２９年　５月１８日（契約締結日）～平成３０年　３月　３１日

２　指定校名

学校名　　同志社国際高等学校

学校長名　　川井　国孝

３　研究開発名

持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム

～環境先進国に学び世界に提言～

４　研究開発概要

１年生必修科目「Global Understanding Skills（Basic）」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の実例を学習した。特に、SDGs の理解を促進するために大学教員、ジャーナリスト、企業人を招き、それぞれの切り口からグローバル・イシューを学んだ。知識の定着と問題の明確化、およびシェアを図るため、多様なアクティブラーニングの方法を試行した。。生徒固有の潜在能力と伸長可能性を探るためにベネッセが提供する GPS-Academic を導入し、当該学年の定点調査を実施する。これにより SGH 研究開発の評価の一助とする。２年生選択科目「Global Understanding Skills Ⅰ」では、資源の有効活用や循環運用を学び、日常の学習成果を見聞するために海外研修をドイツ、デンマークで実施した。３年生選択科目「Global Understanding Skills Ⅱ」では、二年間の学びを実践するための方策を研究し実施した。Think Globally, act locally、校内での成果普及を他学年の授業と文化祭で実施、また、京田辺市民部市民参画課、京都府環境部循環型社会推進課ならびに関係団体との連携事業を試行した。

5　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程（29 年 5 月 18 日～30 年 3 月 31 日）											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
同志社大学教員による講演	○				○		○		○			
成果発表会への支援								○	○	○		

（2）実績の説明

① 年間を通して SGH の対象となった生徒
1 年生全員 283 名、2 年生 SGH 科目選択者 25 名、 3 年生 SGH 科目選択者 34 名

② 大学教員による専門的支援 持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム～環境先進国に学び世界に提言～に相応しい教員の派遣と講演を実施した。SGH 担当教員に対して、コンサルティングを適宜実施した。

1） GUS-Basic 学年全員 283 名対象 講演「現代のキーワード 持続可能な社会」
2） GUS-Ⅱ32 名対象 ゼミナール「倫理的な発想が動かしたドイツの脱原発」

② 成果普及 年間を通して、広報に関する助言、京都府文教課、京田辺市市民部等の連携支援を実施し、担当部署と SGH 担当教諭、生徒とのリエゾンを実現した。また、学内外を対象とした「成果発表会」運営に関して実施場所設営、技術支援を実施した。（生徒 85 名、教職員・保護者、学外 SGH 指定校教員 43 名参加）

6　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程（29 年 5 月 18 日～30 年 3 月 31 日）											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
① GUS-Basic	○	○	○		○	○	○	○	○	◎		
② GUS-Ⅰ	○	○	○		○	○	○	○	○	◎		
③ GUS-Ⅱ	○	○	○		◎	○	◎	▽	▽	◎	◎	

④ドイツ・デンマーク研修	△	△	△			△	△	○	▽	▽	○	
⑤ 真庭研修	△		△		△	○	○		◎	◎		
⑥ 東京研修	△				△	△	△	△	○	◎		
⑦ 成果普及	△				○	△	▽	◎	○	◎	◎	
⑧ 成果報告	△		△		△	△	▽	◎	○	◎	◎	
⑨ HP 掲載	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑩ 報告書	△					△	△	△	▽	▽	○	

△：企画、広報、準備　○：実施　◎：発表　▽：試行

（２）実績の説明

① GUS-Basic（学年全員 283 名）

授業ごとに学校ホームページに内容を掲載した。全体への授業ないしは講演、授業、講演を受けて小グループ（マイクロ・ラボ）での情報の共有と課題発見の機会を作り、全体でシェアーする目的でポスター・セッション等を実施した。単元の最後に個別作業を実施し、各自のレポートを作成、提出させた。このサイクルによって単元ごとに学習内容を確認することができた。最終的に通年レポートをデジタル文集化している。

GUS-B-1 「第一回 GUS BASIC 講座」
GUS-B-2 「METHOD　どのような方法で学ぶのか」
GUS-B-3 「持続可能な世界とは？MDGs から SDGs へ」
GUS-B-4 「GPS-Academic」
GUS-B-5 「映画『TOMORROW パーマネントライフを探して-』」
GUS-B-6 「映画 TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して 振り返り」
GUS-B-7 「1 学期のまとめ　ーマイクロラボにて」
GUS-B-8 「ヨーロッパ FW　フィールドワーク体験者講座　GUS-Ⅱ生徒による報告」
GUS-B-9 「フードドライブの実現に向けて　生徒会」
GUS-B-10 「GPS-Academic 返却と結果の検証」
GUS-B-11 「DVD　もったいない　taste the waste」
GUS-B-12 「FW 参加者　真庭、東京 FW による報告」
GUS-B-13 「行ったことのない場所　触れたことのない文化」

成果の普及　内容と成果　授業ごとの HP 掲載によって校内外への SGH 研究開発を周知させるの機会とした。また、文化祭で SGH ブース作成、保護者やオープン・スクール等でプロモーションビデオとブロシュアーを用いて広報し、生徒、保護者が当事業を理解する契機とした。

② GUS Ⅰ（選択者 25 名）

授業ごとに学校ホームページに内容を掲載した。全体への授業　授業情報の共有と課題発見の機会を作り、議論を深めた。海外研修希望者を募り、8 名が参加した。

GUS Ⅰ-1 「第一回 GUS Ⅰ 講座
GUS Ⅰ-2 「問題解決トレーニング」
GUS Ⅰ-3 「情報収集−ドイツでの環境問題・政策」
GUS Ⅰ-4 「ドイツの環境政策について−調査」
GUS Ⅰ-5 「レポートのまとめ方 −間違いから手法を学ぶ」
GUS Ⅰ-6 「フィールドワークに向けた事前学習」
GUS Ⅰ-7 学期の総まとめ　−work sheet を完成させ夏休みの課題を整理する」
GUS Ⅰ-8 「課題図書のプレゼンテーションをしよう」
GUS Ⅰ-9 「課題図書のレジュメ完成、プレゼンテーションに向けて」
GUS Ⅰ-10 「プレゼンテーション 」
GUS Ⅰ-11 「冊子の改善点のまとめ」
GUS Ⅰ-12 「炭素革命の衝撃」
GUS Ⅰ-13 「iPad を取材の現場で使いこなす」
GUS Ⅰ-14 「ヨーロッパフィールドワーク直前 ブログを使って情報を共有しよう」

成果の普及　内容と成果　授業ごとの HP 掲載によって校内外への SGH 研究開発の周知の機会とした。

③ GUS-Ⅱ（選択者 34 名）

二年間の学びを実践するための方策を研究し実施した。Think Globally, act locally、校内での成果普及を他学年の授業と文化祭で実施、また、京田辺市民部市民参画課、京都府環境部循環型社会推進課と協議ならびに関係団体との連携事業を試行した。

GUSⅡ-1 「第一回 GUSⅡ講座　WALLS」
GUSⅡ-2 「新聞記事から調べ学習の方法論」
GUSⅡ-3 「少女は自転車に乗って(Wadjda)−文化の違いを理解する」
GUSⅡ-4 「具体的な提言に向けて」
GUSⅡ-5 「映画 『TOMORROW パーマネントライフを探して− DEMAIN』」
GUSⅡ-6 「映画 TOMORROW −DEMAIN- パーマネントライフを探して　振り返り 」
GUSⅡ-7 「SGH ブース＠文化祭・フードドライブ」
GUSⅡ-8 「もったいない TASTE OF WASTE」
GUSⅡ-9 「提言書作成」
GUSⅡ-10 「提言のプレゼンテーション」
GUSⅡ-11 「京都府環境部、京田辺市市民参画課との協議に向けて」

成果の普及　内容と成果　授業ごとの HP 掲載によって校内外への SGH 研究開発の周知の機会とした。GUS-B（高校 1 年生全員履修）授業での学習とフィールドワーク成果を報告し、SGH 科目が新たな学習意欲の向上に繋がり、有効な方法であることを周知した。その結果、昨年度 GUS- Ⅰ（高校 2 年生）履修希望者が 25 名だったものが、登録生徒が 51 名へと倍増する成果となった。また、第一回全国高校生フォーラムならびに SGH 甲子園 2018 に出場し、ポスターセッションで取り組みを発表した。イベント参加者へのプレゼンテーションによって、本校の取り組みを周知することに努め、生徒は自らの長所、短所への気づきが明確になった。

④　講演会（B＝高校 1 年生全員対象、Ⅱ＝GUS-Ⅱ　34 名対象）

GUS-B 講演「現代のキーワード「持続可能な社会」－聖書を手がかりとして考えるー」
GUS-B 講演「身近な”Tomorrow”を探して　－岡山県真庭市の取り組み」
GUSⅡ「倫理的な発想が動かしたドイツの脱原発」
GUS-B 講演「共生社会の条件」
GUS-B 講演「福島原発事故の前後」
GUS-B 講演「コスモポリタン」
GUSⅡ講演「フードバンク京都の取り組み」
GUSⅡ講演「提言し、行動する人たち」
GUSⅡ講演「持続可能な社会を考えるために」
GUSⅡ講演「持続可能社会の希求 ジャーナリストの立場から」
GUSⅡ講演「企画書の作成方法を学ぶ」
GUSⅡ講演「生徒が講師に」
GUSⅡ講演「生徒が講師に」

⑤　真庭研修　12 月 13 日（水）～14 日（木）　真庭市によるエコツアー（バイオマスツアー真庭）に生徒 15 名、教員 1 名が参加した。豊かな森林資源を生かし、バイオマス事業を軸に持続可能な社会構築を目指している岡山県真庭市を訪問し、地域資源の有効活用によって化石燃料に代わる様々なエネルギーを実用化している現場を見学することができた。

⑥　東京研修　2018 年 1 月 16 日（火）～17 日（水）　生徒 15 名、教員 1 名が東京フィールドワークに参加した。ドイツ連邦共和国大使館を訪問、学習意図を説明し、環境問題に関する概説を伺った。卒業生である空研究開発機構)職員関川知里氏、UNIOCHA（国連人道問題調整事務所）勤務伊地知亮氏から講演を受けた。外務省訪問、ドイツ大使館訪問、UNICEF ハウス訪問。

⑦　ドイツ・デンマーク　3 月 22 日（木）～31 日（土）参加希望生徒 8 名が参加した。環境問題に対する様々な政策について、ドイツの取り組みを中心に学んできた。ドイツでは、都市や村の規模ごとにどのような政策がとられているか、住民による試みが行われているかを実地研修した。

⑧　成果報告会　2017 年度 SGH 活動報告会
2018 年 2 月 17 日（土）　同志社大学今出川キャンパス良心館にて開催した。同志社大学国際連携推進機構長副学長、圓月勝博教授の挨拶の後、SGH 研究開発実行委員長、山本真司教諭が活動

報告、全国高校生フォーラム参加報告、SGH 甲子園予行、ヨーロッパフィールドワーク計画、真庭フィールドワーク、東京フィールドワーク報告を実施、参加生徒と保護者、教職員、SGH 指定校参加者に三年間の歩みを周知した。

⑨　HP 掲載　本校 HP に SGH のバナーを張り、バイリンガルで報告を掲載した。
http://www.intnl.doshisha.ac.jp/sgh/　　日本語ページ
http://www.intnl.doshisha.ac.jp/sgh/en/　英語ページ

⑦　報告書　第 3 年次に実施した SGH 関連事業について報告書を作成し、年度末に発行した。

7　目標の進捗状況、成果、評価

（　進捗状況と成果　）

（構想）「持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特性に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。その提言を日本語と英語で作成し、日本語版は京都府と京都市に、英語版は国連環境計画（UNEP）と経済協力開発機構（OECD）に提出する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発を本構想の目的とする」

第 3 年次の試みは SGD s をサブタイトルに置いて、一市民がどのように「持続可能社会」や「環境問題」に取り組むことができるのかを模索することことから始めた。三年間のカリキュラムが揃ったが、学年間の有機的な協働に至らなったことは残念であった。GUS-B については、三年目に入り、学年全体を対象とすることと総合的な学習に位置付けたことによって校内に SGH 指定校の意義を一層周知することができた。GUS- I は 25 名と少数クラスであったが、サイズメリットを活かした緻密な学習が実現し、海外研修へとつなげることができた。GUS-Ⅱは提言を担う学年だったが、初期構想と完全に一致するには至らなった。これまでの学びから「持続可能社会」は「無駄を軽減する社会」「発展のない豊かさ」ではないかと考え、フードドライブを全校的に実施し、京田辺市とフードバンク京都と提携することができた。また、マイクロプラスティックに関する学びから京都府環境部循環型社会推進課との協議に入っている。

（構想）「課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。」

初年度から運用している学校 HP の SGH 専用ページはバイリンガルで機能している。校内では学年や講座を超えた試み、「生徒が講師」を多用し、プレゼンテーション能力と聴講能力の伸長に努めた。

（　評価　）生徒の評価に関して　高校 1 年生（283 名全員履修）に関しては、適宜ポートフォリオとレポートを紙媒体と電子データ（本校サーバー上に設置している「授業ドライブ」）で提出を義務付けている。（今年度は全員提出）この全員履修学年で初めて試みたことは、GPS-Academic の実施である。次年度以降、定点的に履修選択者（51 名）と指定生徒（SGH 委員会が任意に指定する SGH 科目非履修生徒）が SGH プログラムによってどのように変化するのかを多角的、客観的に評価することができる。これまでのポートフォリオやレポートから見ることができなかった生徒の潜在的能力が開示されることを願っている。GUS-Ⅱでは、Google Classroom を使用して生徒と担当教諭が双方向的にコミュニケートできた。数値化という側面では従来型のレポートやポートフォリオの評価方法に留まっていることが改善点である。語学資格テスト以外の客観的な数的評価方法を更に研究する必要がある。

（SGH 中間評価で指摘を受けた点に関して）　第一に「海外研修先の意味づけが不明確であり、内容について本事業の趣旨としてふさわしいかどうか再考されたい」に関して、構想調書作成時との状況変化と本校研究開発の仮説との相違を明確化し、次善策を策定中である。具体的にはすでにオーストリア・モデルは破綻しているという評価、ドイツの再生エネルギー構想は神話であるという見解があるなかで、「環境先進国」の定義や研修先の再設定を含めて検討すべきと課題として改善策を模索中である。次に「自己評価や成果の提示が明確にできておらず、評価のエビデンスに必要な調査を充実させる必要がある」について、GPS-Academic を導入し、複数年にわたる客観的な評価方法を採用することとした。また、試作中（昨年度報告書掲載）の自己評価ルーブリック基準表、アンケートと表現能力と言語能力調査を充実して実施するべく研究を継続している。

＜添付資料＞目標設定シート

８　次年度以降の課題及び改善点

（研究開発・実践の過程で生じた課題と取り組み）初期構想との落差が最大の課題である。「環境先進国」という概念が根底から問われ始めていること、わが国ですでに実施されているか計画されている事業の再検証が必要なこと、SGH 研究開発に割り当てられている物理的な要件の解消が求められる。中間評価で「海外研修先とその内容に関して」の整合性に関する指摘がなされているが、生徒にフォリスティックに世界を把握して欲しいと願うあまり、フォーカスが絞り切れなかったことは否めない。生徒にとって身近な環境問題に限定して「いますぐにできる」実践の先行研修先を選定したい。また、同様に指摘を受けた「自己評価と成果の提示」方法の研究については顕在化した課題と密接に関連している。提言を具体化するための学習の積み上げと実践の方法を開発する必要がある。

（成果の普及）

1）初年度から実施している授業と事業計画をバイリンガル（日英）で HP に掲載することを継続して実施する。（SGH 科目実施日から数日以内に更新）
2）「生徒が講師」特別授業（講演、新しいアクティブラーニングなど）やフィールドワークを体験した上級生が全員履修の一年生に講演を実施する。

3） 卒業生（SGH 一期生）授業　3 年年間 SGH 科目を履修した卒業生を招いて講演を実施する。全国高校生フォーラム出場者、SGH 甲子園出場者、京田辺市、京都府との提携事業を大学生になっても継続する履修経験者を対象とする。
4） 保護者や地域住民を対象にした研究発表ができないかを検討する。
5） 京都 SGH ネットワーク（仮称）を利用する教研活動が実施できないか検討する。
6） 全国高校生フォーラム（12 月 15 日実施予定）への参加。
7） SGH 甲子園 2019 への参加。
8） SGH 研究開発周知に資するブロシュア―の作成。
9） 研究報告書（年次報告）の作成と配布。

【担当者】

担当課	ＳＧＨ研究開発委員会	ＴＥＬ	0774-65-8911
氏　名	戸田光宣	ＦＡＸ	0774-65-8990
職　名	教頭	e-mail	mitoda@intnl.doshisha.ac.jp

中間評価を受けて　2017 年度総括と展望

1　中間評価結果

２９文科初第９２８号
平成２９年９月２９日

文部科学省初等中等教育局長　高橋道和

平成 29 年度「スーパーグローバルハイスクール」の中間評価結果について

中間評価結果

○これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。

評価のコメント

○中心的なプログラムについては英語との関連が図られ、十分な成果が期待できる厚みのある活動が適切に実施されており、評価できる。
○海外研修先の意味づけが不明確であり、内容について本事業の趣旨としてふさわしいかどうか再考されたい。
○自己評価や成果の提示が明確にできておらず、評価のエビデンスに必要な調査を充実させる必要がある。

2　（中心的プログラム）　提言に関して

指定一期生は次の期間に研究成果を踏まえ、懇談と提言を実施した。

2-1
（1）　提言機関　京田辺市　京田辺市市民部市民参画課
（2）　日時　2018 年 2 月 7 日（水）、21 日（水）、28 日（水）
（3）　面談者　市民活動推進課係長　坂本健二氏、主事　今堀誠弥氏、主任　簇生亮氏
　　NPO　チームせせら goo 代表　佐野良一氏、副代表　新井達雄氏
（4）　学校を結節点とした「持続可能社会」への一歩　フード・ドライブ実施提言。
2-2

(1) 提言機関　　京都府　京都府環境部循環型社会推進課
(2) 日時　2018 年 3 月 20 日（火）
(3) 面談者　循環・リサイクル担当副課長（総務;・総括）　加地将徳氏
　　文化スポーツ部文教課　小・中・高担当　主査　山段忠正氏
(4) ヨーロッパ研修の成果から「マイクロプラスティック」問題の解決に向けて、府内企業との連携を模索。

3　海外研修に関して　　初年度構想調書に沿った現地下見を実施した結果、真庭モデルの原点であるオーストリア・モデル（ギュッシング　欧州エネルギーセンターEEE）の成果が後退しているとの印象を受けた。そのために、当初予定のフィールドをドイツ連邦中心にシフトすることにした。また、「持続可能社会」モデルの定義を広義に設定したために、ノルトライン・プファルツ州の Bio Energiepark、重工業地帯の再開発プロジェクト、省エネ住宅地を中心とするギルド制度の回復やバーデン＝ヴュルテンベルク州フライブルクに留まらずブレゲンツの循環型集落のあり方にまで範囲を拡げた。この意味で、限られた期間にもかかわらず総花的な内容でフォーカスを絞り切れないプログラムに受け取られかねない結果となったことは否めない。次回海外研修においては指摘を十分に反映し、構想に沿った堅実なフォーカシングを心がけたい。

4　自己評価に関して　　生徒個々の自己評価ルーブリックを試作し、実施したが、十分な結果分析を実施することができなかったことは指摘の通りである。また、教員への普及と調査（Fragebogen）に関しても十分に分析できたとは言い難い。指摘を受けた評価エビデンスを確実なものにする改善策として、一年次(学年必修 GUS-B)において、「GPA-Academic」（Global Proficiency Skills program）を実施（診断レポート添付）し、継続的、定点的に生徒の成長を見守ることにした。また、検証と普及に関しては、近畿圏の指定校を中心に緊密な関係を構築する中で、継続的に情報収集と発信を、ホームページ、アンケート等を駆使して実施したい。

5　授業に関して　指定から三年が経過し、一定の方法論を用いたカリキュラムが成熟しつつあるので、懸案である「手引き書」ないしは「テキスト」を完成させたい。つまり、実践と内外の研究から得られた方法論を普遍化する試みに関して、英語を中心とした文献（特に、翻訳に揺れがある用語、Think-Pair-Share、 Jigsaw、Round-Robin、Pear instruction clicker、Project-Based Learning　etc)、用語の翻訳を含む形で結実したい。

6　追加教材と方法　iPad を SGH クラス専用に用いながら自由に検索するクラスを実現している。また、Google-classroom を用いて生徒間、教師との綿密なコミュニケーションを実現している。このようにポートフォリオのデータ交換によって、時空的なロスを極力抑えた合理的な学習環境を構築している。

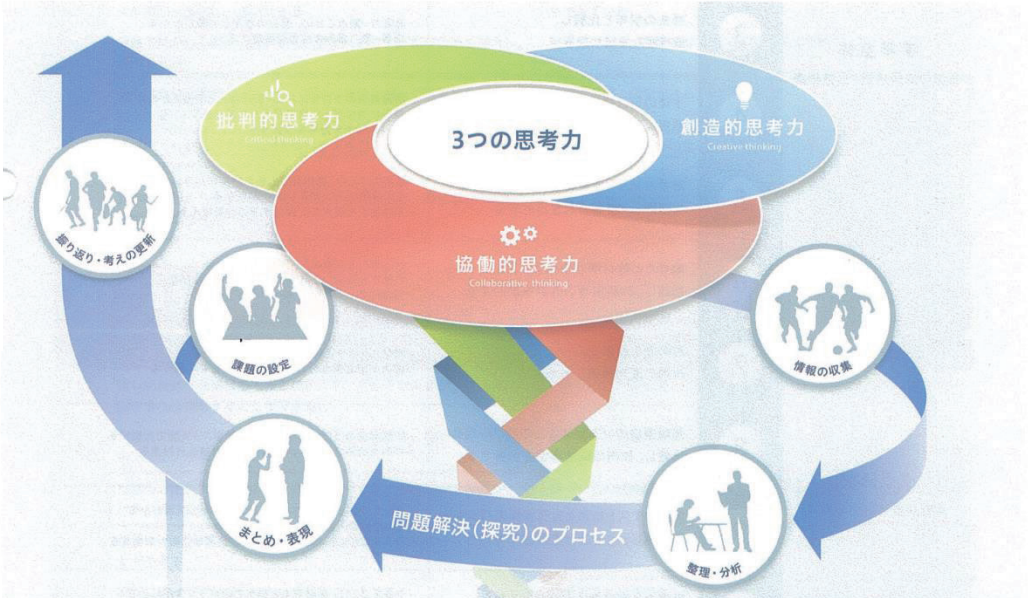
Benesse®

GPS-Academic®
Global Proficiency Skills program®

社会で必要な3つの思考力のアセスメント

診断レポート
Diagnostic report

2017年度　5月実施　26435　京都　同志社国際　1年生



批判的思考力
必要な情報を正しくとりだし、いろいろな観点から考え、自分の考えを筋道を立てて説明するための思考力

情報を抽出し吟味する
論理的に組み立てて表現する

協働的思考力
他者との共通点・違いを理解し、合意を得たり、気づきを得たりして人とかかわりあうための思考力

他者との共通点・違いを理解する
社会に参画し人と関わりあう

創造的思考力
情報をつないだり、別の場面に応用したりすることで、問題を見つけ新たな解決策を生み出す思考力

情報を関連づける・類推する
問題をみいだし解決策を生み出す

GPS-Academicでは、社会で必要な3つの思考力を測定します。
これらの3つの思考力は

課題の設定 | 情報の収集 | 整理・分析 | まとめ・表現 | 振り返り・考えの更新

という問題解決(探究)のプロセスの中で、特に発揮され、育成されます。

20170627030201700 1BCGA01264351-00000001
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000173-001/018

GPS-Academic
Global Proficiency Skills program®
社会で必要な3つの思考力のアセスメント

2017年度 5月実施

26435
京都 同志社国際 1年生

この診断レポートの構成と使い方

	No.	タイトル	活用ポイント
学年全体 指導の成果検証・目標把握	1	学年全体としての 到達度(テスト結果)を把握する	・思考力・観点ごとの学年全体結果がわかる ・ルーブリック・Candoの内容がわかる ⇒学年全体としての到達度を大まかに捉える
	2	この学年の変化・伸びを把握する	・思考力・観点ごとの、過去3回前からの変化がわかる ⇒指導・取り組みの成果を検証する
	3	過去の学年と比較し、 取り組みを振り返る	・思考力・観点ごとに、過去の学年との差がわかる ⇒指導・取り組みの成果を検証する
	4	生徒の自己評価から学年の強みを 把握し、強みを生かす指導を検討する	・問題解決のプロセスごと、思考力ごとの強みがわかる ⇒強みにつながった指導が何かを振り返り、 強みを活かす指導を検討する
	5	思考力テスト結果と自己評価のバランス を把握し、指導方針を検討する	・思考力ごとの、客観評価と自己評価のバランスで、 どの象限の人数が多いのかがわかる ⇒どの象限を重点的に指導するのかを考える
	6	思考力と教科学力のバランスを 把握し、教科指導の方針を検討する	・教科学力と思考力のバランスがわかる ・思考力を意識した教科指導ポイントがわかる ⇒今後の教科指導の方針を検討する
クラス間 身近な成功事例の発見	7	思考力を比較し、 校内の成功事例を分析する	・思考力をクラス間で比較する ⇒校内での各思考力の指導方法の改善を検討する
	8	問題解決のプロセスごとの自己評価を 比較し、校内の成功事例を分析する	・問題解決のプロセス別の自己分析をクラス間で比較する ⇒校内での各プロセスの指導方法の改善を検討する
	9	思考力テスト結果と自己評価のバランス を把握し、指導方針を検討する	・クラスごとに、思考力と自己評価のバランスがわかる ・どの象限の人数が多いのかがわかる ⇒クラスごとにどの象限を重点的に指導するのかを考える
	10	思考力と教科学力のバランスから、 教科指導改善のヒントを得る	・クラスごとに、教科学力と思考力のバランスがわかる ・象限ごとの教科指導ポイントがわかる ⇒校内の各教科での成功事例を分析し、指導改善のヒントを得る
クラス別 具体的な指導の振り返り	11	クラスとしての到達度(テスト結果)を 把握する	・思考力・観点ごとのクラス全体結果がわかる ・ルーブリック・Candoの内容がわかる ⇒クラスとしての到達度を大まかに捉える
	12	生徒の自己評価からクラスの強みを 把握し、強みを生かす指導を検討する	・問題解決のプロセスごと、思考力ごとの強みがわかる ⇒強みにつながった指導が何かを振り返り、 強みを活かす指導を検討する
	13	思考力テスト結果と自己評価のバランス を把握し、指導方針を検討する	・思考力と自己評価のバランスがわかる ・優先的に指導すべき生徒がわかる ⇒面談等で、ピックアップされている生徒へのフォローをおこなう
	14	思考力と教科学力のバランスを 把握し、教科指導の方針を検討する	・教科学力と思考力のバランスがわかる ・優先的に指導すべき生徒がわかる ⇒面談等で、ピックアップされている生徒へのフォローをおこなう
	15	生徒一人ひとりの強み・課題を把握し、 個別指導に活用する	・生徒一人ひとりのテスト・自己評価結果を一覧で みることができる ⇒個々の強み・課題を把握し、指導の参考にする

20170627030201700 1BCGA01264351-00000002
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000173-001/018

GPS-Academic®
Global Proficiency Skills program®
社会で必要な3つの思考力のアセスメント

2017年度 5月実施　26435
京都 同志社国際 1年生

学年全体

① 学年全体としての到達度（テスト結果）を把握する

もっとも人数の多い評価

批判的思考力 Critical thinking　S A **B** C D

	情報を抽出し吟味する	論理的に組み立てて表現する
S	資料の複雑さ・抽象度に関わらず、目的に応じてそこに含まれるすべての情報を抽出し、活用できる	納得感のある効果的な主張・回答があり、相手を惹きつける主張を提示できている
A	複雑で抽象的な設定の資料から、目的に応じて必要な情報を抽出し、活用できる	納得感のある、効果的な主張・回答が提示できている
B	やや抽象的な設定の資料から、適切な指示に従って情報を抽出し、活用できる	明確な主張・回答がある
C	具体的でわかりやすい設定の資料やテキストから、適切な指示・指導に従って情報を抽出できる	不明確だが、何らかの主張・回答がある
D	具体的でわかりやすい設定の資料やテキストから、自分なりに必要な情報を取り出そうとする	無解答または評価外

協働的思考力 Collaborative thinking　S A **B** C D

	他者との共通点・違いを理解する	社会に参画し人と関わりあう
S	新しい見方や多様な考え方を踏まえて、相互にさまざまなアイデアを提供または共有することができる。	提示された問題に対して、自分がその解決の主体者になろうとしている
A	相互にアイデアを提供または共有することができ、違いを指摘しながらアイデアを構築することができる	提示された問題の解決に主体的に参画している
B	相互のアイデアを提供または共有しようとし、その違いを確認し、受け入れることができる	提示された問題の解決を実行している人々を支援する意思がみられる
C	相互にアイデアを提供または共有しようとし、その違いを確認することができる	提示された問題に対し、その解決の必要性は理解している
D	相互にアイデアを提供または共有しようとする	無解答または評価外

創造的思考力 Creative thinking　S A **B** C D

	情報を関連づける・類推する	問題をみいだし解決策を生み出す
S	資料に示される内容と既有知識を結びつけ、それらを昇華した上で、他の事例に転用・適用できる	提示されたテキストの範囲を超えて解決のための条件を検討でき、実現可能性が高く独創性のある解決策を提案できる
A	既有知識および与えられた資料をもとに、複数の情報の本質を抽出・統合し、他の事例に転用・適用できる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件をすべて満たした実現可能性の高い解決策を提案できている
B	与えられた資料と、他の事例や既有知識との相似性や関連性を見いだし、他の事例に転用・適用できる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件をすべて満たした解決策を提案できる
C	与えられた資料と、他の事例や既有知識との相似性や関連性を見いだすことができる	テキストに提示された範囲で、問題解決のための条件を部分的に満たした解決策を提案できる
D	与えられた資料のテーマによっては、他の事例との相似性や関連性を見いだすことができる	無解答または評価外

※ルーブリック（Cando）は一部を抜粋して掲載しています。詳細は「教師用ガイド」を参照ください。

20170627030201700 1BCGA01264351-00000003
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000174-002/018

GPS-Academic
Global Proficiency Skills program
社会で必要な3つの思考力のアセスメント

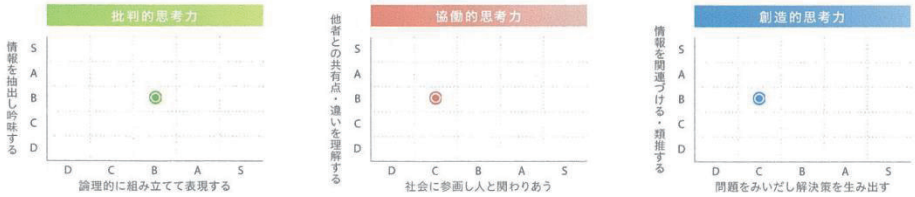
2017年度 5月実施　　26435
京都 同志社国際 1年生

学年全体

② この学年の変化・伸びを把握する

テスト結果

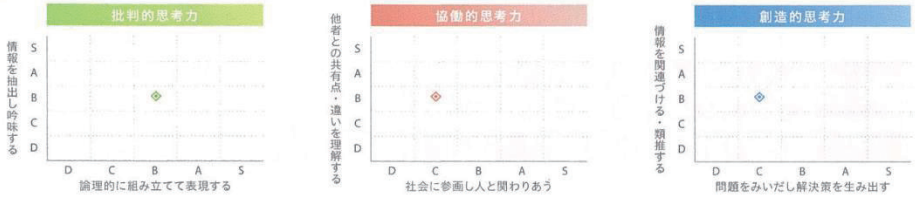
凡例 ◉今回 ●前回 ▲前々回 ■3回前



③ 過去の学年と比較し、取り組みを振り返る

テスト結果

凡例 ◈今年度 ◆昨年度 ◇一昨年度



④ 生徒の自己評価から学年の強みを把握し、強みを生かす指導を検討する

自己評価

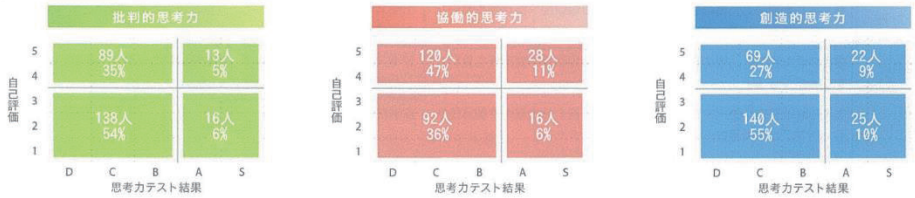
凡例 強み

思考力 ＼ 問題解決のプロセス	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力別平均
批判的思考力の自己評価	3.2	3.5	3.4	3.1	3.3	3.3
協働的思考力の自己評価	3.6	3.9	3.5	3.4	3.6	3.6
創造的思考力の自己評価	3.2	3.4	3.2	3.2	3.2	3.2
プロセス別平均	3.3	3.6	3.4	3.2	3.4	

⑤ 思考力テスト結果と自己評価のバランスを把握し、指導方針を検討する

テスト結果 × 自己評価

※象限別の指導ポイントについて「教師用ガイド」を参照ください。



2017062703020170018CGA01264351-00000004
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000174-002/018

GPS-Academic®
Global Proficiency Skills program®
社会で必要な3つの思考力のアセスメント

2017年度 5月実施

26435
京都 同志社国際 1年生

学年全体

6 思考力と教科学力のバランスを把握し、教科指導の方針を検討する

［比較対象］

教科指導のポイント

	国語	数学	英語	思考を促す質問例
批判的思考力	■自分の書いた説明文を読み返し、的確にわかりやすく表現できたかという観点で推敲をする。 ■情報を抽出し統合することで、その文章が何を課題として何をいいたい文章なのかを見抜く。	■どのような条件で事象が変わるのかを考え、モレ・ダブリなく場合分けをする。 ■なぜその定理・公式や解法を使うのかを、論理的に説明する。	■問題文やイラストなどから、解答に必要な情報を取り出す。 ■自分の意見や考えを、根拠を明示して論理的に説明する。	「なぜそう考えたの？」 「その情報は正しい？」 「本当にそういえる？」 「まとめるとどういうこと？」
協働的思考力	■文章で表現された多様な他者の価値観や解釈にであい、自分との共通点や違いを考えることで、自分の考えや価値観を広げる。	■グループで、複数の解法をだし、その中でどの解法がもっともよいと思うか、理由をつけて説明する。	■英語の文章を異文化理解の観点で読ませて、共通点と相違点を考える。	「ほかの人も同じように考えるかな？」 「（ある社会問題を）あなたなら、どうやったら解決できると思う？」 「ほかの人との共通点は？相違点は？」 「○○の立場で話しているのは誰だろう？」
	■教科で学んだことから、さらに探究し主体的に解決したい課題を設定し、人との議論を通して多様な意見を知り、自分の考え・主張を深める。 ■グループ学習などで、他者の意見がどのような背景から出てきたのかやどのような点が自分の意見と異なるのかを考え、グループとしての意見をまとめる。			
創造的思考力	■文章を読んで、提起された問題と似たような事例を考えたり、その解決策を模索したりする。 ■読んだ作品から読み取ったテーマや課題提起を、現在の社会問題に関連づけたり、新たな解決策を生み出したりする。	■一つの問題に対し既習事項がどのように生かせるかを多面的に考え、複数の解法を導く。 ■ある単元で学んだことと別の単元で学んだことのつながりがわかる。 ■想定されるいろいろな解き方の中から、最適な解法を選び答案として示す。	■知らない単語や構文を見たときに、既有の知識や周辺の単語などから意味を類推する。 ■本文で述べられている内容の本質を見抜き、必要な情報をカバーして要約する。	「ほかの教科や単元で習ったことが使えないかな？」 「似たようなことから考えると？」 「ほかの状態にあてはめてみると？」 「これらのことを関連づけると何がいえる？」 「たとえばどういうこと？」 「一番の問題は何だろうか？」

20170627030201700 1BCGA01264351-00000005
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000175-003/018

GPS-Academic
Global Proficiency Skills program
社会で必要な3つの思考力のアセスメント

2017年度 5月実施

26435
京都 同志社国際 1年生

クラス間

7 思考力を比較し、校内の成功事例を分析する

思考力		学年全体	0組	1組	2組	3組	4組	5組	6組	40組
批判的思考力総合	S	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A	29	0	4	4	5	8	4	4	0
	B	158	0	29	19	34	28	24	23	1
	C	63	1	12	14	6	7	12	10	1
	D	6	0	0	1	1	0	2	2	0
協働的思考力総合	S	1	0	0	0	1	0	0	0	0
	A	43	0	5	7	5	11	7	8	0
	B	161	0	35	24	33	25	22	20	2
	C	49	1	5	7	7	7	12	10	0
	D	2	0	0	0	0	0	1	1	0
創造的思考力総合	S	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	A	47	0	10	2	14	10	5	6	0
	B	134	0	24	16	24	23	25	21	1
	C	72	1	11	20	8	9	12	10	1
	D	3	0	0	0	0	1	0	2	0

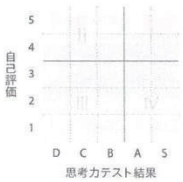
8 問題解決のプロセスごとの自己評価を比較し、校内の成功事例を分析する

プロセス	学年全体	0組	1組	2組	3組	4組	5組	6組	40組
課題の設定	3.3	2.8	3.4	3.1	3.3	3.4	3.4	3.3	2.8
情報の収集	3.6	3.0	3.7	3.5	3.6	3.6	3.6	3.5	3.2
整理・分析	3.4	2.5	3.4	3.3	3.5	3.5	3.2	3.3	3.3
まとめ・表現	3.2	2.3	3.2	3.2	3.3	3.4	3.3	3.1	3.3
振り返り・考えの更新	3.4	2.7	3.4	3.2	3.5	3.4	3.4	3.2	3.5

9 思考力テスト結果と自己評価のバランスを把握し、指導方針を検討する

思考力ごとに、縦軸に自己評価、横軸にテスト結果をとり、縦軸は3.5の前後で、横軸はBとAの間で分けた4つの象限にそれぞれ何人の生徒が含まれるのかを示しています。

※象限別の指導ポイントについて「教師用ガイド」を参照ください。



批判的思考力

0組	1組	2組	3組	4組	5組	6組	40組
0人 0人	19人 3人	10人 1人	18人 1人	16人 5人	14人 1人	11人 2人	1人 0人
1人 0人	22人 1人	24人 3人	23人 4人	19人 3人	24人 3人	24人 2人	1人 0人

協働的思考力

0組	1組	2組	3組	4組	5組	6組	40組
0人 0人	26人 4人	15人 3人	25人 4人	16人 9人	19人 5人	18人 3人	1人 0人
1人 0人	14人 1人	16人 4人	15人 2人	16人 2人	16人 2人	13人 5人	1人 0人

創造的思考力

0組	1組	2組	3組	4組	5組	6組	40組
0人 0人	13人 4人	11人 1人	12人 6人	12人 6人	13人 4人	7人 1人	1人 0人
1人 0人	22人 6人	25人 1人	20人 8人	21人 4人	24人 1人	26人 5人	1人 0人

20170627030201700 1BCGA01264351-00000006
088-701002-X-0628-L3-G26435-H0008-F00013-0000013-00000175-003/018

Ⅰ　スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

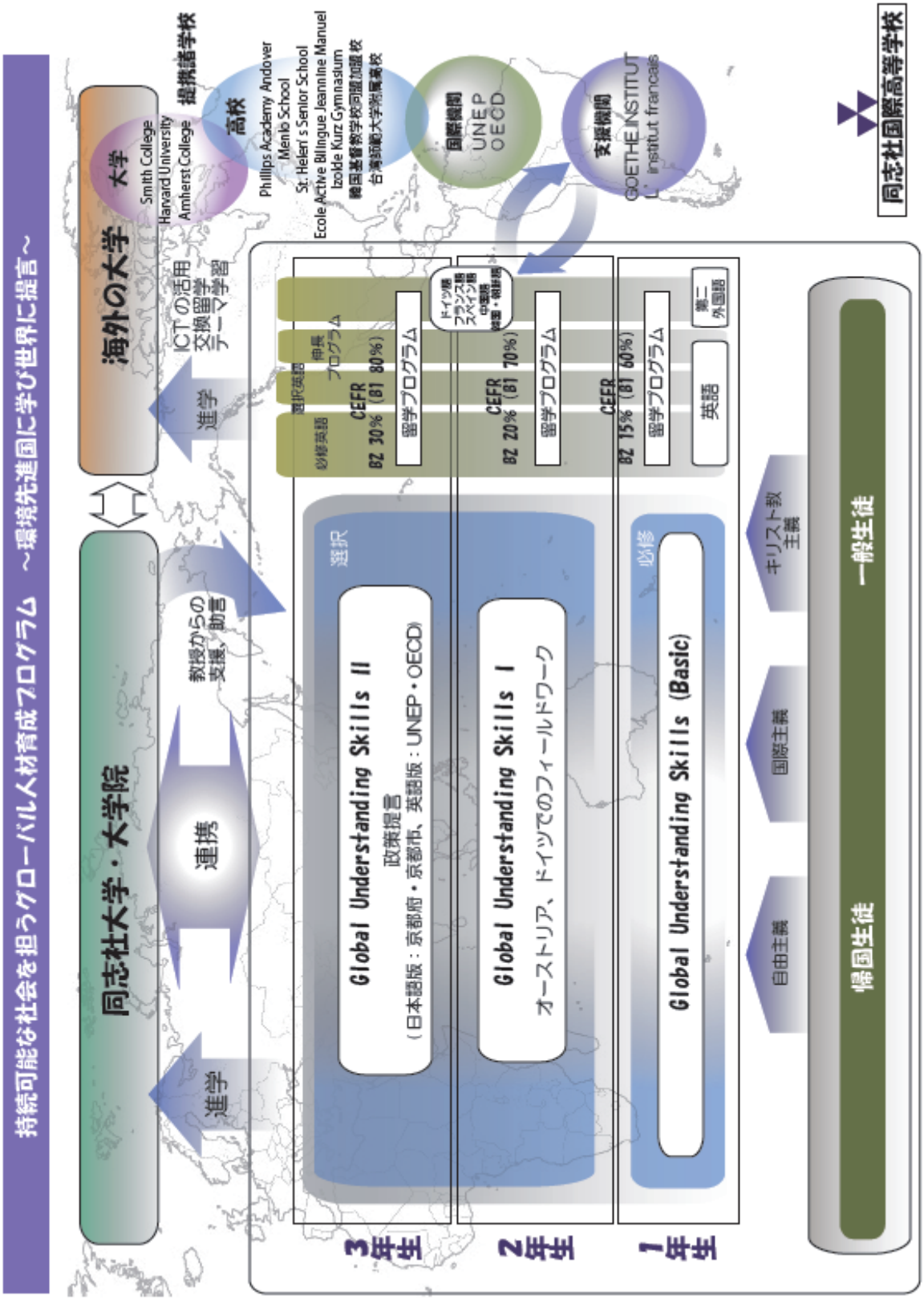
【別紙様式５】平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td rowspan="2">指定期間
27～31</td><td>ふりがな</td><td colspan="3">どうししゃこくさいこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">京都府</td></tr>
<tr><td>①　学校名</td><td colspan="3">同志社国際高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="2">平成２６年度　在籍者数８３３名</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>２７０</td><td>６０</td><td>６０</td><td></td><td>３９０</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="6">持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム
～環境先進国に学び世界に提言</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="6">１年生必修科目「Global Understanding Skills（Basic）」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の実例を学習する。２年生選択科目「Global Understanding Skills Ⅰ」では、資源の有効活用や循環運用を、海外実地研修で学習する。継続履修する３年生選択科目「Global Understanding Skills Ⅱ」では、現地での学習を発表し、持続可能社会の実現に向けた方策を、国際機関や地域社会に提案する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1全体</td><td colspan="6">(1) 目的・目標
持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特性に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。その提言を日本語と英語で作成し、日本語版は京都府と京都市に、英語版は国連環境計画（UNEP）と経済協力開発機構（OECD）に提出する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発を本構想の目的とする。
(2) 現状の分析と研究開発の仮説
３９か国からの帰国生徒と国内で生まれ育った一般生徒がともに学ぶ本校では、帰国生徒の生活経験が、社会的事象に対する幅広い視野の獲得に十分には結びつけられておらず、生徒間での共有も必ずしも十分には行われていない。帰国生徒の個別体験を全生徒が共有するとともに、世界的課題について系統的に学ぶことで、自己の経験のみによって形成された世界観から脱却し、より普遍的な課題の中に、自らの体験を位置づけることができるようになる。その際、同志社大学、同志社女子大学から講師を招聘しテーマに即した講演を企画することで、一貫校としての連携がより組織的なものとして強化される。
また、世界的な課題を解決するための具体的方策を考察することで、現状においては教科指導内に留まっている課題発見能力、プレゼンテーションやディスカッションの能力の育成を、実際の政策提言の策定の作業にも拡大していくことができる。こうして策定したものを、最終的に関係諸機関に対して提言することにより、その提言が具体的な働きかけの次元に発展させられる。
以上の方法によって、地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーを育成することができると考えられる。
(3) 成果の普及
課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** 持続可能な社会に向けた政策提言のため、以下の科目を新設する。 ア「Global Understanding Skills(Basic)」【基礎的知識の習得】 イ「Global Understanding SkillsⅠ」【課題解決学習、フィールドワーク】 ウ「Global Understanding SkillsⅡ」【課題解決学習】 ア～ウの科目を設置し、環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例を参考に持続可能な社会について学び、提言できるグローバル人材育成のためのプログラムを開発する。 **(2) 実施方法・検証評価** ≪実施方法≫ 【１年生】 ・帰国生徒、一般生徒の生活経験の共有のためのグループワークを実施し、グローバルな社会課題につながる経験を抽出する。 ・大学の教員を講師として招聘し、グローバル社会や環境問題についての基礎的知識を獲得させる。 ・環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例について学習する。 【２年生】 ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークへの事前学習をする。 ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークを実施をする。 ・フィールドワークの報告冊子、ホームページを作成する。 ・海外提携校とのディスカッションやテーマ学習を行う。 ・政策提言の準備として関係諸機関についてリサーチし、関係諸機関との質疑を行う。 【３年生】 ・京都府、京都市、国際機関（UNEP、OECD）に日本語、英語で政策案を立案し、政策提言を行う。 ・小学生への環境教育を行う。 ・全校生徒に対して発表会を行う。 ≪検証評価≫ ・レポート、報告書、政策案を担当教員と招聘した講師が評価する。 ・政策に対する関係諸機関からのフィードバックを受ける。 ・生徒自身による相互評価を行う。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 特になし。
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** 既存の選択科目「English Elective」として２年生に新講座「Research, Debate, and Presentation」を設置し、３年生には「Advanced Academic English」を設置する。2 年生では、プレゼンテーション、ディベートの方法、さらに議論の質を高めるためのリサーチスキルを身につけさせる。3 年生では、『Cambridge Academic English』を用いて基本的な文献調査の方法、レポート作成方法などの基礎的なスキルを身につけさせる。 **(2)課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** なし。 **(3)グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法** Smith College、 Phillips Academy Andover、 Harvard University など提携校へのサマープログラムへの派遣を継続する。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、台湾、大韓民国の提携校との交換留学を継続すると同時に、課題研究でプロジェクトを立ち上げ、提携校の高校生との意見交換のための議論の場を設定していく。
⑨その他特記事項		課外で「Global Enterprise Challenge」（アントレプレナーシップ開発センター主催）に応募し、世界大会への出場、入賞を目指す。「Global Enterprise Challenge」は、世界中の高校生によるビジネスプランコンテストで、取り上げられる課題はグローバルな社会課題が中心である。平成 25 年度は校内予選を経た本校代表が国内 1 位となり世界大会に出場した。

Ⅱ　実施報告

1　文科省提出概念図



２　開発カリキュラム

2-1●GUS-B=Global Understanding Skills Basic（第１年次）

2017 年度シラバス

学　　年	高校１年	必修・選択の別	必修
教 科 名	総合的な学習	単　位　数	１単位
科 目 名	Global Understanding Skills（Basic)	担　当　者	山本真司・戸田光宣・佐藤靖子・帖佐香織
講　　座	1~6 講座		

科目のねらい（目標）

世界的に解決すべき問題（グローバルイシュー）を取り上げ、それらの問題が現在解決に向けて、どのように取り組まれているかを学ぶ。例えば、「環境」をキーワードに学ぶ場合、持続可能な社会を目指す先進的事例を、国内で行われている地域を訪ねて（岡山県　真庭市フィールドワーク）体験的に学ぶ。また、高２選択科目として設置している GUS‐Ⅰのフィールドワーク対象であるドイツとオーストリアの取り組みを学び両国の大使館と EU 代表部、外務省を訪問する（東京フィールドワーク）、環境問題に対する問題意識とを喚起し、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーとなるための基礎的な力を育成する。

学習の進め方

全体に対する講義の形式とグループワークを中心としたクラス単位の授業の双方を生かした形の授業です。学習者中心（生徒中心）の授業手法、双方向的授業、グループダイナミクスを用いた展開、KJ 法、ポスターセッション、ギャラリーウオークなど問題発見、解決型のクラス運営を試行する。

生徒の学習上の留意点

大学レベルの講演、問題意識を喚起する映画、多種多様な実例など、提供される教材に好奇心と想像力を持って取り組んで欲しい。世界的規模で解決すべき課題（グローバルイシュー）に気付き、それを自己の課題としてとらえる基礎的方法を学びたい。その一例として環境、とりわけ化石エネルギーへの依存からの脱却、クリーンで持続可能な自然エネルギーの利用について先進的な取組をしている国や地域について実例を学ぶことを念頭に置くこと。多様なメディアにアンテナを張り、「環境」「持続可能」「批判的思考」「問題発見型学習」といったキーワードに反応することが求められる。

評価方法

学年末に認定、不認定を評価する。

使用教材

適宜、授業中に配布する。

授業計画

学期	授業内容	各単元のねらい
1	グローバルな社会課題について MDG s から SDG s へ グローバル化時代における国際協力 講演　現代のキーワード持続可能な社会を巡って(大学教員) 映画自主上映「TOMORROW パーマネントライフを探して」 レクチャー　真庭の挑戦	身近な経験にもとづく問題意識の共有から、グローバルな社会課題にはどのようなものがあるかを概説的に学んだ上で、グローバル化時代において私たちが世界を良くするためにできることは何かを考える機会をもつ。国連の取り組みや環境問題について、基本的な知識を得る。 また、講演と環境をテーマとした映画によって問題意識を喚起する。
2	環境経済学の基本的な考え方 政策学の基本的な考え方 京都の森林活用事例について 岡山県真庭市の取り組み －真庭フィールドワーク ドイツとオーストリアの取り組み	環境経済学や政策学の考え方を学び、環境問題を解決していくための方策について探る。国内外の実際の取り組みについて知る。 ＊真庭フィールドワーク　希望者が定員を超える場合は志望動機書、面接等で選考する。費用は原則、文科省 SGH 研究開発費で支弁される。
3	－東京フィールドワーク ドイツとオーストリアの実践 エネルギーシフト ヨーロッパの都市計画や政策事例について	日々の生活に直接的にかかわるエネルギーの問題を含め、より良い都市計画や政策について検討していく。 ＊東京フィールドワーク　希望者が定員を超える場合は志望動機書、面接等で選考する。費用は原則、文科省 SGH 研究開発費で支弁される。

2-2●GUS-I=Global Understanding Skills Ⅰ（第２年次）

2017年度シラバス

学　　年	高校２年	必修・選択の別	選択
教科名	任意設置科目	単　位　数	２単位
科目名	Global Understanding Skills Ⅰ	担　当　者	坂下淳一、帖佐香織
講　　座	１・２講座		

科目のねらい（目標）

SGH科目であるGUS Basicで身につけた、グローバルな社会課題や環境問題、環境問題に対する国際的な取り組みや環境先進国・地域の政策についての知識、課題解決のための思考力、リサーチやコミュニケーション、プレゼンテーションのスキルをさらに発展させていくことを目的とした講座である。フィールドワークの事前学習として、欧米の先進事例について体系的な知識を構築し、問題意識を育むことを目指す。また、政策提言のための具体的実践として、校内のゴミ問題について改善に取り組む。

「正解のない問題」に対して、異なる教科の教員が担当するアクティブ・ラーニングを取り入れた授業によって幅広い視野を養い、また同志社大学政策学部との連携、ドイツのIsoldez Kurz Gymnasiumの生徒との授業、国内外の専門家の特別授業や質疑等を通して、様々な知識や価値観との出会いを楽しみ、社会課題の解決に前向きに取り組むことのできるグローバル・リーダーの育成を目標とする。

学習の進め方

以下の３つの内容を中心に進める。

【１】ドイツを中心に、ヨーロッパの環境問題とその政策・対策について学ぶ。
　　さらに、一部の生徒により、ドイツなどでの研修を行う。

【２】問題解決の方法論について学ぶ。

【３】学校や地域に具体的に反映できる対策を考え、提言・実行する。特に今年度は、ゴミ問題に限定して取り組む。

生徒の学習上の留意点

・知識を得ることはもちろんのことであるが、知識を体系的に理解し、世界、日本、地域や学校というそれぞれのレベルの課題に対して、自らの思考によって問題解決の検討をする姿勢を持つこと。
・まずは、個人の知識獲得と状況の理解を必要とする。その上で、グループによる検討を経て、理解度を高める。（いわゆる、単なる調べ学習にならないようにすること）
・また、単なる思いつきではなく、論理に基づいた独創的なデバイスの運用や政策を提言する姿勢を常に持つこと。

評価方法

授業に臨む積極性、テーマに対する調査・思考力、提出物を中心に評価を行う。場合によっては試験を行う。

使用教材

テーマによって、担当者が随時準備する。

授業計画

学期	授業内容	各単元のねらい
1	【１】ドイツなどの環境問題について	ドイツを中心に、環境問題とその政策や対策について、カテゴリー分けを行い、調査する。
	【２】問題解決の方法論について	問題解決の方法論を実際の社会問題をテーマに学ぶ。
	【３】学校のゴミ問題について	実態を調査する。
2	【１】ドイツなどの環境問題について	環境問題についてのそれぞれのカテゴリーの状況や諸政策をまとめて共有する。 その中で、実際に研修すべきエリアや機関を限定していく。
	【３】学校のゴミ問題について	問題解決の方法論を元に、解決策を立案する。
3	【１】ドイツなどの環境問題について	日本とドイツなどの欧米諸国の政策や対策を比較しながら、問題点や疑問点をあげる。 駐日の海外諸機関などへ質問を行う、あるいは研修を行うことにより、思考をより深める。 ドイツを中心にした現地研修を行うための準備を行う。

2-3●GUS-II=Global Understanding Skills Ⅱ（第３年次）

2017 年度シラバス

学　年	高校３年	必修・選択の別	選択
教科名	総合的な学習	単　位　数	２単位
科目名	Global Understanding Skills（Ⅱ）	担　当　者	山本真司
講　座	1、２講座		

科目のねらい（目標）

２年間で養われた基礎知識と問題解決への理論的アプローチ、２年生でのリサーチの内容を共有し、具体的には京都市、京都府、国連環境計画（UNEP)、経済協力開発機構（OECD）に対して独自の提言を行い、回答を得ていく。また、その成果をふまえて、学内小学生に対して環境教育を実践する。この取組を通して、世界的な課題、特に環境問題の解決の方法として、身近にある余剰資源が有効であることを学ぶことができるとともに、実際の問題解決に向けて取り組むことができる。関係諸機関からの回答を、さらなる問題発見につなげ、自らが世界にどう関わり、働きかけていくのか、その解答や実践力を、グループワークや諸機関や講師との交流を通じ、確かなものにしていく。
最終的にオリジナルのテキストを作成する。

学習の進め方

専ら、マイクロラボ（数人のグループワーク）と個別学習を中心とした問題発見、解決型のクラス運営を実施する。二年間の基礎、展開学習を踏まえた総合的で多角的な切り口を生徒と共に開発していく。特に、最新のプレゼンテーションスキルの獲得（prezi 使用）と教室と学校にとらわれない双方向学習のために Google classroom を活用する。

生徒の学習上の留意点

GUS-Basic、GUS-Ⅰで学んだ事項と豊かな想像力を縦横に活用する積極性なクラス展開を期待する。

評価方法

問題発見と解決プロセス、プレゼンテーション能力、ディベート能力、メディアを利用する発信能力を中心に、レポートとインタビューによって評価する。

使用教材

持続可能な開発目標（SDGs）「グローバル・ゴールズ」text、（UNDP）「国連持続可能な開発会議」、agenda、「リオ＋20」text　20/06/2012 Speech by José Mujica in the Rio +20 summit
その他、適宜授業時に提示する。

授業計画

学期	授業内容	各単元のねらい
1	政策案をまとめ、実際に政策提言を行う。小学生への環境教育を実施する。課題論文集を作成する。 1.２年生で実施した各フィールドワークの内容の共有と政策提言内容と提言方法の検討。 2.２学期に実施する小学生への環境教育実践の準備を行う。	クラス内で、相互発表を行い、成果を共有する。講演を依頼した外部講師に講評を求める。 ２学期に行う政策提言に向け、フィールドワークとリサーチをふまえ、提言先を考慮し、提言内容を実際にまとめる。２学期に実施する小学生への環境教育実践の準備を行う。フィールドワークで持ち帰った教材を検討し、日本の小学校で実践可能なものに再構築する。
2	1.政策提言を行う。　京都府、京都市に対して日本語で提言を行う。UNEP、OECD に対して英語で提言を行う。関係諸機関から回答を受け取る。 2.小学生への環境教育を実施する。	ギュッシングの取組からの提案を京都府に、フライブルクの取組からの提案を京都市に対して行う。UNEP、OECD に向けての提言を英語でまとめる。提言内容をホームページで公開する。提言先からフィードバックを受け取る。小学生への環境教育を実施する。ドイツ、オーストリアから持ち帰った教材を検討し、適切な授業計画を立案する。授業計画に基づいて、学内小学校を中心に、環境教育を実施する。
3	1.課題論文を作成する。 2.3 年間の成果を全校生徒に向けて発表する。	課題論文をしあげ、課題論文集を作る（CD-ROM、紙媒体)。 ３年間の成果を全校生徒に向けて発表する。

3 研究開発の実際

3-1-1●2017/04/15 ーGUS BASIC 授業ー（高校 1 年生）

第一回 Global Understanding Skills BASIC「クラス展開」

高校 1 年生全員を対象とする GUS BASIC がスタートしました。これは本校が 2 年前に文科省よりスーパーグローバルハイスクールの認定を受けたことによりスタートさせたプログラムです。持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラムとして、環境先進国に学び世界に提言をすることを目標にしています。この BASIC 講座では、フィールドワークで環境問題に取り組む実際の地域や機関を視察し、また「これからどのような社会にしたいか」様々な価値観に基づき多方面から世界が置かれている状況について学び、そして各の意見を出し合い共有していきます。これからの 1 年間の講座、そして 3 年間に渡る講座の展開について説明を受けました。総合的な学習として位置づけていますので、問題意識と探求心を持って取り組むことが望まれます。

GUS BASIC （SGH） 2017

【 持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム 】

～環境先進国に学び世界に提言～

			授 業 内 容	教材	機材 教室	備考
1-1	4	15	導入 1 クラス展開、授業手法	説明プリント（クラス、CDR、ホール）アンケート	CDR 2 クラス	B 同時展開
1-2	4	25	導入 2	Student-centred learning Inquiry-based learning Micro-Labo Flipped Learning KJ-Method 説明		A ホール 火曜日
1-3	5	6	導入 3	2015 年「持続可能な開発サミット」で採択した持続可能な開発目標（SDGs）通称「グローバル・ゴールズ」 持続可能な開発目標（SDGs） 国連開発計画（UNDP） www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sdg/post-2015-development-agenda.html	ホール	A ホール
1-4	5	13	講演 1 （仮題）現代のキーワード 持続可能な社会	（仮題）現代のキーワード 持続可能な社会 同志社大学神学部教授 小原克博氏 http://www.kohara.ac/	ホール	A
1-5	5	27	GPS-Academic	GPS-Academic 所要時間 90 分	HR 同時展開	A 3+4 時間目
1-6	6	3	『TOMORROW パーマネントライフを探して』鑑賞 http://www.cetera.co.jp/tomorrow/	2012 年、21 人の科学者たちが権威ある学術雑誌「ネイチャー」に、人類は滅亡するという論文を発表し世界に衝撃が走った。 女優で監督、子供を持つ母でもあるメラニー・ロランは、シリル・ディオンと共に、未来のために解決策を求めて世界へと旅に出る。	ホール	A 11:00-13:00 多少の延長可能性
1-7	6	10	TOMORROW 振り返り（マイクロラボ+レポート）		HR	B
1-8	6	17	レクチャー「真庭の挑戦」	フィールド・ワーク説明 募集（真庭）→10 月 27-28 日	ホール	A
1-9	7	1	ワークショップ	持続可能な社会を求めて KJ 法（ML）	HR	B

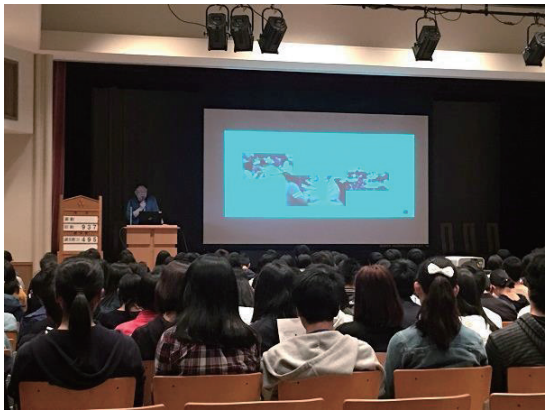
3-1-2●2017/04/25 －GUS BASIC 授業－（高校 1 年生）

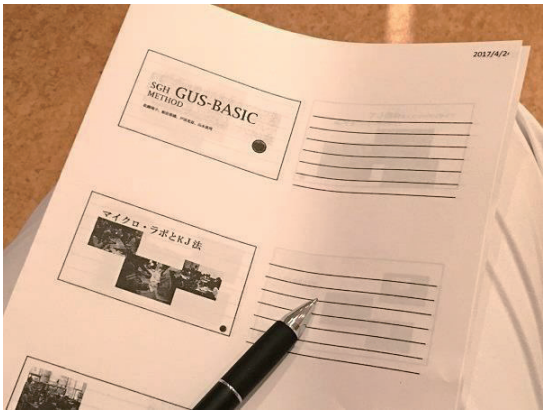
METHOD

今日は、山本教諭よりこのクラスのメソッドについて、昨年の様々な取り組みの紹介からどのように学びを深めていくかについて、以下のトピックに沿って説明を受けました。

●マイクロ･ラボと KJ 法
●INQUIRY-BASED LEARING
●プレゼンテーションを体験してプレゼンテーションを学ぶ
●講演や発表を聞く
●発信する
●フィールドワーク（岡山･東京･ヨーロッパ）

いろいろなスタイルで学び、興味をもったことは限られた時間でも効果的にどんどん調べ、共有していきます。そして多様な価値観や経験を持つ講演者を迎え視野を広げるとともに、それぞれの講演者の工夫などから学び、自分が発信する時に活かします。またフィールドワークでは現地に赴き、新しい発見を通して、それを共有し、どのような選択をすることが重要かについて自分なりの考えを構築していきます。





3-1-3●2017/05/06 －GUS BASIC 授業－（高校 1 年生）

「持続可能」な世界とは？MDGs から SDGs へ

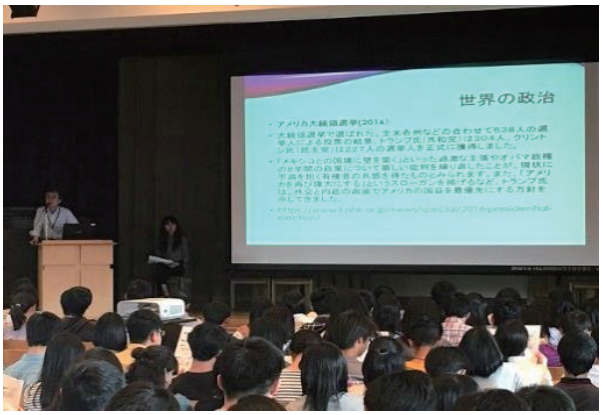
今日は、ホールにて戸田光宣教諭、帖佐香織教諭による全体授業です。

戸田教諭が「みなさんアメリカ大統領が代わって、世界がどのような影響を受けているか知っていますか？では、皆さんはどのような影響を受けていますか？関係ないと思いますか？」と問いかけました。アメリカでは自国第一主義を掲げた大統領が誕生し、また世界でもフランス大統領選ではまった

く相反する意見を持つ候補者が接戦を繰り広げ、そしてトルコでは大統領によって民主主義や大きく揺らいでいます。世界はどこに向かおうとしているのか、それはグローバル社会に生きる私たちの身近な生活にも決して無関係ではないこと、確実に影響している、だから世界のみんなのために自分ができることを知り実践する必要があります。開発は続く中で「持続可能」という言葉が大きなキーワードとなりそうです。誰かの犠牲の上に幸せがあってはいけないと思う、というメッセージが心に残りました。

帖佐教諭からは、国連で取り組まれている活動について伺いました。例えば、世界では今も 17 分に 1 人が飢餓でなくなっています。こういった状況から、2000 年の国連ミレニアムサミットで、2015 年までに達成すべき期限を定めた測定可能な 8 つの目標を掲げ、工程表に具体化されました。これがミレニアム開発目標 MDGs です。この目標を達成するための取り組みは検証により具体的に数値として成果を上げたことが確認され、例えば飢餓の撲滅に関して、開発途上国の約半数が 1 日 1.25 ドル未満で生活していたところ、その割合を 14%まで低下させました。こうした取り組みをさらに進めるため、新たな開発アジェンダとして 2015 年、持続可能な開発目標 SDGs が採択されました。MDGs との大きな違いは、MDGs が途上国中心の取り組みだったのに対して SDGs は先進国も一緒に取り組む普遍的な目標となっていることです。MDGs よりさらに詳細に 17 の目標と 169 のターゲットが設定され、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など持続可能な開発のための諸目標の 2030 年までの達成を目指しています。また MDGs では最も脆弱な人々はまだ取り残されているとの認識があり、気候変動が進むことで、農業で暮らしを支える最も貧しい人々の生活に直接的な影響を及ぼすと考えられます。まずはできることから、それを意識し考えられるように、授業を進めていきます。

2030 年、みんなは働き盛りの社会人です。その頃、世界を変えられるのは生徒の皆さんなのです。



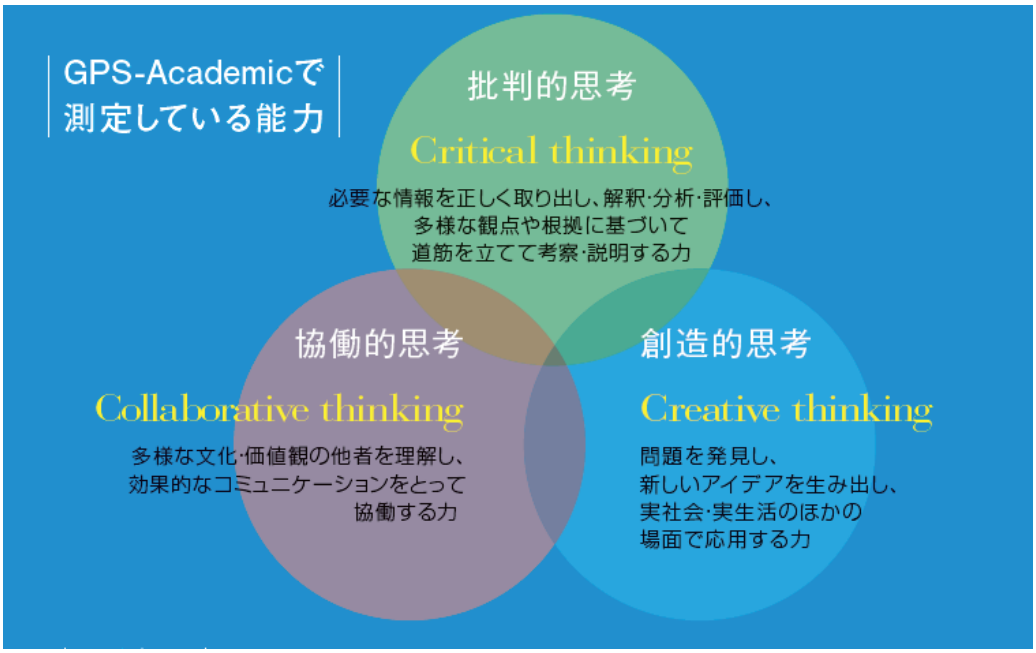
3-1-4●2017/05/27 －GUS BASIC その他の取り組み－（高校 1 年生）

GPS-Academic 実施

SGH の取り組みの一環として、従来の教科学力とは異なる観点で自分自身の強みや特徴とその成長を

知るために株式会社ベネッセ i-キャリアの実施する Global Literacy & Skills Test を受けました。SGH では、多様な価値観を持つ人々と協働して問題を解決する力を養うことを目的としていますが、高校 1 年生にこの先 3 年間の SGH の学びを通してどのような変化や成長が見られるかを検証することができます。

【ベネッセ i-キャリア GPS-Academic 概要】



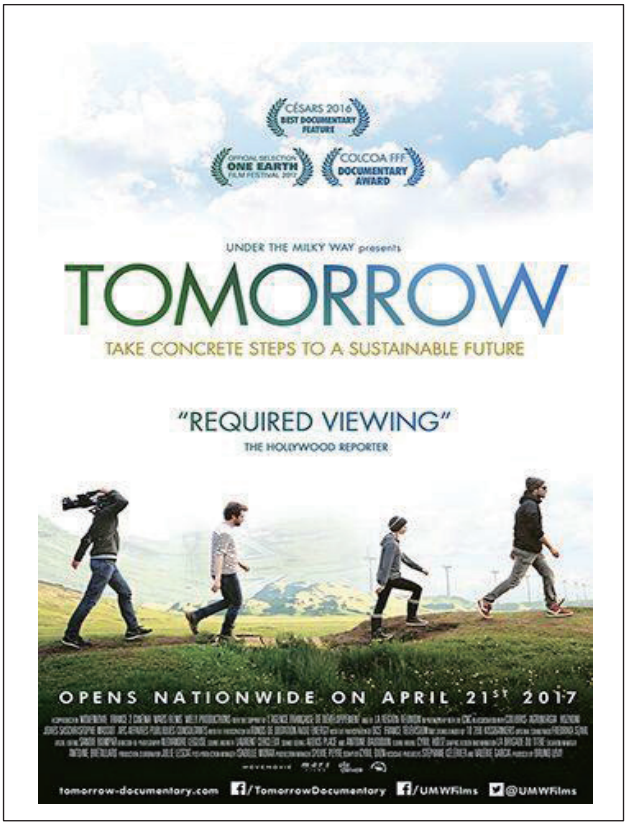
ベネッセ i-キャリア実施要項　思考スキルアセスメント「GPS-Academic」12 月リリースより：https://www.benesse-i-career.co.jp/news.html　（2017 年 5 月 27 日）

3-1-5●2017/06/03　－GUS BASIC･Ⅱ　その他の取り組み－（高校 1･3 年生）
映画『TOMORROW -DEMAIN-　パーマネントライフを探して』

6 月 3 日（土）の GUS BASIC 授業では学びの一環として、本校ホールにて「TOMORROW – DEMAIN – パーマネントライフを探して」を視聴しました。

“人類は絶滅する恐れがある。それも決して遠くない未来に”と 2012 年に 21 人の科学者たちが権威ある学術雑誌「ネイチャー」に、私たちが今のライフスタイルを続ければ、人類は滅亡するという論文を発表しました。
この映画は、その“事実”を聞かされたフランスの女優メラニー・ロランが、母になったことをきっかけに自分の子ども達が暮らす未来のために何かしなければいけないと、解決策を求めて、世界中の既に“新しい暮らしを始めている人々”に会いに旅に出るドキュメンタリーです。

「世界を救うとは言わない、まず身近なことから始めたの」と自分の庭から始めて街中に菜園を広げている人たち、まずは食のあり方を考え、そして再生エネルギー100%の街、地域通貨やグリーン・エコノミーといった経済モデル、グローバルキャピタリズムに支配されない民主主義、最後は将来に備える教育あり方など、私たちも一緒に旅に出て知る感覚で映画が進みます。



小さなことでもいいから自分たちの力でできることをしようということ。そして信念の元に仲間は集まり、その輪が広がり行政をも動かしていく数々の例は、私たちの SGH の学びにとても力強いメッセージをくれました。

“―女優メラニー・ロランは、監督としてもカンヌ国際映画祭で作品が上映されるなど評価が高く、ファッション誌の表紙も飾る女性たちの憧れの存在。そんな彼女が、活動家・ジャーナリストのシリル・ディオンと、フード、エネルギー、マネー、教育の今を巡る旅に出た。〝新しい暮らしを始めている人々〟との驚きの出会い。世界とつながりシェアしながら、新しいライフスタイルが見えてくる―。”

©MOVEMOVIE - FRANCE 2 CINÉMA - MELY PRODUCTIONS

3-1-6●2017/06/10 ―GUS BASIC 授業―（高校 1 年生）

映画 TOMORROW –DEMAIN– パーマネントライフを探して ―振り返り

今日の GUS BASIC クラスは、先週視聴した『TOMORROW –DEMAIN– パーマネントライフを探して』を各クラスでマイクロラボ形式にて振り返りました。小グループに分かれた後、下の Key の答えを記憶や印象を各々が出し合うことで全体像を思い返す作業をしました。これらの Key とそこから導かれる答えは今後の学習でも活用していきます。それぞれの印象に残った部分が違うこと、からより映画への理解も深まりました。

Key 1 トランジション パーマカルチャー
Key 2 アーバンファーム
Key 3 インクレディブル・エディブル（みんなの菜園）運動
Key 4 「9 つの種子」種子バンク

Key 5 エコノミートレンド基金
Key 6 バイオマス･エネルギー
Key 7 ヤン･ゲール　都市デザイナー　都市はどのようにデザインされるべきか
Key 8 再生可能エネルギー
Key 9 ゼロ･ウェイスト　プロジェクト
Key10 カーボン･ニュートラル
Key11 レユニオン島
Key12 リール　ポシェコ社
Key13 地域通貨
Key14 バリー（地元で生きる経済のためのビジネス連合）
Key15 ヘルシンキ　フィンランドの教育システム改革

3-1-7●2017/07/01　－GUS BASIC 授業－（高校 1 年生）
1 学期のまとめ　－マイクロラボにて

今日は、GUS BASIC 高校 1 年生の一学期の最後の授業です。各クラスに分かれてマイクロラボ形式にて一学期間のまとめに取り組みました。大きな模造紙に取り組んだトピックごとに思い思いの意見や学んだことを付箋で書き込み、グループでそれを共有しました。最後に今までの感想、これからの学習の目標などについても意見をまとめました。地球全体の大きな話題や問題から身近な問題への関心まで環境問題についてこの一学期でずいぶん意識が変わったという印象を受けました。こうして振り返った後、今後予定されている真庭フィールドワーク、東京フィールドワークについての参加者募集案内がありました。それぞれが目標を持ち学習意欲を高めて取り組むことを目指します。

これまでに取り上げた主なトピックとして
●消費文化
●地域通貨
●バイオマス真庭
●SDGs(Goals)
●再生可能エネルギー

●持続可能な社会

3-1-8●2017/09/02 ーGUS BASIC 授業ー（高校 1 年生）

「興味を持って、ぜひ参加して欲しい」 2016 年度フィールドワーク体験者

始業式の翌日、早速 GUS BASIC の授業がスタートしました。今日は、現在募集中の 2 つのフィールドワークについて、現高校 3 年生で本校 SGH 第一期生であるフィールドワーク参加者による体験談のプレゼンテーションを聴く機会となりました。

最初は、岡山県真庭市を訪れた「バイオマスツアー」に参加したグループです。実際に現地に行くのと、教室で学んでいるのとでは全然違い、行くことでバイオマス発電を通して環境問題に具体性を持って本格的に興味を持てたこと。そしてこの先にある東京フィールドワーク、ドイツなどヨーロッパへのフィールドワークに対してもさらに関心が高まったことなどお話がありました。
2 つめは、東京を訪れた「国際機関訪問」に参加したグループです。問題に関わっている人から直接聞く話をより現実のこととして感じることができたこと。ドイツ大使館、オーストリア大使館を訪れ、よりいっそう現地への関心が高まり行ってみたくなったことなどお話がありました。
最後は、高 2 の選択授業でのフィールドワークであるヨーロッパ訪問「環境先進国に学ぶ」に参加したグループです。一緒に同じ関心のある仲間とのヨーロッパ研修は楽しい冒険のようでもあったこと。現地の人との対話の重要性を実感し得難い機会となったこと。知らない現状を学んでとてもいい刺激になったと同時に、食を含む現地の文化に触れたことがとても楽しく印象的だったことなどお話がありました。

共通のこととして、授業で学んだことの疑問点を現地で解決できたこと、ギャップを埋められたこと、そして今までとは違った観点から物事を捉えられるようになったことの成長が伝わってくる内容でした。そのことから、多角的に物事を学びたい人は、ぜひフィールドワークに参加するべきだと最後にメッセージがありました。楽しんで、学ぶことを体験し、そのことを伝えたいという先輩の本音溢れる講座となりました。

興味を持った人は引き続き申込みをしてください。

3-1-9●2017/09/09　－GUS BASIC 授業－（高校 1 年生）

「フードドライブの実現に向けて」 生徒会より

今日は生徒会メンバーにより企画されている「フードドライブ」についてプレゼンテーションをしてもらいました。食の問題は、持続可能な社会を考えるときの最重要課題の 1 つでもあります。この取り組みは、高校 3 年生の GUS クラスでも学んでいる何名かの生徒会メンバーが中心となり、実際に自分たちでフードバンク京都に話を聞きに行ったことをきっかけに、学校でもフードバンクの活動を実現させたいと思い始まりました。

フードバンクとは、まだ十分に食べられるのに、いろいろな事情で捨てられていた食品を企業や商店、農家、各家庭から無償で引き取り、それを必要としている人々に無償で届けるフードドライブ活動をするシステム･団体で完全なボランティアです。日本でのこの食品ロスは 1 人当たり毎日おにぎり 2 個相当、驚くことに全体で年間 632 万トン、これは世界全体の毎年の食糧支援量約 320 万トン（2014 年）の倍近くにもあたります。

日本においても困窮しているとされる人は 6 人に 1 人、有り余った無駄に捨てられてしまう食品を、寄付し、集め、そういった必要とする人に届けることで、困っている人の役に立てます。自分のできる小さなことでも、たった 1 つの缶詰でも誰かの空腹を満たす以上の何かになる可能性があります。日頃の「もったいない」を誰かの「ありがとう」に変えましょう、というメッセージは皆の心に響いたようでした。

生徒会のメンバーも知識のゼロのところからこの活動を実現させようとしています。まず今月の文化

祭ではフードバンクについてのブースを設置し、そこから食品の寄付を募り、タイミング良く必要とする人に届けようとしています。自分達にできることで人助けをするという輪を広げたい、今後もこの学校で後輩達が意志を引き継ぎ、この活動を継続してもらえたら嬉しいと訴えました。まずはぜひ興味を持って、文化祭フードバンクブースに足を運んでみましょう。

3-1-10●2017/10/07　ーGUS BASIC その他の取り組みー（高校 1 年生）

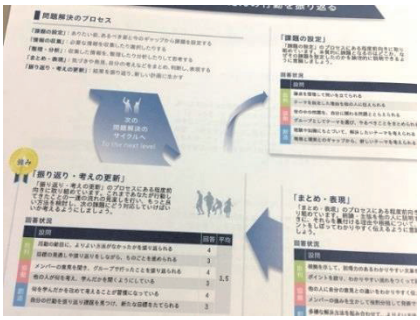
GPS-Academic 結果返却

一学期に実地した GPS-Academic の結果が出ました。今日は各自のデータが返却されました。GPS-Academic とは、従来の教科学力とは異なる観点で自分自身の強みや特徴とその成長を知るために株式会社ベネッセ i-キャリアの実施する Global Literacy & Skills Test です。

手元に戻った自身の評価を興味深く見ながら、友達と見せ合って比較したり、それぞれの結果に対しても様々な感想がありました。結果の善し悪しではなく、自分の思考力がどのようなものか、これからの学習にどう生かすか、またこれからの学習でどう変わっていくかを検証していきます。下の５つのステップに沿って結果を皆で振り返りました。

STEP1　テストで測った思考力を振り返る
　　「批判的思考」「協働的思考」「創造的思考」がどのようなバランスで備わっているか
STEP2　３つの思考力を日々の学習場面でどのように生かすか
STEP3　問題解決のプロセス別にふだんの行動を振り返る
STEP4　テストでの評価と自己評価の差を知る
STEP5　記述･論述問題を振り返り、多様な考えを知りしこうを深める

多様な価値観を持つものが協働して、誰もまだ答えを見つけていない問題に対して解決する力を養おうとしていく SGH の取り組みにおいても、こうした現在の自分の思考力の強み、そしてこれからの課題を見つけて成長していくことは大切だと考えています。



3-1-11●2017/10/14, 21　－GUS BASIC その他の取り組み－（高校 1 年生）
もったいない　－TASTE THE WASTE

2 回のクラスに渡り、ドイツのメディアによって制作されたドキュメンタリーを視聴しました。食品が辿るあらゆる課程に関わる様々な人への取材を通し、世界規模の問題となっているフードロスの真実に向き合い、私たちにできる解決策を見出して行こうというものです。最初のシーンでは、オーストリアのウィーンで夜中に自転車でスーパーのゴミ箱を巡り、そこから食べ物を調達するゴミ箱ダイバーと呼ばれる若者達が紹介されました。彼らは生活困窮者ではありません。今も食料がなく餓死していく人たちが減ることに廃棄食品を減らすことで少しでも貢献できるならと行動を起こした人たちです。信じられない真実として、私たちが日々食べる食品はその 3～5 割が食卓に届く前に捨てられています。豊かな生活を維持するために食料を大量に輸入し廃棄している先進国、貧しさゆえに食料を輸出して飢餓に陥る途上国の偏在が明らかになります。

今日の VTR では、消費者としてどう選択することが正しいのか問いかけられていました。誰もが消費者として、スーパーでは食品を吟味して買っています。賞味期限がなるべく先の商品、また少しでも赤くて大きくてきれいなトマトを手に取っていませんか。その当たり前の消費者の行動が、このドキュメンタリーを見て、本当に正しくて意義あるものなのか考えさせられました。豊かさを求める私たち消費者もフードロスに加担しています。消費者のニーズに応えるため、大手企業は食品に厳しすぎる規格を設け、それにより生産者も苦しめられ、その結果としてスーパーには過剰な量の食品、そして美しすぎる野菜や果物が常に並べられています。その陰では十分に食べられるはずだった食品が、賞味期限が迫ったため、色形が規格に合わないという理由で大量のゴミとなっています。食品が圧縮されゴミとなる映像はショッキングで、誰もがとても悲しくむなしい気持ちになります。

廃棄農産物を減らすために直売に取り組むアメリカの農場、残ったパンを燃料として再利用するドイツのパン工場、廃棄食品を発酵させるドイツのバイオガス発電所、家畜のえさに安全に加工する日本の業者など、廃棄食品を再利用する取り組みも紹介されました。ただ、人のために作った物は人が食

べるべきだと語ったドイツ人農家の人の言葉が印象的です。廃棄食品をただ埋め立てるのではなく再利用を考えると共に、まず根本的にこうしたフードロスを減らすために、消費者が贅沢をしすぎて食品を無駄にしているという羞恥心を持ち、環境のために賢い選択をし、食品の流通の構造が見直される必要があります。

3-1-12●2018/01/27 ーGUS BASIC 授業ー（高校 1 年生）

フィールドワーク参加者による報告会

今日の GUS BASIC のクラスは、先日「バイオマスツアー真庭」と「東京国際機関」訪問のフィールドワークに参加した生徒たちによる報告会を行いました。

バイオマスタウン真庭フィールドワークに参加した生徒たちのグループからは、真庭市の市全体の 79%にも及ぶ面積を占める恵まれた森林資源を活かした様々な事業、そしてそれを支える市政や民間企業の取り組みについて説明がありました。特に市の全世帯の電力を上回る発電量のバイオマス発電が実現していることについては未来への可能性を感じさせられました。ところが、現在は政府からの支援に頼っている点、CO_2 排出量の削減、発熱効率が悪いなどの課題から持続可能性に不安も残りました。バイオマスタウンのこれからのさらなる発展に期待を寄せ、自分たちは何をすべきか、またできるかをこれからの取り組みで考えたて行きたいと豊富を語ってくれました。

東京の国際機関を訪問した生徒たちのグループからは、まず初日の本校卒業生によるキャリアセミナーについて報告がありました。JAXA(宇宙航空研究開発機構)に勤務する関川知里氏、復興庁の依頼で尽力する伊地知亮氏からレクチャーを受けた生徒たち、グローバルな舞台で活躍する先輩たちのフィールドの大きさに大きな衝撃を受けたようです。またすぐにグローバルリーダーにならなくても、誰もがグローバルシチズン（地球市民）になれる、そして将来のために今は多様性を自分の中に育む時という心に残るメッセージをもらいました。外務省、ドイツ大使館訪問、JICA への訪問では、現地での取組み、日本での課題、自分たちにできること等をレクチャーまたディスカッションを通して学び、考える貴重な経験をすることができました。

実際のフィールドワークを通して、現地の方達の熱意を間近で感じることができ、またいい部分だけではない様々な直面する課題を見つけ、今後学びを継続していく中で自分たちも積極的に動くことの大切さを感じたと感想が述べられました。

3-1-13●2018/02/17, 24　－GUS BASIC 授業－（高校 1 年生）

行ったことのない場所、触れたことのない文化

最後の 2 回となった GUS BASIC クラスでは、山本教諭から以前アフリカの文化についてプレゼンした高 3 生徒についての紹介、そして生徒一人一人がこの 1 年間の印象に残ったことを振り返る時間を持ちました。

この GUS の取り組みでは、自分たちの行ったことのない場所、地域、そして触れたことのない文化について、実際にそこから帰国した先輩方、友人たちを通して知り、理想的なボーダレス社会の実現のために違いを知る貴重な機会にしたいと思っています。山本教諭は、以前に GUSⅡクラスで講師となりアフリカについてレクチャーをした濵田莉子さんからのメッセージをクラスに伝えてくださいました。濵田さんは父親の仕事で幼少期から多感な中学生までをアフリカの 3 国、ジンバブエ、モザンビークそしてボツワナで過ごしました。アフリカというとアフリカ大陸として一色単に捉えられることが多く、そのイメージはサファリやマサイ族、貧困や内戦。でも濵田さんの伝えたかったことは「アフリカってそれだけじゃない」、国旗のデザインにその意味が込められているように 1 つ 1 つの国にそれぞれ違った歴史やバックグラウンドがあり、文化や抱える問題はさまざま。実際に撮った各国の美しい写真からも違いが伝わってきます。濵田さんはアフリカの生活を振り返り、アフリカの人達の問題を全て解決することは自分にはとても不可能だけれども、恵まれた環境にいる自分に感謝し「日本」や「豊かさ」について考えるようになった今、将来は自分にできることで何か少しずつでも問題を解決できるようになりたいと話してくれました。異文化を知った時、私たちもこうした気持ちを共有していくことが大切です。高 2、高 3 を GUS は選択制となりますが、積極的にグローバルイシューの解決に向けて一緒に一歩を踏み出すクラスにしたいと思います。

3-2-1●2017/04/11 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）
第一回 Global Understanding Skills Ⅰ「お互いを知る」

第一回目の GUS Ⅰ のクラスが高校 2 年生の選択クラスとしてスタートしました。担当は理科の坂下淳一教諭と社会の帖佐香織教諭です。異色の科目がコラボする Team Teaching 形式で、様々な視点から学ぶことができるクラスになります。このクラスでは以下の３つの内容を軸に取り組みます。

（１）昨年学んだ環境問題の知識を元に、ヨーロッパの環境問題、政策、対策について知り、問題解決のために自分たちの意見やアイディアを出し合うこと
（２）問題解決の方法論を学ぶこと
（３）身近なテーマとして、学校や地域のゴミ問題の解決について提案すること
それらのために、個人の調査や思考の取り組みを中心に、グループワークやフィールドワークを交えながら取り組むこと

まずは、自己紹介。氏名、所属する部活動、特技、資格、夢、気になる社会情勢、気になる環境問題、どうしてこの学校に入学しようと思ったか、そしてどうしてこのクラスを選択したかを、事前に記入したシートを元に順番に発表しました。それぞれの考えに共通点があったり、意外な回答もあったり、自己紹介をすることでクラスが一気に打ち解けました。

次の講座に向けて、問題解決のトレーニングとして「東京の朝の通勤ラッシュを軽減する」というテーマが発表され、まず各自が考えてみるという宿題が出されました。

3-2-2●2017/04/18 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）
問題解決法トレーニング

前回、宿題にあった「東京の朝の通勤ラッシュを軽減するには」という各のアイディアを持ち寄り、問題解決のステップに則り解決を探って行きます。今日は、問題解決のアイディアを共有した後、問題について前提確認と現状分析を行いました。

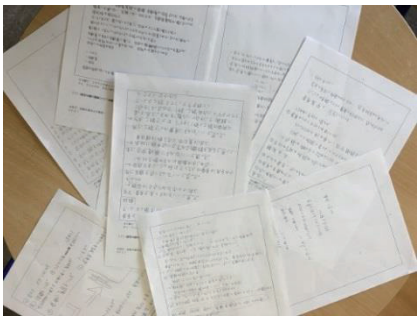
①　前提確認
・語句の確認･･･あいまいな語句の定義「通勤ラッシュとは具体的に」
・クライアントの特定･･･どの立場としての問題解決かによって打つ手が異なる
・目標の具体化･･･売り上げ増加、被害の現象などその数値目標など

東京都からの依頼で、乗客の需要数＝電車が供給できる乗客数を、数年間である程度の効果、そしてその 5～6 年度で大きな効果を目指すとします。

②　現状分析
・フレームワーク（物事を切り分ける枠組み）
・定義にしたがって「需要」と「供給」に分ける

需要側としては、通勤しなくてもいい制度など「通勤需要」、電車を変えるなど「電車選択率」、通勤時間をずらすなど「ラッシュ時間帯選択率」が挙げられ、供給側としては、電車の「路線数」、「本数」、「車両数」と「車両あたりの定員数」という項目に分けてすすめていきました。

これは問題解決の際に、取りこぼしや重複のないように進めるための手順です。生徒からは、最初に思いもつかないアイディアが多く挙げられ、最後にどの項目に当てはまるかを分けるとそれが見事に整理されていきました。色々な地域、国で経験を積んできた人たちでの、同志社国際ならではの取り組みのおもしろさを実感できるクラスでもあります。

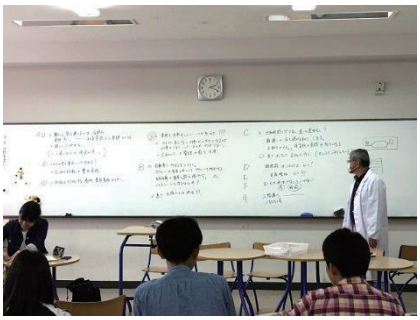


3-2-3●2017/05/02　－GUS Ⅰ　授業－（高校 2 年生）
情報収集 － ドイツでの環境問題･政策

今日は、まず先日からの問題解決のトレーニングの続きに取り組みました。様々な解決方法の案が出た後で、それを実行するための困難さ、問題点、またその効果とのバランスの意見を出し合います。そして、その中から実際に問題解決となるボトルネックとなるものはどれなのかを絞り込んでいきます。通勤ラッシュの解決が課題でしたが、検討の末、ボトルネックは 3 つほどに絞られ優先順位も付けました。家で少し仕事を終わらせてから出勤する制度を作るというものが最優先の取り組み課題と

なり、他にオフピークの乗客の割引乗車チケットや定期券の販売、などおもしろいものがありました。こういった問題解決の方法は、効果的に解決を探る重要な手法になります。

次は、いよいよ実践に移っていきます。テーマである環境問題について、場所をコミュニケーションセンターに移して、実際にインターネットや書籍でドイツでの環境問題や政策について情報収集、まずは個人作業が始まりました。「ドイツ」「環境政策」「効果」などのキーワードから広がり、それぞれ初めて知ることも多く、感心したり、日本と比べて驚いたりしていました。また多く聞かれたのが、ドイツでの環境問題に対する特に意識の高さでした。どのようなことが起こり、効果がでているのかを、より具体的に調べ、これからの学びではドイツへのフィールドワークに向けた準備を進めていきます。



3-2-4●2017/05/09 ーGUS Ⅰ 授業ー(高校 2 年生)

ドイツの環境政策について - 調査

ドイツの環境政策について、フィールドワークの事前学習を進めていきます。
今日は iPad やコンピューター、また関連書籍などから、関心を持ったドイツでの環境問題とそれに対する政策、その効果やさらなる問題点に着目し下の 2 点について取り組みます。

① 個人でもっとも興味のある問題については、詳細に調査。
② ドイツ全体でのさまざまな環境問題とそれに対する政策を幅広く情報収集し、それをカテゴリー分けをします。

取り上げられていたものは、ゴミ問題、リサイクルなどの廃棄物問題、エネルギー源の問題、それに関連した住宅機能の改善や交通政策など、さまざまなものでした。
関係する人物や、地域を絞って、そこから調べを進める生徒もいました。時間が経つにつれ、取り組む姿勢は真剣さが強くなっていきました。

レポートの正式な書き方（特に、引用や脚注）についてもレクチャーを受けました。
これから少しずつ、それぞれが取り組む分野を絞っていく作業に入ります。

3-2-5●2017/05/16　－GUS Ⅰ　授業－（高校 2 年生）

フィールドワークに向けた事前学習　－チーム分け

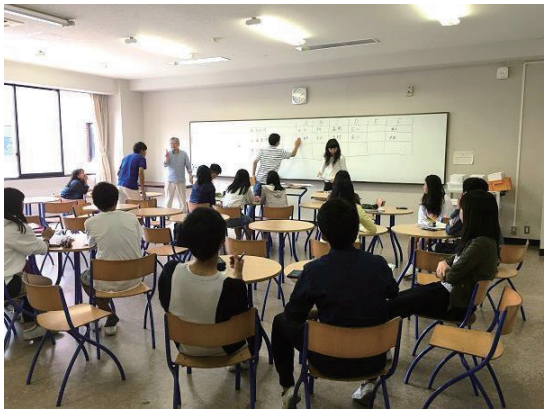
今日は、これから具体的に進めていくフィールドワークに向けた事前学習における、カテゴリーごとのチーム分け、そのグループの取り組みに合ったネーミング、そしてチームのまとめ役と編集役、小項目ごとの担当者を決める作業をしました。

カテゴリーは大きくは以下の通りです。それぞれのカテゴリーはさらに小項目に分かれます。
【１】ドイツ基本情報
【２】廃棄物
【３】都市計画・交通政策
【４】エネルギー政策
【５】住宅など建築物に関する総合計画

それぞれが特に興味を持っていることをアンケートに取り、【4】のみ 2 グループとし、カテゴリーごとに A～F チームまでに分かれました。チーム名は今後のモチベーションにも大きく影響するため、みんな熱心に工夫して知恵を絞っていました。

今後はこのチームで、基本的にはまずドイツについてリサーチします。しかしながら、近隣の国でも行われていたりすることも多いので、関連の取り組みがある場合は、追加として調査を行います。
次に、各カテゴリーについて、疑問に思われやすい Frequently Asked Questions を作ります。国内外のフィールドワークを深いものにするために、本当に疑問に思うことについて、１チームにつき２０個はあげていきます。

また、このチームでの取り組みは、フィールドワークを通して、最終的にはドイツ周辺環境問題対策リサーチの冊子として発行を目指します。



3-2-6●2017/05/30 ーGUS Ⅰ 授業ー(高校 2 年生)

レポートのまとめ方 ー間違いから手法を学ぶ

今日の GUS Ⅰ の授業は、生徒が作成したドイツの環境政策についての小項目レポートを皆で１つ１つ検証し、まとめ方のアドバイスや誤りを見つけて良いレポートにするための改善点を確かめるところから始まりました。

レポートはあらかじめ教員に提出され 3 段階評価がされています。理系の坂下教諭、文系の帖佐教諭によって観点が少しずつ違うことも大変参考になります。レポートは１枚１枚映写機でホワイトボードに映し出され、それを皆で共有しながら改めて的確なアドバイスを受けました。今回アドバイスを受けたポイントについては、今後のどのようなレポートにおいても活用できることになります。

●今日指摘のあった改善点の例●

・段落がきちんと整理されているか
・具体性があり、数値など活用し根拠が明らかにされているか
・資料を引用する場合、信憑性のある参考文献またはサイトを選んでいるか
・読み手が読み直した時に、再検証できるサイトの紹介のされ方ができているか
・効果的な問いの立て方、説明、成果、できれば発展までをまとめているか
・たくさんの資料を読みこなし、自分の言葉でまとめられているか
・・・他

次には、調べた小項目について関連性のあるものなどをまとめていく作業に取りかかりました。重要度、分野、規模などのレベルを合わせてそろえていくことがポイントです。

次回はまとめた小項目のグループごとにそれぞれの担当を決め、より具体的な事前学習へと進みます。

3-2-7●2017/06/06　－GUS Ⅰ　授業－（高校 2 年生）

フィールドワークに向けた事前学習　－レポートの小項目の整理

これまでにドイツへのフィールドワークに向けた事前学習の一連の流れとして以下のように段階を経て進めてきました。

1) 問題解決トレーニングを実施、解決手法を学ぶ
2) 環境問題とその政策について幅広くあらゆる方法で情報を収集
3) 情報をカテゴリー分け、カテゴリーごとにグループを作る
4) 個人作業として興味のあるカテゴリーについて、リサーチを行い、レポートを作成
5) レポートの書き方のレクチャーを受ける
6) それぞれのカテゴリーをグループで共有し、さらに項目のレベルをそろえて整理する

そして今日はコミュニケーションセンターにて、グループごとにカテゴリー内のどの小項目について調べて行くかを話し合い、小項目ごとに担当を決めました。また引き続き、前回学んだレポートの書き方を参考に、個人でのリサーチを進めてまとめる作業も平行して進めていきます。その際に、将来的に付け加えることを念頭に、日本との比較も意識しておきます。参考にしたい文献など新たに増やし、より積極的に調べる体制が整ってきました。

3-2-8●2017/06/13 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）
フィールドワークに向けた事前学習 －チームにてリサーチ項目の再確認①

今日は、各々が提出したレポートのテーマを元にチームの再編成をし、各チームで担当範囲を確認しながら、小項目を調整し、その順序や分担の確認をしました。

『なぜドイツの環境問題への取り組みは先進的で効果が出ているのか』
最終的になぜそうなったのか、その経緯と効果を知らせることができるよう、目的に沿った形でリサーチを進めます。全体のストーリーを意識し、各小項目のレベルを整えることで、初めてレポートを読む人が納得することができるものに仕上げます。

作業としては、チームごとに話し合い、そして教員に真剣な様子でアドバイスを受けました。内容のストーリー性の確認、キーワードの確認、また特に信憑性の高い情報やサイトを元とした裏付けがあるか、その引用の表記が明確かという点については、繰り返しレポート作成の際の重要な点として伝えられていました。アドバイスを受けたチームでは、より団結して熱心に改善点を話し合う様子がみられました。

引き続き、各々が担当の項目について夏期休暇中に質の高いリサーチとまとめができるよう準備を進めていきます。

3-2-9●2017/06/20 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）
フィールドワークに向けた事前学習 －チームにてリサーチ項目の再確認②

今日の授業は先日の続きです。最初に、全員で改めてリサーチの際の、そしてまとめる際のポイントの整理をした後、コミュニケーションセンターに移り各チームでの具体的な担当する分野をふまえ、個々のリサーチに向けて全体の小項目の関連性、並列性を考えた全体の構成の組み立て、それぞれメンバーが連携できているかについて話し合いました。

このクラスでは、事前準備として章立てのされた 1 冊の冊子を仕上げることを目標としているため、

現在は地道な作業が続きます。自分たちで調べ、構成し、教材としての冊子を完成させるというチャレンジをしています。そこから次のステップであるフィールドワークに向かう予定です。全員がこの冊子作りに携わり理解を深め、また疑問を持つことで、フィールドワークでの学習をさらに有意義なものにしたいと思います。

3-2-10●2017/07/04　ーGUS Ⅰ　授業ー（高校 2 年生）

ー学期の総まとめ　ーwork sheet を完成させ夏休みの課題を整理する

今日は、最初にアドバイスを受け修正した各自レポートの内容をチームで共有し、疑問点やアドバイス等を受けて「個人用 work sheet」を完成させることから始まりました。最終的に自分の担当の内容については、現時点でのどのような質問にも対応できるようにすることを目指します。

次に、グループワークへ移ります。ここからは、皆でアイディアを出し合い、疑問に対しての解決方法として、どこのどの機関、担当窓口に問い合わせるか、まだやっていないチャレンジについても話し合いました。これを次は「グループ用 work sheet」にまとめて完成させます。

皆のレポートを海外フィールドワークの前に 1 冊の冊子にまとめるため、より充実した内容と今後の内容の発展のための意見交換が活発にできました。夏休みには、今日完成したワークシートを元に各自リサーチを進めてそれぞれの分野のエキスパートとなれるように努力します。

3-2-11●2017/09/05 ーGUS Ⅰ 授業ー（高校 2 年生）

夏の課題図書に関するプレゼンテーション

GUS Ⅰ の２学期最初のクラスは、帖佐教諭の夏休みに何か報告したいことのあった人？という問いかけに始まり、それにまず坂下教諭が答えてくださいました。GUS の取り組みに影響を受けたこととして、読書をした 20 冊の内半分は環境問題について、そして旅行先の長野県では畑に設置された多くの新しいソーラーパネルに気付き、国や自治体からの政策的補助があり地方でのエネルギー問題の意識の高まりを感じられたそうです。生徒もこれまでのリサーチから、自ずと日々の生活で環境問題を意識的に捉えるようになってきたのではないでしょうか。

今日のクラスでの取り組みは、夏休みにそれぞれが選んだ環境問題についての課題図書のプレゼンテーション準備です。そして 9 月には今までのリサーチの総まとめの作業を進めていきます。まずプレゼンテーションをする目的としては、その本を読んでいない人も内容を理解し、結果的に全員がすべての本を読んだと同じ知識を得られるようになることです。具体的に、まずグループで課題図書のサマリーのレジュメを制作することから始めました。「他の人たちに授業をする」イメージで、抽象的なものでなく相手に伝えたいものをしっかり持ってくださいとアドバイスがあり、各グループが早速取り組んでいました。レジュメに OK が出ると次週はいよいよプレゼンテーションの練習です。

環境問題はすぐに答えのでない解決の難しいテーマです。だからこそ皆で様々な知識、様々な視点からの考え方を共有していくことが大切です。

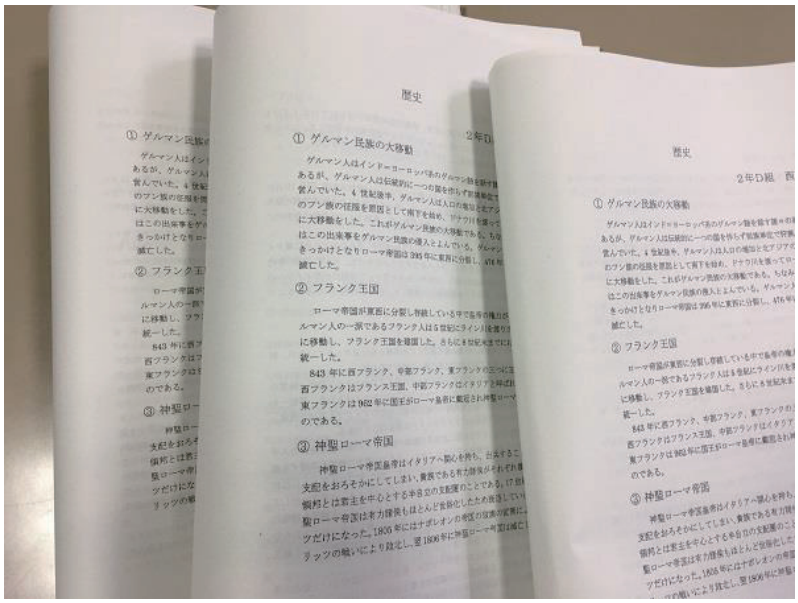
3-2-12●2017/09/12, 26　－GUS Ⅰ　授業－（高校 2 年生）

レジュメの制作、プレゼンテーションに向けて

夏休みの課題図書について、休み明けだった先週のクラスに引き続き、12 日、26 日の２週に渡って各グループでは分担して授業時間外にも持ち帰ってレジュメ作りを進めてきました。欧州へのフィールドワークに向けた事前学習をまとめた冊子制作です。そしてまだ修正箇所があるものの、本日ようやく一冊にまとめあげました。

次はいよいよ各グループでの内容についてのプレゼンテーションのため、準備が始まります。プレゼンテーションの形式は自由ですが、その本を読んでいない人にしっかりとした「説明」ができ、伝えたい内容を共有するという工夫のあることが重要です。

このレジュメは、プレゼンテーションを通して、全員が目を通し、さらにクオリティーを高めるため聞き手がわかり辛かったこと、疑問点については各自ワークシートに書き留めます。各グループのチームワークもさらによくなっており、先生へのアドバイスを求める姿も大変熱心です。次のステージであるプレゼンテーションに向けてさらに作業を進めていきます。



3-2-13●2017/10/03, 10 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）

レジュメのテーマ 各グループによるプレゼンテーション

続けて来た夏休みの課題図書のレジュメ制作、3 日、10 日の 2 週に渡りいよいよそのレジュメに沿った各グループによるプレゼンテーションを行いました。各グループ 15 分とし、発表後に質疑応答の時間も設けます。欧州へのフィールドワークに向けての事前学習となる冊子制作の内容をより充実させるためにも、得た知識を共有する場となりました。

●レジュメのテーマ●
『ドイツを変えた 10 人のパイオニア』
『100%再生可能へ！欧州のエネルギー自立地域』
『エネルギーヴェンデと市民』
『ドイツに学ぶ 地域からのエネルギー転換』
『ドイツ環境都市モデルの教訓』

発表を聞いた生徒は、感想も含めて内容をまとめワークシートに記入していきます。パイオニア達がなぜ画期的であったのか、エネルギー自立地域とはどのような地域なのか、そのエネルギー戦略とは？、エネルギーヴェンデとは？自分が未来会議に出席するとしたらどのような意見を出すか、ドイツの市民が協力する方法としての「組合」について、エネルギー自立村の 3 つのタイプとは、学習曲線理論に基づいたドイツ政府の 3 つの政策について、ドイツで行われている廃棄物対策とは、環境都市として挙げられている都市の優れていると考える理由とは、このような様々な知識としてわかったこと、また論点についてもまとめていました。

議題を挙げての討論では、日本とドイツを比較し、環境問題について考えるとき、自分たちはどのような社会にしたいのか、住みたいのか、そして何を豊かと捉えるのかという意見が挙げられていました。

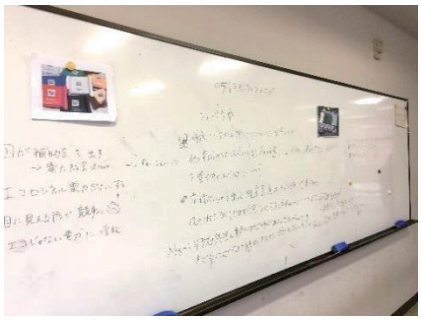
3-2-14●2017/10/24 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）

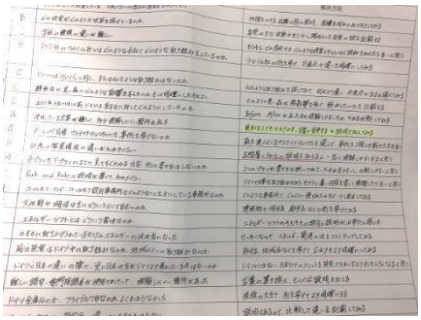
グループプレゼンテーションとリサーチブックの改善案作成

今日は、先日のレジュメについてのプレゼンテーションの最後のグループによる発表と全体ディスカッションの後、欧州フィールドワークに向けて準備を進めてきた事前学習の冊子制作について、全員で記入したアンケートを参考に各グループで改善点を検討し、改善案をまとめる作業をしました。

グループプレゼンテーションでは、最後のディスカッションで割高なエコロジカルな電力を日本ではどのように普及していけるか、またペレットを使った暖房装置の普及は日本ではなぜうまくいかないかという内容で多くの意見が出ました。先生が、生徒たちの意見に対して電力会社側の意見として反論をし、またペレットストーブを売り込む業者のセールストークをすると、生徒たちはそれに答える形で議論を深めていました。改めて議論の場を持つことにもなりました。

来週は改善案を元にさらに内容を充実、また全体に統一感のあるものとし冊子の完成を目指していきます。





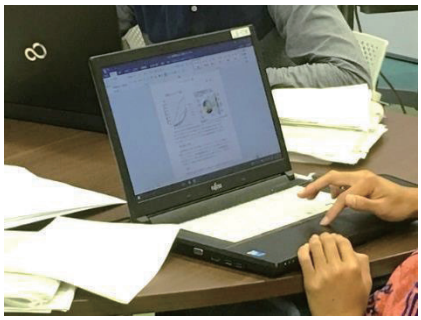
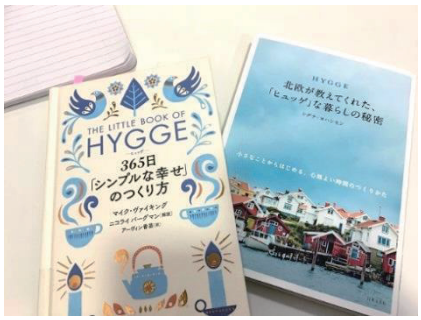
3-2-15●2017/11/07, 14, 21 －GUS Ⅰ 授業－（高校 1 年生）

ドイツでの環境政策をまとめたリサーチブックの完成に向けて

今学期の最終日にテストをします。テストといっても単なる知識を問うものではなく、今までに学んできた環境問題について深く理解し自分の考えを述べられるかを確かめ、アウトプットするよい機会と考えています。

授業では、教員のアドバイスを受けながら、引き続き自分たちでの海外研修の事前学習となるドイツでの環境政策についての冊子作りの作業を続けています。3 回のクラスに渡り、グループでの案の改善、意見交換を経て今学期中には内容を確定させます。グループワークにおいては、自分が受け持つ部分だけで完結させてしまうのではなく、関連性を持たせ全体的に統一感のあるもの、そして全体として振り返って見返しやすいもの、地図や図形を引用してわかりやすいものといった工夫が求められています。教員に相談する姿勢もとても熱心で、生徒１人１人の理解も深まっている様子がうかがえます。完成が近付き冊子の内容が確定すれば、生徒たちが自分たちのリサーチを客観的に分析し作成したチェックリストを元に、次はいよいよ冊子印刷に向けた校正の作業に入ることになりました。

今日は、3 月の研修先でもある環境先進国デンマーク、そこでの人々のゆとりある生活を表現している「ヒュッゲ」について帖佐先生より図書館にある本も含めて書籍の紹介もありました。私たちが探求している持続可能な社会の心地よさと合理性を兼ね備えた、楽しい生活のヒントが見つかりそうな素敵な本です。

3-2-16●2017/11/27 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）

2 学期最後の授業

今日は 2 学期最後の GUS Ⅰ の授業です。予告通り、最初の 1 時間目は理解度を確認するためのテスト、2 時間目はドイツの環境政策についてリサーチを続けて来た集大成となるリサーチブック制作の仕上げに取り組みました。各グループで担当毎にまとめていた記事を結合させ、生徒たちが自分たちのリサーチを客観的に分析し作成したチェックリストに沿って、全体に統一感を持たせるための仕上げの作業です。目次までの完成が本日のゴールです。

冬休み中に、冊子のタイトルとコピーを各自考えること、そして表紙のデザインについては希望者を募ります。いよいよ欧州へのフィールドワークに向けて、3 学期には完成した冊子を手にすることになります。

また本日は、本校卒業生で OECD ステューデントアンバサダーである卒業生もお世話になっている上智大学より、職員の方が本校訪問され GUS の授業にも見学に来らました。

3-2-17●2018/01/09　－GUS Ⅰ　授業－（高校 2 年生）

脱炭素革命の衝撃

GUS Ⅰ の 3 学期が始まりました。今日は始めに、ドイツの環境対策について調べてきたことをまとめた冊子完成に向けての冊子タイトル、キャッチコピーのアイディアを出し合い、次回投票にて決定することになりました。そして報道番組から「激変する世界ビジネス　脱炭素革命の衝撃」を視聴しました。

アメリカが自国の経済に不利益だとして、今世紀末には CO_2 の排出量 0 を目指すパリ協定からの脱退を宣言したことは誰もが知るところですが、その一方でビジネス界ではアメリカの企業もその中心となり脱炭素がビジネスと一体となった環境ビジネスの勢いが大きな波となり、脱炭素革命へと突き動かしています。パリ協定のルール作りをする COP23 の会場の外には多くのビジネスマンがいました。脱炭素、温暖化問題に取り組む企業への投資が増大しているためです。「We are not going away」というプラカードを持ったアメリカの団体の姿も見られます。温暖化が理由とされる自然災害で大きな損失を被ったアメリカの大企業 Walmart は、政府の方針に反して CO_2 削減の対策に乗り出し、驚くべき効果と 1 千億円の巨額な利益までをも捻出させました。このことは投資家たちの意識を大きく変えました。パリ協定が企業に対する評価基準を一変させ、化石燃料への依存度の高い企業の評価も急落しています。この環境ビジネスの波に乗っているのが、中国です。先進国の責任だとして温暖化対策に消極的だった中国が、自国の深刻な大気汚染、そしてこの環境ビジネスの余波を受け脱炭素に国を挙げて大胆にシフトしたのです。再生可能エネルギー導入率はこの 5 年で 4 倍、世界一になりました。一方日本はアメリカと共に火力発電に多額の投資を計画、アジア諸国に 13 箇所 25 基の火力発電所の

建設を計画しています。高効率の発電所で CO_2 排出量を減らすとしつつも、稼働すれば向こう 30 年間炭素を出し続けるこの計画は、各国から非難され、投資家は撤退し、世界のバリーチェーンの仲間からはじき出されているのが現状です。

環境問題に遅れを取っていると思われていた中国が、今は世界の資金を集めてその先頭を行き、高い技術力を持っているはずの日本は環境ビジネスに置き去りにされ企業は生き残りに格闘しています。脱炭素は、地球温暖化という課題だけでなく、大きなビジネスチャンスになっていることにも驚きました。

次の授業ではこの VTR についてのディスカッションも予定しています。

3-2-18●2018/01/23, 30 －GUS Ⅰ 授業－（高校 2 年生）

ディスカッションとグループワーク

今日のクラスでは、まず始めに先週視聴した「激変する世界ビジネス 脱炭素革命の衝撃」について、グループに分かれてディスカッションをした後、様々な意見や感想を共有しました。

「日本とアメリカの関係性の難しさから日本独自の判断ができないもどかしさ」
「環境問題に取り組むといっても様々な問題が絡み合っている」
「環境対策というよりビジネスとして利益があると皆が動く」
「中国の国家を挙げての行動の早さへの驚き」
など環境問題の解決に向けてビジネスという視点からも考えてみることができました。教員からも生徒たちの発表を聞き、この授業の取り組みを通して知識が確実に蓄積され、それを基に自分たちで考える力が付いてきたこと、学んできたことをベースに今後社会にインパクトを与える提言へと繋がる期待が持てるなど感想が述べられました。

23 日、30 日の 2 回の授業を通して、リサーチブックタイトルの決定、グループに分かれてリサーチブックの完成に向けた作業に取り組みました。特にリサーチブックの完成に向けては、それぞれのドイ

ツの環境政策についてリサーチしてきた記事が全て集まり、編集委員が授業とは別の時間にも委員会を開きまとめと校正の作業を進めています。GUS I での取り組みや 1 年間の成果を発表する SGH 成果報告会が来月に予定されており、また 3 月の欧州へのフィールドワークに参加するメンバーも決定したことから、それぞれの準備、下調べをするグループも稼働し始めました。

3-2-19●2018/02/06, 13　－GUS I　授業－（高校 2 年生）

SGH 活動報告会に向けて

GUS I クラスでは、3 月のヨーロッパフィールドワークの事前準備、1 年間のリサーチの集大成となる冊子完成に向けて取り組む中、2 月 17 日（土）同志社大学今出川校地で予定されている同志社国際高等学校 SGH 活動報告会の準備にも取りかかり忙しいスケジュールをこなしています。報告会チーム、冊子編集チーム、フィールドワーク計画チーム、それぞれのチームに分かれて効率的に協力する様子は、さすが 1 年間一緒に学んできたクラスだと感じさせられます。

作業の後、報告会で一年間の取り組みの概要について発表するチームがクラスでプレゼンテーションを行いました。教員、生徒たちからのアドバイスを受けて改善のうえ、本番では活動の成果を自分たちの言葉と表現で伝えます。

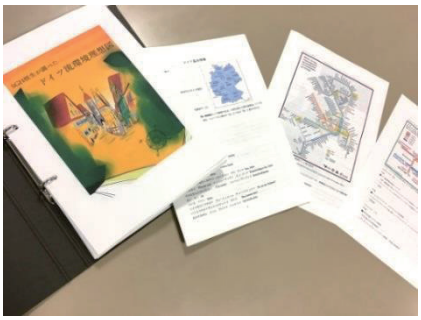
3-2-20●2018/02/20 ーGUS Ⅰ 授業ー(高校 2 年生)

iPad を取材の現場で使いこなす

本日の GUS Ⅰ のクラスでは、まず 3 月のヨーロッパフィールドワークに向けて、ドイツの環境政策について生徒たちが調べまとめて来た報告書冊子とフィールドワーク各行き先の事前調査をまとめたしおりについての最終確認を教師と生徒で行いました。冊子は後にフィールドワークの参加報告と合わせて製本をする計画をしています。またヨーロッパフィールドワークのしおりは、3 月 21 日～31 日のフィールドワーク参加者が持って行くことになります。バインダーにまとめられた全ての資料はとても充実したものになりました。

その後、本校の情報科より松野先生を講師にお招きし、フィールドワークなどでの現地取材で iPad を有効的に利用するためのノウハウについてレクチャーをしていただきました。スマートフォンなどを使い慣れた生徒たちですが、使いこなせていなかった機能の再確認、軽視しがちな情報の管理について、また取材先での iPad 使用におけるマナーにまで及ぶ大事なことについて知識を得ることができました。

早速、3 月のヨーロッパフィールドワーク参加者にとってはもちろん、その他の生徒たちにとっても今後のリサーチにおける取材現場での iPad 有効利用ができそうです。来週は、さらにこの iPad を活用したクラス全体での情報共有について、OECD 国際会議に実際に参加しブログを作成した経験を持つ卒業生の先輩を講師にお招きし、レクチャーを受ける予定をしています。



3-2-21●2018/02/27 ーGUS Ⅰ 授業ー(高校 2 年生)

ヨーロッパフィールドワークに向けての最終準備 ブログを作って情報を共有しよう OECD 参加者の先輩より

今期最後の授業となった本日の GUS Ⅰ のクラスでは、3 月のヨーロッパフィールドワークに向けて、さらなる iPad の有効活用として、クラス全体でヨーロッパフィールドワークの現場をオンタイムに近い感覚で情報共有する方法についてレクチャーを受けました。講師は卒業生で 2014 年に本校からパリでの OECD 国際会議に出席したメンバーのお 1 人、位ノ花和那先輩です。位ノ花さんは、ご自身の発案で会議の行われたパリから毎日ブログを発信し、会議に実際には行っていない広い範囲の人達に情

報を共有し、また記録となり意見交換もできる掲示板としても大変有意義なものとなったそうです。

ブログの作成の方法から、記事を載せる上での注意点までご自身が発信した記事を参考にお話を伺いました。次に生徒たちも iPad を使い、本校のコミュニケーションセンターを知らない人に紹介するという例題で 1 人 1 人が写真を撮り記事を書き、アドバイスを受けたように工夫をしてブログ作りにも実際に挑戦しました。

問題解決方法を学び、そして環境先進国であるドイツの環境政策について様々な方法でリサーチや事前学習を進めてきた生徒たち。その知識を持って、いよいよこの春休み期間中 3 月 21 日～31 日に渡りヨーロッパフィールドワークに出発します。今後さらに生徒たちからどのような情報が共有され、報告されるのか楽しみです。

3-3-1●2017/04/11　－GUSⅡ　授業－（高校 3 年生）

第一回 Global Understanding Skills Ⅱ「WALLS」

2 年前にスタートした SGH の取り組みが最初の節目を迎えます。SGH 指定一期生である高校 3 年生の講座が始まりました。今後の展開として問題解決の提言先を探る一方で、目の前にある「壁」をどうやって乗り越えていくのか、1 人 1 人がグローバルリーダーとなるため考え、学びを深めていきます。

今日は、人々を分け隔てる「壁」がテーマとなった VTR を視聴しました。その中に出てきたものは、メキシコ/アメリカ、モロッコ/スペイン、ジンバブエ/南アフリカの国境に立つ 3 つの壁で、その壁にまつわるそこで暮らす人々の 3 つの物語、そして壁に疑問を抱きながらも警備にあたる人たちが紹介されました。国境を越えようとして命を落とした名もない人に十字架を立て、そして国境地帯の砂漠に命を繋ぐ水を置き続ける人もいます。人々は命がけで豊かな生活を求めて、また宗教の迫害などから逃れるために壁を越えようとします。かつてはベルリンの壁の崩壊が象徴されるようにグローバル化が進む世界で、今、矛盾するように増殖する壁。その壁によって隔たれた世界は果たして持続可能な世界なのでしょうか。そして平和へと向かっているのでしょうか。

VTR の最後の言葉が印象的でした。
「壁」がある限り超え続ける、なぜならそれは使命で、「壁」なんて無意味だと世界中に知らしめるために．．．

3-3-2●2017/04/18　－GUSⅡ　授業－（高校 3 年生）

新聞記事から調べ学習の方法論

今日の授業は三つの新聞記事を精読し、そこから調べ学習の有効な方法について学び、同時に提言についてのヒントを探し出す取り組みをしました。最初の記事は、京都で木造五階建てのビルが建設されるというニュースでした。この課題は、今まで学んできた、真庭の地産地消の取り組み、京都の旧京北町で地場産業であった林業の衰退からの脱却を目指す取り組み、ドイツでの環境に配慮した建築など、そして環境問題と重なります。生徒たちは、記事からまずキーワードを見極め、iPad を使い、知りたいこと、調べたいことへ無駄なく到達することを心がけました。興味を持ったことに積極的に取り組み、視察などを重ね、そこから提言する内容を絞って行くことを目指します。イメージする持続可能な社会を、身近なニュースから具体的に考える有意義な時間となりました。

3-3-3●2017/05/09 －GUSⅡ 授業－（高校 3 年生）

『少女は自転車に乗って（Wadjda）』- 文化の違いを理解する

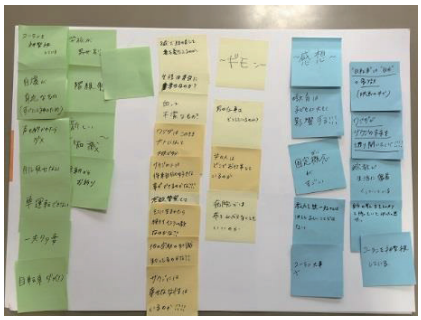
今日の授業では、「少女は自転車に乗って」を視聴し、その後新しく知ったこと、感じたことそして学んだこと、これからの社会はどうするべきかについてまずグループで意見を出し合い、その後全体で共有しました。私たちとは遠いイスラムの世界に暮らすWadjidaという少女の姿を描いたお話です。

女性が車の運転を許されない、外を一人では歩けない、一夫多妻制などで悲しむ母親も登場しますが、そのような社会でも、なんとか知恵を絞って自分の目的を達成しようとするワジダはエネルギッシュで、たんなる無力な被害者ではありません。ワジダは校則も平気で破り、西洋音楽を聴き、ジーンズとスニーカーを履きこなす女の子で、幼なじみの少年と自転車レースをしたいがために自転車を手に入れようと奔走します。

KJ 法を用いたまとめでは：

‣自由を自分の手で勝ち取ることは当たり前のことではない
‣制限のある暮らしの中でも工夫して自転車を手に入れた少女に対する感心の気持ち
‣石油で裕福だと思われているアラブ諸国でも、部族で貧富の差が大きいこと
‣公衆の面前で声も聞かれてはいけない女性達は、生き難いのか、守られているのか、どちらなのか
‣またこれからのグローバル社会においてそういった違う文化の人たちと交わる際には、それぞれの国でそれぞれを受け入れる体制を作らないといけない。宗教への理解などが求められる

などと多様な感想と意見を交換することができました。



3-3-4●2017/05/16 ーGUSⅡ 授業ー（高校 3 年生）
具体的な提言に向けて

今日は、今まで調べてきた中で具体的にどのような提言が候補として挙げられるか、またその提言先として最初のコンタクトは具体的にどの機関が適しているのか、について iPad を使用し各自でも調べながら皆で協議をしました。

まずカテゴリーとして、京田辺市、京都市、京都府、NPO など諸団体に対しての具体的な提言を出し合いました。その場合に、それぞれにどのような窓口がありどのような取り組みをしているかについて事前にリサーチする必要があります。最初のコンタクトを通じて次の可能性が広がっていくと考えています。

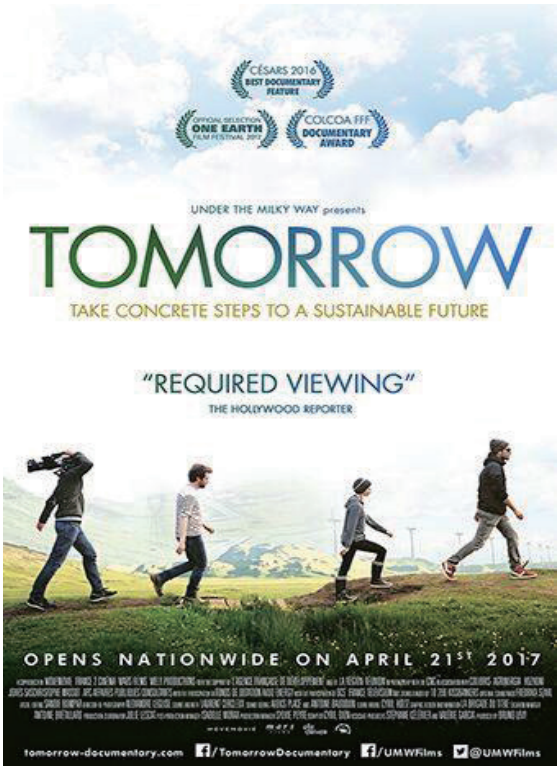
また、今後生徒達が主導で、既に生徒達が訪問もしている Food Bank Kyoto を始め、京エコロジーセンター、また京都府京都市出前トークのご担当者をお招きして講演をしていただく計画も持ち上がりました。既に聞いてみたいことなど意見も出ました。そこから具体的な提言の際のアドバイスをいただき、各所への視察や調査も経て、いよいよ 1 つの動き、Movement を起こせるように準備を進めていきます。

3-3-5●2017/06/03 ーGUS BASIC･Ⅱ その他の取り組みー（高校 1･3 年生）
映画『TOMORROW -DEMAIN- パーマネントライフを探して』

6 月 3 日（土）の GUS BASIC 授業では学びの一環として、本校ホールにて「TOMORROW – DEMAIN – パーマネントライフを探して」を視聴しました。

“人類は絶滅する恐れがある。それも決して遠くない未来に”と 2012 年に 21 人の科学者たちが権威ある学術雑誌「ネイチャー」に、私たちが今のライフスタイルを続ければ、人類は滅亡するという論文を発表しました。
この映画は、その“事実”を聞かされたフランスの女優メラニー・ロランが、母になったことをきっかけに自分の子ども達が暮らす未来のために何かしなければいけないと、解決策を求めて、世界中の既に“新しい暮らしを始めている人々”に会いに旅に出るドキュメンタリーです。

「世界を救うとは言わない、まず身近なことから始めたの」と自分の庭から始めて街中に菜園を広げている人たち、まずは食のあり方を考え、そして再生エネルギー100％の街、地域通貨やグリーン･エコノミーといった経済モデル、グローバルキャピタリズムに支配されない民主主義、最後は将来に備える教育あり方など、私たちも一緒に旅に出て知る感覚で映画が進みます。



小さなことでもいいから自分たちの力でできることをしようということ。そして信念の元に仲間は集まり、その輪が広がり行政をも動かしていく数々の例は、私たちの SGH の学びにとても力強いメッセージをくれました。

“―女優メラニー・ロランは、監督としてもカンヌ国際映画祭で作品が上映されるなど評価が高く、ファッション誌の表紙も飾る女性たちの憧れの存在。そんな彼女が、活動家・ジャーナリストのシリル・ディオンと、フード、エネルギー、マネー、教育の今を巡る旅に出た。“新しい暮らしを始めている人々”との驚きの出会い。世界とつながりシェアしながら、新しいライフスタイルが見えてくる―。”

©MOVEMOVIE - FRANCE 2 CINÉMA - MELY PRODUCTIONS

3-3-6●2017/06/06　－GUS Ⅱ　授業－（高校 3 年生）

『映画 TOMORROW –DEMAIN– パーマネントライフを探して』 －振り返り

今日は、先日視聴した『TOMORROW –DEMAIN- パーマネントライフを探して』の振り返りをしました。その方法としてジグソー形成法を用いました。

【ジグソー形成法とは】

1)　複数の課題を効率的に処理する方法。
2)　小グループが課題ごとに専門的に学ぶ。
3)　課題ごとの専門家がグループを再構成して、全ての課題をシェアする。この時の様子がジグソーパズルを嵌めていくプロセスに似ている。

まずグループに分かれて、それぞれのグループに割り当てられたキーワードについて記憶や印象を出し合い、振り返ります。それをグループ内で紹介し合いより深く知識を深めたところで、次にグループを超え、得た情報をまた紹介し合います。これを繰り返し、質問を受け、そこに補足も加わって行くことで、記憶を定着させるという効果が期待されます。

【今日取り上げた映画の中のキーワード】
- トランジション　パーマカルチャー
- アーバンファーム
- インクレディブル･エディブル（みんなの菜園）運動　アグロエコロジー
- 「9 つの種」種子バンク
- バイオマス･エネルギー
- 再生エネルギー
- レユニオン島
- ゼロ･ウェイスト　プロジェクト
- カーボン･ニュートラル

それぞれの映画の印象や記憶に残った部分が少しずつ違い共有することで、不確かだった記憶の部分が整理され、映画の内容の記憶がより鮮明となりました。

3-3-7●2017/09/12　－GUS Ⅱ　授業－（高校 3 年生）
倫理的な発想が動かしたドイツの脱原発

先日、同志社大学の小原先生の講演の中で、経済でもなく技術でもなく、倫理的視点からこれからの持続可能社会を考えることが重要なポイントになるのではないかというお話がありました。日本人のかつて持っていた自然と共存する価値観に基づいた倫理観についても改めて考えさせられました。今日は、そのお話の中に出てきたローマ法王のラウダート･シ、そしてドイツの脱原発を決定付けた原子力倫理委員会の報告書について、資料からと Youtube からより深く学ぶ授業になりました。

ラウダート･シでローマ法王は、今成長しつつある子ども達のために、わたしたちは一体どのような世界を残していきたいのでしょうと問いかけました。全ての人の共通の財産である地球上の環境資源について、一部の経済的、政治的に多くのものを保有している人々がその問題を軽視し、環境変化により最も貧しい人々が犠牲になることは責任感の喪失だと強く訴えられました。

ドイツの原発は、物理学者でもあるメルケル首相はかつて原発に対しての信頼も厚く原発推進を指示していたのですが、フクシマの原発事故直後に倫理委員会を招集し報告書をまとめさせました。そしてこの倫理委員会には驚くことに原子力の専門家はおらず、原子力が倫理的に正しいのか正しくないのかを問うものでした。そして今の豊かさのために次世代にゴミを押しつけることは倫理的に正しくないという報告からすぐに一転 2022 年までに脱原発へと方向転換させたのです。ドイツの脱原発決断のキーワードは、倫理観とそして地方分権だと言います。日本人の倫理観が問われ、そして中央集権体制からの発想の転換が求められています。

【生徒たちの意見】

・情報の溢れる社会でそのほとんどが通り過ぎていく中、無関心な人たちの関心を引くことが持続可能な社会の構築に必要だと思う
・意見の違う双方の立場から物事を考えることが大切だと思う
・特に既得権益を守りたいという日本の体質を変えない限り、発想の転換が難しいと思う
・発展や正義という大義名分の元、結局弱者を犠牲にしている現状は、同じ人間に対しての尊重がなくおかしいと思う
・生活のために開発された民間に使用されるものが戦争の武器に転用されるのは悲しい

Kommissionsbericht zur Energiewende: ein Gemeinschaftswerk für die Zukunft

Die Kernkraftwerke in Deutschland sollen nur noch so lange laufen, bis risikoärmere Stromerzeugung ihre Leistung ersetzen kann. Die Ethikkommission "Sichere Energieversorgung" ist davon überzeugt, dass sich der Ausstieg aus der Kernenergie innerhalb eines Jahrzehntes abschließen lässt. "Wir wollen, dass der Strom sicherer wird, aber auch bezahlbar bleibt", sagte Bundeskanzlerin Angela Merkel bei der Entgegennahme des Berichts der Kommission.

3-3-8●2017/09/23 －GUSⅡ その他の取り組み－（高校 3 年生）

SGH ブース@文化祭・同国でフードドライブ

秋晴れとなった本校文化祭の日、GUSⅡを専攻する高 3 生はラウンジにて SGH ブースを開設しました。本校生徒にはもちろん文化祭のたくさんのお客さまに向けて、3 年目に入った現在までの GUS クラスの活動と学びについての展示をしました。

大きなスクリーンに活動記録を流した視聴コーナーを設け、カウンターには過去に掲載された新聞記事、活動報告書を手にとって見ていただけるよう、また持ち帰っていただくこともできるよう、資料を並べ、そこに座っていた生徒たちが通る方に声をかけるなど質問に答える姿がありました。

同じく本校でのフードバンク活動について、生徒会メンバーが中心となりフードドライブへの協力の呼びかけも行いました。この活動は SGH の学びから波及したもので、生徒たちが自主的に活動してい

ます。呼びかけに応じて集まった食品は計 73 キロにもなり、すぐにフードバンク京都に届けられた食品は、子ども食堂、フードバンクに届けられた 10 分後には緊急支援先にも配られました。子ども食堂では、オリーブオイルやバジルソースなど子ども達からは好評で完食だったそうです。また緊急支援で食糧を受け取った高齢の男性は非常に喜ばれ、何より安堵されていたそうです。

フードバンク京都の方からのメッセージです。
“毎回、感じることですが、相談者の方々は食料が確保されると、次の課題にようやく目を向けることができるため、一食の大切さ、並びに食料提供を担って下さっている、貴団体による、支援のありがたさを痛感しております。当事者の方とは、明日再び面談し、今後の生活再建に向けて他機関と連携の上、支援を進めていきます。様々な食品をご提供いただいた皆さまに是非お礼をお伝えいただければ幸いです。”

文化祭ではこの活動が広く周知され、日頃の食に対する意識が変わるきっかけとなり、何か小さな事でも環境問題の解決や困った人の役に立てることを知ること、そして知ってもらうことができました。この GUS クラスでの学びと活動を通じて、対外的に働きかけるという大きな意義のある 1 日となりました。

3-3-9●2017/09/26 －GUS Ⅱ 授業－（高校 3 年生）
もったいない －TASTE THE WASTE

今日は、食品が辿るあらゆる課程に関わる様々な人への取材を通し、世界規模の問題となっているフードロスの真実に向き合い、私たちにできる解決策を見出そうとするドイツのメディアによって制作されたドキュメンタリーを視聴しました。最初のシーンでは、オーストリアのウィーンで夜中に自転車でスーパーのゴミ箱を巡り、そこから食べ物を調達するゴミ箱ダイバーと呼ばれる若者達が紹介されました。彼らは生活困窮者ではありません。今も食料がなく餓死していく人たちが減ることに廃棄食品を減らすことで少しでも貢献できるならと行動を起こした人たちです。信じられない真実として、私たちが日々食べる食品はその 3～5 割が食卓に届く前に捨てられています。食品廃棄は結果的に食料の価格を上昇させ、また埋め立てられる食品から発生するメタンガスは二酸化炭素の実に 25 倍もの威

力で環境破壊を進め、弱い立場の人たちの生活を益々困窮させているのです。

これまでにもフードロスに関わる問題について学び、先日の文化祭では生徒会を中心にフードバンクの活動も行ったところです。日本でも多くの食品が食べられるのにも関わらず廃棄されていることを学び、自分達にできることを考えてきました。今日のVTRでは、消費者としてどう選択することが正しいのかが問いかけられていました。誰もが消費者として、スーパーでは食品を吟味して買っています。賞味期限がなるべく先の商品、また少しでも赤くて大きくてきれいなトマトを手に取っていませんか。その当たり前の消費者の行動が、このドキュメンタリーを見て、本当に正しくて意義あるものなのか考えさせられました。消費者のニーズに応えるため、大手企業は食品に厳しすぎる規格を設け、それにより生産者は苦しめられ、その結果としてスーパーには過剰な量の食品、そして美しすぎる野菜や果物が常に並べられています。その陰では十分に食べられるはずだった食品が、賞味期限が迫ったため、色形が規格に合わないという理由で大量のゴミとなっています。食品が圧縮されゴミとなる映像はショッキングで、誰もをとても悲しくむなしい気持ちにさせるものでした。

廃棄農産物を減らすために直売に取り組むアメリカの農場、残ったパンを燃料として再利用するドイツのパン工場、廃棄食品を発酵させるドイツのバイオガス発電所、家畜のえさに安全に加工する日本の業者など、再利用する取り組みも紹介されていました。ただ、人のために作った物は人が食べるべきだと言った農家の人の言葉が印象的でした。廃棄食品をただ埋め立てるのではなく再利用を考えると共に、まず根本的にこうしたフードロスを減らすために、消費者が贅沢ゆえ食品を無駄にしているという羞恥心を持ち、環境のために賢い選択をし、食品の流通の構造が見直される必要があります。

3-3-10●2017/10/24　－GUSⅡ　授業－（高校2年生）
提言書作成

今日のGUSⅡの授業では、先日のYWCA主事山本知恵さんからの講義、アドバイスをいただいた点を踏まえて、各グループに分かれて自分たちで作成した提言書を見直し修正する作業に取り組みました。

生徒たちの提言として大まかに以下のような項目が挙げられていました。

●プラスチック容器の再利用、プラスチックゴミを減らす
●教育で持続可能な社会について、食のあり方についての意識を高める

●フードバンクの活動を広める
●コミュニティーを作り持続可能な社会を作る
●飲食店での食べ残しを減らす
●地産地消、また地元のサイクリングロードの整備

まとまった提言書は次回グループごとにプレゼンテーションをして、全員が共有します。そしてお互いの評価、また山本さんにも改めてアドバイスを受ける予定です。

3-3-11●2017/11/07, 10 ーGUSⅡ 授業ー(高校 3 年生)

提言のプレゼンテーション

高 3GUS クラスは、SGH 最後の集大成として研究成果の提言をすることを目指しています。今回のクラスでは、今まで学んできたことを踏まえてそれぞれの実現したい社会について提言をまとめ、各グループに分かれてプレゼンテーションを実施しました。他のグループのプレゼンテーションを評価項目毎に 10 段階評価とコメントも記入しました。そして数々の企画を立ち上げ実践してこられた YWCA の山本知恵さんにも再びお越しいただき、アドバイスをいただきました。

『フードバンク京田辺を立ち上げたい』ということを目標にしたグループでは、自治体という小範囲で地域の貧困をきめ細かく助け、より地域のつながりを深め、そこから支援の輪を広げていくという企画を立て、分割統治法を使った表を用いて、うまくいった場合、行かなかった場合のシュミレーションをしていました。
他にも『スーパーマンはどこだ』というタイトルでプレゼンを行ったグループは、スーパーマンをエコや環境に配慮できる人の総称とし、京田辺市の公立幼稚園、小学校を対象に実践に基づいた環境教育の実践を目指す企画、また同年代を対象とした提言では『全国で食品ロスを 0 に』を目標としたグループで、本校の文化祭で規格外や賞味期限の近くなった食品を使った模擬店を出し、食品廃棄が減り地産地消なども含めた食に対する意識の向上を目指す企画、『スターバックスのプラスチックゴミ 0 計画』では、地域のスターバックスで店内飲食のプラスチック容器リユースを働きかけ利用者の若者の意識向上を目指す企画があります。また『Food Waste』では京田辺市のゴミを削減ともっと踏み込んでゴミのエネルギー化、『もったいない』では JA やましろの規格外の農産物の販売の促進など、ど

のグループもプレゼンによってアイディアだったものが形を成し具体化されていました。

山本さんは、これらを社会の中で実践するには何よりも協力してくれる仲間を増やしより周りの共感を得ていくことが大切だとおっしゃいます。そしてプレゼンは一方通行ではなく対話であり、聞き手が誰かということで同じ目的であってもプレゼンの内容を変えることは必要ですとアドバイスくださいました。そのためにも提言に対する実践の対象をしっかり絞ることがポイントになりそうです。

3-3-12●2018/01/30　－GUSⅡ　授業－（高校 3 年生）

最後のクラス

SGH プログラム、GUSⅡ高校 3 年生の最後の授業が終わりました。本校での SGH プログラム一期生となる生徒たちです。今日は、それぞれのチームでの提言のアウトラインを皆でまとめて、具体的に以下のように案として決定しました。

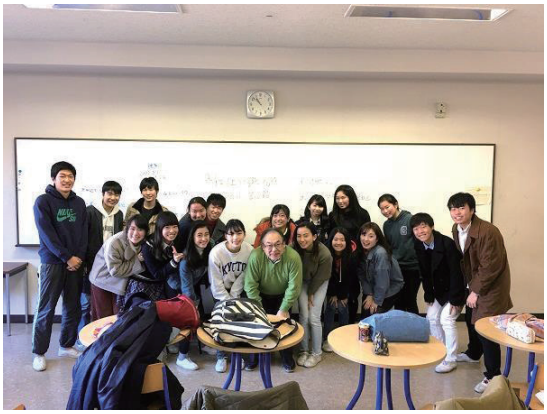
チーム講座Ⅰ『京田辺市でのフードバンクの実施』
提言先：京田辺市
チーム講座Ⅱ『マイクロプラスチック規制』
提言先：京都市

さらに小グループで役割分担をして、今まで学んできたことをまとめたプレゼンテーション等の準備を進め、担当者に連絡を取り春休みにそれぞれ提言をする予定です。

また今日は最後に 1 人 1 人この 3 年間の学びを通して、またこのクラスについて一言ずつ感想を述べていきました。

「今の社会問題を様々な視点から学び、その知識やディスカッションした内容が受験に役立った」
「発表、レポート作成の機会がとても多く、そのスキルが身に付いた。語学力の大切さも実感した」
「実際現地に行って学び、また現場で活躍する講師の方々との出会いは大きな刺激となり、自分の興味のあること、目標を見つけることができた」
「多様な視点から考え、様々なディスカッションができたことは、これからの自分の力になった」
「テストのための勉強とは違い、自分から関心を持ち取り組むクラスだった」

「人の意見も聞き、自分で考え、その考えを伝えることの大切さを学んだ」
「受け身だった自分が、クラスの積極的な仲間に刺激を受け変わろうと思えた、変わることができた」
「クラスの中でも様々な意見があり、最も活発に意見の言える場でもあった」
「生徒が多様なバックグランドを持ち、意見を交わすことのできるとても国際高校らしいクラスだった」
「環境問題、社会問題を自分の身近な問題と捉えることができ、自分に何ができるか真剣に考えた。これからも学び続けて、将来は解決できる人になりたいと思った」
「フィールドワーク、外部講師、クラスから刺激を受け、自分も何かやりたい、できると思わせてくれた」
「目を向けなかった問題にも関心を持つようになった」
「同じ意志を持ち切磋琢磨して学んだことで、クラスの皆を心から尊敬できた」
大学に行ってもこのクラスでの経験を活かしたい、終わりにせず学びを続けたい、また大学選択にこのクラスでの経験が影響したと述べた生徒が多かったのが印象的でした。
そして教員からも、
「SGH1 期生として学んでくれてありがとう。信頼してこのクラスを運営してくることができた」と生徒たちへの感謝の気持ちが伝えられました。旅立っていく１人１人の生徒たちの活躍が楽しみです。



3-4-1●2017/05/13 －GUS BASIC 講演－（高校 1 年生）
現代のキーワード「持続可能な社会」 －聖書を手がかりとして考える－

今日は、同志社大学神学部より小原克博先生をお迎えしてお話を伺いました。

なぜ、このテーマで聖書なのでしょう？「聖書を探っていけば、持続可能な社会の答えが与えられるわけではありません。ただ紐解くことによって、持続可能な社会というものは長い長いいわば人類史的な課題であるというところに目を向けて欲しいのです」とお話が始まりました。

●はじめに
先生がちょうど高校生だったころは、経済成長が最優先で、持続可能という言葉は存在すらしませんでした。ただ、同じころに流行った、ナウシカ、北斗の拳などに代表されるアニメーションでは、人間による誤った行動で高度な文明は簡単に終わってしまうという危機感がもう既に描かれていました。
●イエスの食卓が投げかける課題
聖書では、イエスは社会から阻害される人をあえて食事に招き、神の下では区別がないことを示しています。持続可能な社会を考えるときに、食事は大きなポイントとなります。人類学的には食事の風景はその社会の秩序が端的に現れるものだとされます。囲炉裏を家族で囲み食事をした時代から、現代社会は孤食となり、食を通して、まさに時代の変化、考え方も大きく変えられていることがわかります。
●創造論の再解釈　－人間中心主義を相対化する道の探求
聖書では神がエデンの園を作った時、最初の人間に「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」と戒めました。私たちの周りは、魅力的な誘惑であふれています。科学技術もそのひとつで、原子力でもわかるように、ただ欲望のままに欲することは、喜びだけでなく、危機を招き、命を奪うこともあるのです。
●経済成長至上主義から「大地の安息」へ　－エネルギー消費･再生の作法
聖書では安息日、大地の安息でも、休息を大切なものとしています。ネット社会である現代はどこへ行こうと休むことが難しくなっています。また大地である地球のエネルギーも絶えず消費され続けています。もう一度休むことの必要性を見直し、どうやって安息を手に入れ、自分自身を取り戻し、自分自身を客観的に見る時を確保するかは、持続可能な私たちの人生のための課題でもあります。
●「大きな物語」を多声的に語るために
ローマ教皇フランシスコは 2015 年大変重要な「エコロジカルな回心」を呼びかけました。持続可能な社会の必要性と、もしこのまま環境破壊や温暖化が進めば、最初に被害を受けるのは最も貧しい弱者であると強調したのです。持続可能な社会を考える際に、社会的弱者の存在を意識する必要があります。そして、皆さん高校生ならではの視点で想像力を働かせて考え、物語を描いて欲しいと思います。

最後に、聖書からの様々なエッセンスを吸収し、ピリッと辛みのきいたわさびのような存在になって欲しい、皆さんは同志社国際で学んでいるアドバンテージを最大限に活かして欲しいとおっしゃいました。

3-4-2●2017/06/17 ーGUS BASIC 講演ー（高校 1 年生）
身近な“Tomorrow”を探して ー岡山県真庭市の取り組み

先日の映画の上映会、神学部の小原先生のお話を経て、今日は佐藤靖子教諭より、日本でも明日のために既に行動を起こしている岡山県真庭市の取り組みについて講義を受けました。岡山県真庭市へは、毎年 GUS Basic でフィールドワークに訪れています。

先日の映画「Tomorrow パーマネントライフを探して」では、今のライフスタイルを続ければ人類が滅亡することを科学者達が証明したことを受け、母になったメラニーさんが世界中の新しい生活を始めた人々を訪ねましたが、私たちがどうすべきかという明確な答え、結論は語られていません。また、聖書の観点から持続可能な社会についてお話いただいた小原克博先生は、消費文化が世界を席巻した 20 世紀の物語は終わり、新しい価値観を持った 21 世紀の大きな物語を描いて欲しいとおっしゃいました。私たちの授業でもまさにその答え、そして大きな物語を探しているところなのです。今日、紹介された岡山県真庭市の取り組みは、当たり前、無理だと思っていたことを見直し、人々の生活の豊かさを取り戻す挑戦をする例として、私たちが描こうとしている 21 世紀の大きな物語の大きなヒントをくれるはずです。

岡山県真庭市は、書籍「里山資本主義」（藻谷 浩介(著), NHK 広島取材班（著), 角川 One テーマ 21, 2013 年出版）の第一章、世界経済の最先端、中国山地ーゼロからの経済再生、地域復活で紹介され、一躍バイオマスタウンとして有名になりました。人口減少に悩む山深い過疎の地域であった真庭市が、その人口減少のスピードを緩めるために現状に逆らうのではなく、既に自分たちにあるものを見直し、そこにさらに価値を見出すという取り組みを、行政が主導で行っています。

佐藤教諭は、どこかへ何か新しいものを「取りに行く」のではなく、あくまで自分たちのものを「取り戻す」というその意識に注目されていました。そして取り戻すものは、20 世紀の物語で信じられていた経済的な発展がメインではなく、生活の豊かさだということが大きなポイントでした。今後の取り組みでも、自分たちにはどのようなことができるのか、どのような社会に生きたいのか考えていきます。

3-4-3●2017/11/04 －GUS BASIC 講演－（高校 1 年生）

共生社会の条件

今日の GUS Basic は、学校からも近い精華町で NPO 法人 そら を運営されている地主明広氏をお招きし「共生社会の条件」について講演をしていただきました。地主氏が障がいを持つ子ども達の支援活動を始められたのは同志社大学在学中のことで、障がいを持つ子ども達と一緒に過ごすボランティアとしてでした。それから今日までその活動に携わって来られました。そして今日 GUS Basic の講演を通して、傷付きやすい人達を包み込める社会を作るために一緒に考える機会をいただきました。

この GUS Basic 講座で映画『Tomorrow パーマネントライフを探して』を視聴されたことも知っていただいていて、映画では持続可能な社会のために今ある自分達の暮らしを見つめ直す提案がたくさんあったこと、そして今の大企業を中心としたグローバル資本主義、効率や生産性を重視する社会に対する問題提起があったことを振り返られました。そして、映画では十分に描かれていなかったこととして、今のこの社会の利便性や尽きない欲望を一方で享受できていない弱い立場の人達に障がいを持つ人達もいるということをお話くださいました。私達の周りには、障がいを持つ人は決して少なくありません。近年、発達障害と診断を受けて、特別な支援を受ける人が増えています。ただその支援は、障がいのある人をない人と隔離、分離してしまうことにもなっているジレンマがあるとおっしゃいます。特別支援学校や特別支援学級がそうです。支援は必要です、しかしこのような施設が増え続けることが果たしてこれからの望ましい社会なのでしょうか。

地主氏から 2 つの問題提起がありました。
目指すべき Development の形：1 人 1 人が大切にされる民主主義、誰もが共生できる社会とは？
やさしさの上に必要なもの：助けたい人達が多くいる社会、これからの助ける一歩先の社会とは？

地主氏は、自らの活動を通してこれからも世の中の至る所にみんなが共生できる社会を目指せる仲間を増やして行きたいとおっしゃいました。そして、自由な若い今の内に学校内外で様々なものを見て学んで欲しいとメッセージをくださいました。

【NPO 法人 そら について】
乳幼児の親子が集える場所の提供と支援、発達障がいを持つ子ども達と保護者のための療育プログラムの実施、障がいを持つ子ども達、それぞれにあった過ごし方のできる場の提供、また夏・冬・春休みの間には「スクール活動」を行ない、長期休暇以外の週末にも、遠足や地域行事への参加など、集団活動をされています。この活動は高校生・大学生などのボランティアスタッフによって企画運営されています。最近では、子どもの貧困問題にも取り組まれ、学習支援、子ども食堂の場所の提供などもされています。
NPO そらホームページ：http://npo-sora.cocolog-nifty.com/

3-4-4●2017/11/11 ーGUS BASIC 講演ー（高校 1 年生）

福島原発事故の前後

本日の GUS BASIC では、先日 GUSⅡで講演をしていただきました、毎日新聞大阪本社社会部編集委員の大島秀利氏に再びお越しいただき、課題としての環境汚染、破壊への考察、どのように環境を守るかについて原発事故の取材経験からお話していただきました。大島氏は、1990 年から 93 年まで福井県敦賀駐在の記者として原子力高速増殖炉もんじゅを取材され、以来多くの原発に関する記事を伝えてこられました。当時、原子力はクリーンエネルギーとして、また資源の乏しい日本における夢の事業でした。ただ大島氏は取材を通して早くから原子力の抱える問題に気付かれ、原子力の夢の崩壊を実感されます。

福島の原発事故が起こるずいぶん前、2 つの原子力発電所での過酷事故が起きています。それは、チェルノブイリとスリーマイルでの事故です。この事故によってわかった原発が抱える放射能の滞在的リスクの大きさは残念ながら日本にはその実態が十分には伝えられませんでした。日本での受け止め方は、日本とは違ったずさんな安全設計だったからだ、日本では起こるはずがないとされ、また当時の原子力安全委員会により「日本では可能性は十分小さく、原子炉施設のリスクは十分低い」とお墨付きまでありました。2000 年にチェルノブイリ原発事故の取材に現地に赴かれた大島氏は、廃墟となった街や施設、広大な廃棄場には事故の処理に当たり被爆した戦車やヘリコプターなどの軍事車両 2000 両以上が放置されている光景を目の当たりにされ、その貴重な取材写真の数々を共有してくださいました。事故当時にゴルバチョフ大統領が「これは小さな核戦争」と言ったその言葉通り、まるで戦争の跡そのものの光景から、原子力のあまりにも大きすぎるリスクをその取材で感じられ衝撃を受けたのです。

そしてその後起こりうるべくして起きてしまった福島の原発事故、そこでは何の落ち度もない多くの人々が被爆、避難を強いられ、故郷に残っても去っても苦しみを味わうことになりました。1 万 5 千人もの子ども達がある日突然学校に通えなくなる、家族も友達もばらばらになる、そんな状況を想像してみてくださいとおっしゃいました。目に見えない過酷な被害の実態は、チェルノブイリの光景と重

なったそうです。最後に、海外で起きていることを他人事として見ない、歴史や過去のことを学ぶ大切さ、そして皆さんの世代が担っていく社会では、二度とこのような過酷な被害に苦しむ人がいないようにして欲しいとメッセージを送ってくださいました。

3-4-5●2018/01/20 －GUS BASIC 講演－（高校 1 年生）

コスモポリタン

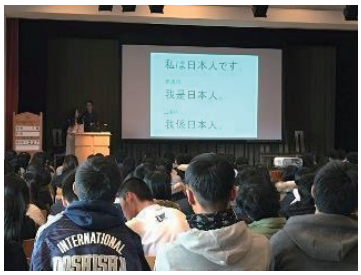
今日は、世界を股にかけ最前線で活躍されるビジネスマン佐伯盛一氏と、奥様で現在は税関や空港警察の依頼で通訳として活躍されている中国広東省ご出身の素菜（もとな）様お 2 人を講師にお招きし、「コスモポリタン」と題して講義をしていただきました。

最初に素菜様より、ご出身の中国広東省について中国語でお話を伺いました。通訳は佐伯氏です。ご出身の広東省はとても自然の美しい街で、日本に来て生活のペースの早さに驚かれたくらいゆったりとしたペースで時間が流れているそうです。毎日のニュースで中国という国について報道されない日がないくらい、私たちの身近な国ですが、その国土は広く、どの地域かによって、文化や言葉の特徴は多様で人々の生活も大きく違うことをご説明くださいました。変わってお仕事については流暢な日本語でお話くださいました。税関から依頼されて通訳をされる中、近年の中国人による金の密輸やカードの偽造による犯罪が増え、その取り調べの通訳の機会の多いことを嘆かれていました。ただ犯罪を犯す人には、中国の経済が安定せず貧しい生活を送り、苦労の多い生い立ちである人も多く、また自分たちのグループの価値観が全てになってしまって身勝手な人がいたり、通訳としての立場を超えて気持ちが高ぶってしまうこともあるそうです。素菜様は母国はもちろんそして今住む日本が大好きだとおっしゃいます。

佐伯氏は同志社大学を卒業後、メガネフレーム、サングラス等の製造販売、海外輸出を手がける会社に入社され、以来 25 年以上中国と関わる商品開発などに携わって来られました。佐伯氏からは、中国の取引先の対応、従業員の行動など、日本の常識では考えられないことが起こることから、国が変われば何か起こるかわからないということを実際の事例を挙げてご説明くださいました。身の回りの物で、1 つの国で原料の生産から製造そして組み立てまでされているものは少なく、あらゆる国を跨いで

商品ができあがっていること。世界的分業で効率良く生産し物価を下げ、その結果人々の生活が豊かになるとされ、このような形になったのがまさにグローバリゼーションだとおっしゃいます。そのグローバリゼーションの落とし穴、そしてそれを防ごうとする企業の社会的責任を問う基準の設定についてもご説明いただきました。とにかくビジネスの現場でも多様な価値観のあること、そして沢山の本を読んで学べることは多いと何冊かの書籍をご紹介いただきました。様々な価値観の違いや、文化の違いを冷静に受け止めて、それを前向きに捉えられてご活躍されている姿が印象的でした。

今日はご夫婦で国を跨いで実社会で起きているお話をレクチャーいただき、貴重なお時間を本当にありがとうございました。



3-4-6●2017/06/20　－GUSⅡ講演－（高校 3 年生）

フードバンク京都の取り組み

今日は、フードバンク京都代表の高畠由美さん、そして農業指導をされている野木祥正氏にお越しいただきお話をお聴きしました。きっかけは、本校生徒会のメンバーが「学校でもフードバンク活動がしたい」とフードバンク京都の事務所を訪れたことでした。

フードバンクとは、まだ十分に食べられるのに、いろいろな事情で捨てられていた食品を企業や商店、農家、各家庭から無償で引き取り、それを必要としている人々に無償で届ける活動･システム･団体で完全なボランティアです。そして日本での食品ロスは驚くことに年間 632 万トン、これは世界全体での食糧支援量の約 320 万トン（2014 年）の倍近くにもあたるというご説明を受けました。

日本においても 6 人に 1 人もが困窮の状況だとされています。世界全体の穀物生産量は毎年約 25 億トン、人口が 73 億人とした場合に 1 人当たり年間 340 kg と多すぎるほどの穀物が行き渡るはずなのに、餓死する多くの人のいる現状です。飢餓は決して食べ物が足りていないからではなく、日々の私たちの選択、例えば無駄に買い捨てることで作り出されているということに愕然とさせられます。

フードバンク京都では、フードドライブに最も力を入れています。これは家庭や個人農家、団体にも協力を呼びかけて、余っている食品を必要な人にタイミングよく届ける活動です。そして活動の思いとは、誰の心にもある『誰かのために役に立ったと感じたときの喜びに気付いてもらうこと、その輪

を広げること』このことこそが根幹にあるものだとおっしゃいました。

もうお 1 人、フードバンクが取り組んでいる野菜支援で野菜作りの指導をされている農業学校スモールファーマーズ講師の野木祥正氏にもお話を伺いました。実際の畑の土を生徒に見せ、農薬を使わない自然の摂理によってもたらされるその土がどれほど豊かなものかをご説明くださいました。自然界での、出したら入ってくるという法則の下、植物や生物はお互いの調和を保ってこそ健康に生きられるというお話はとても心に残りました。生徒達もその土を興味深く触り、その柔らかさに感動していました。

お 2 人のお話に共通して、私たちの日常生活の中で選択を迫られたとき、利己的でなく利他的に物事を判断していくこと、それは結局自分のためでもあるということを強く語られました。この意識は私たちが探求している持続可能な社会にも通じるものだと皆が感じたのではないでしょうか。

3-4-7●2017/06/30　－GUSⅡ　講演－（高校 3 年生）

提言し、行動する人たち

今日は、『提言し、行動する人たち』と題して、京都新聞論説委員の十倉良一氏に講演をしていただきました。十倉氏は現職の以前には、社会部で警察、裁判所、大学担当を経て、滋賀本社に勤務になられて以来長年に渡り琵琶湖の環境取材と報道に携わって来られました。十倉氏がご自身の経験から、そしてその取材で出会った印象に残る方々についてお話をしてくださいました。

環境問題に取り組む 4 名の方達
●10 代の「環境」NGO　太田航平さん
物怖じせず、若いからこそやってやろうという気持ち、大人の理解を得て自分の理念を実現
●琵琶湖の研究者（元滋賀県知事）　嘉田由紀子さん
気付きと共感があってこそと教えてくれた
●型破り公務員　北川憲司さん
理念だけではダメ、その気にさせる、両方が得するアイディアで環境行動への仕掛けを
●環境滋賀の「風の人」　藤井絢子さん
足元からのまなざし、ACT LOCALLY をつないで、そして小さな輪を広げて

この 4 名に共通することは、論じる前に、その場に立ち、感じ、気づき、現状を調べ、課題を見つけ、そして解決に向けて人の輪を広げているということでした。そして皆さんとても面白くておしゃべりな方だそうです。今後の提言においても、それぞれの方の取り組みから学ぶべき事が多くありました。

十倉氏は 21 世紀の循環型社会の姿を考えたいという記事の中で水を取り上げて、生命の源の水が自然の中で循環し、生き物やひと、暮らしに恵みをもたらしていることを私たちの地域、流域で思い起こすことの必要性を書かれています。この自然の摂理である「循環」については、先日のフードバンク京都のお話でも大きなキーワードとして私たちの印象に残っています。

十倉氏の琵琶湖の取材についての記事の中でとても印象的な文章がありました。
「人と自然の共生は可能かといった議論よりも、琵琶湖と共にある生き方を取材を通じて考え、記事にしたいと記者は願っていた。」十倉氏が長い取材と報道経験から学ばれてきたこと、客観報道ではなく当事者として問題と向き合うことの大切さを強いメッセージとして伝えてくださいました。

3-4-8●2017/09/05 －GUSⅡ 講演－（高校 3 年生）

「持続可能な社会」を考えるために

GUS-Ⅱの二学期最初の授業となる今日、同志社大学神学部より小原克博先生にお越しいただきました。これまで学んできた「持続可能な社会」をテーマに、持続可能な社会とは、変わりそうにもないことをどうやって変えられるのか、倫理的な視点からも提言のヒントを一緒に考えてくださいました。

小原先生がドイツへ留学された時はまさにベルリンの壁が崩壊した時代、そして実際に先生も現地まで行かれて壁をハンマーで壊したそうです。人間の命を拒み続け「鉄のカーテン」とも呼ばれてきた壁は、思いがけずとても粗悪な素材でできた、叩くと簡単に崩れて落ちるもろい壁だったそうです。その時、変わらないと思っていたことが変わる、社会は変わるんだということを肌で感じられたそうです。

持続可能性ということを考えるとき、先生は中学生のころ熱中したアニメを思い出されます。「ナウシカ、北斗の拳、そして宇宙戦艦ヤマト、全て一度人間によってまたは宇宙からの力によって地球上の

文明が滅んでしまった後という設定です。「持続可能性」という言葉などまだない時、今の世界はひょっとしたら終わる？地球は滅んでしまうの？という不安を抱いたそうです。実際に文明は繁栄と滅亡を繰り返してきました。共通する要因として、資源を取りすぎた結果大きな基盤を支えられなくなったこと。私たちの今の社会はこのままで大丈夫なのか、危機感を持ち問題解決に取り組む必要があります。

宗教学的な観点からいうと、仏教にある四苦である生老病死は、人間は 1 つ 1 つのことに悩み苦しみその原因を直視して問題を解決していかねばと説いています。また信仰の始まりは、生きる糧である穀物を育てるための雨乞いからだと言われます。食と信仰のつながりは深く、飽食といわれる現代社会の矛盾を疑問に感じます。環境問題は、食やエネルギーを含めた全ての資源の消費を見直すことなのです。

20 世紀の科学を牽引したのが原子物理学です。原子力は生活を便利にしたエネルギーですが、人類が生み出したものは全て両義的、つまり良い方向にも悪い方向にも使えるのです。聖書にあるエデンの園では、エヴァが禁じられた果実を食べて罪を犯します。同じく、私たちも正しい選択の見極めを求められています。そして物が作られる「創造」と、どうやって役割を終える「終末」までを考えて欲しいとおっしゃいます。

ドイツでの 3. 1 を機に発足されたエネルギーの安全に関する倫理委員会の報告書と実際のエネルギー対策、そして教皇フランシスコが 2015 年に発表した最初に犠牲になる最も貧しい社会的弱者への関心を呼びかけた「ラウダート・シ」など、提言のヒントとなるものや良いモデルを持つことも大切だと教えてくださいました。発展のための少々の犠牲を黙認してきた歴史は変わらなければいけないのです。

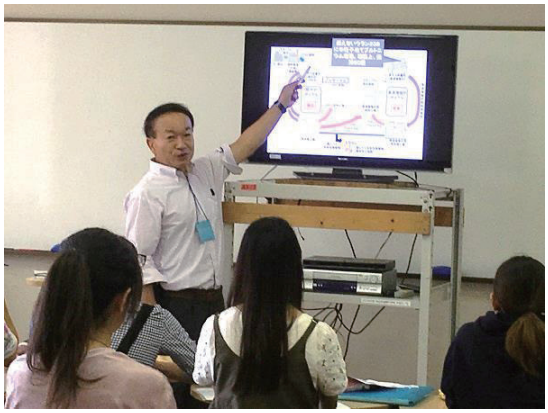
経済的、技術面からの視点からだけでなく、宗教学から倫理を学ぶ同志社国際の生徒らしいどこにもない発想、あっと驚く思い切った提言をして欲しいとおっしゃいました。また倫理的な観点から先生らしく、「幸福を最大化するのではなく、不幸を最小化するのです」というお言葉がとても印象的でした。

3-4-9●2017/10/03 －GUSⅡ 講演－（高校 3 年生）
持続可能社会の希求 ジャーナリストの立場から

本日の GUSⅡは、毎日新聞大阪本社社会部より編集委員の大島秀利氏にお越しいただき、ジャーナリストのお立場から持続可能社会をテーマに講演をしていただきました。 大島氏は、1990 年から 93 年まで福井県敦賀駐在の記者として原子力高速増殖炉もんじゅを取材され以来多くの原発に関する記事を伝えてこられました。当時、原子力はクリーンエネルギーとして、また資源の乏しい日本における夢の事業でした。ただ大島氏は取材を通して早くから原子力の抱える問題に気付かれ、原子力の夢の崩壊を実感されます。どのような意識で取材をされ記事にされてこられたのかお話しくださいました。

大島氏が敦賀で取材にあたられていた頃、世界では、建設中また稼働し始めた高速増殖炉でさえ、そのほとんどが断念や停止を余儀なくされ施設が次々に放棄されていきました。フランスでは 90 年に実験炉が稼働停止しその後 98 年に廃炉に、ドイツでは 91 年に稼働開始が間近だったにも関わらず施設の放棄を決定、イギリスでは 94 年には放棄が確実に、そしてもんじゅの兄貴分ともいわれたアメリカの高速増殖炉は 83 年に既に建設中止となっています。これらは全て建設と稼働のコストが予測を上回り膨大に膨らむこと、ナトリウムや使用済み放射性燃料の扱いなどコントロールの難しい核の暴走、事故が背景にあります。それでも日本では他国のこうした過酷事故や廃炉の決定を大きな問題とせず、92 年には「原子炉施設のリスクは十分低い」と原子力安全員会が甘い見通しを公表し、もんじゅの計画を進めています。大島氏は、海外の情報と日本の政府の見解の温度差に疑問を抱き、危険性を指摘している科学者や原発推進の科学者、様々な立場の人に取材、自分で確かめ事実を伝えようとされました。2000 年にはチェルノブイリ原発事故の取材に現地に赴かれ、その被害の本当の実態が日本に伝わっていないと感じたそうです。廃墟となった街や施設、広大な廃棄場には事故の処理に当たり被爆した戦車やヘリコプターなどの軍事車両 2000 両以上が放置され、その貴重な取材写真を見せていただきました。事故当時にゴルバチョフ大統領が「これは小さな核戦争」と言ったその言葉通り、まるで戦争の跡そのものの光景から、原子力のあまりにも大きすぎるリスクをその取材で感じられたのです。

そしてその後起きた福島の原発事故では、何の落ち度もない多くの人々が被爆、避難を強いられ、故郷に残っても去っても苦しみを味わうことになりました。チェルノブイリの光景と重なったそうです。そしてついに 2016 年、ようやく日本の高速増殖炉もんじゅは、建設費 1 兆 2000 億円、そして設備利用率わずか 0．02%という状況で廃炉が決定されるのです。アメリカで最初に 1940 年に増殖炉の開発が始まり、その計画が中止されてからなんと 20 年もの歳月が経ってからのことです。日本の政府や技術力の過信から、現実を直視せず、夢物語にしがみつくことになったのではないか。当時原発を推進した海外の国や機関は、再生エネルギーの開発へと方向転換し先を歩んでいます。マスコミの役割は、様々な情報を集め問題に対して予防的な報道をすること、事実を伝えること、そして生徒たちへのメッセージとして、命を大切にして将来のエネルギーのよい仕組みを作って欲しい、二度と避難民を出すようなことがない日本にして欲しいとおっしゃいました。



3-4-10●2017/10/10　－GUSⅡ　講演－（高校 3 年生）

提言に向けて　企画書の作成方法を学ぶ

今日は、具体的な提言に向けて企画書作成のアドバイスを頂くため、YWCA 総主事である山本知恵氏にお話を伺いました。実際に生徒たちが事前に作成した企画書に目を通していただき、具体的なアドバイスを頂けたことはとても有意義なことでした。

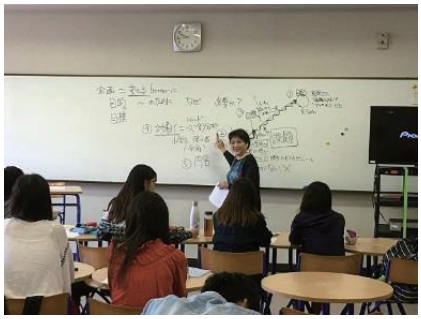
山本さんは学生時代から NGO の仕事に携わられてこられました。NGO とは社会の課題に対して仲間で取り組む器であり、問題解決のための Action を起こす場。社会のおかしいな、変わったらいいなということをボランティアの人たちと話し合い、できることを見つけ、コーディネートすることが日々のお仕事だそうです。小さなことでも目標に向かってできることがあればやってみる、実行していく上で、共感を得たり助成を得るための企画書の大切さを教えていただきました。

【企画を実行に移すために】

① まず目的をはっきりさせる
　何のために、なぜ必要か、最終的に目指す社会の Vision を描く
② 現状を理解する
　客観的な分析が必要、具体的に数値などで示す
③ 目標を立てる
　目的を達成するための一つ一つの確実な Step として目標の設定、どこまで達成できたか
④ 対象の分析
　世の中の好み、ニーズ、トレンド、行動パターン、経済状況など鑑み目的が合致する対象を絞る
⑤ 内容
　誰と、どこと一緒にするのかでも変わってくる
　今後どれだけの波及効果があるか、社会的意義があるかも重要

現状を憂えても課題は見えてこない。現状と掲げた目標のギャップが課題ですとおっしゃいます。課

題が見つかれば、行動に移していく時だと皆が感じたようでした。行動を起こす時に必要な助成金をもらうためのポイントも伺い、グループに分かれて話し合いながら企画書を完成させていきます。山本さんにはもう一度お越し頂き、生徒達の改善後の企画書のプレゼンテーションについてさらにアドバイスをいただく予定です。



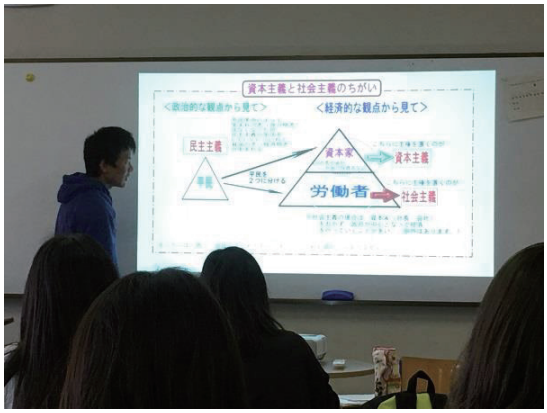
3-4-11●2017/11/17 ーGUSⅡ 講演ー(高校 3 年生)

生徒が講演者に

今回の GUSⅡクラスでは、各クラスより 2 名ずつの生徒が講演者となり、このクラスで学んできたこと、自分が経験してきたこと、また自分が考えていることなど様々な課題をベースに今伝えたいことについて講演をしました。演題は自由です。

本日の金曜クラスでは､父親の仕事で幼少期から多感な中学生までをアフリカの 3 国で過ごした生徒、そして両親が中国国籍を持ち､中国で生まれて日本と中国を行き来する生徒､この 2 名が講演者です。前者の講演タイトルは「私とアフリカ」です。アフリカというとアフリカ大陸として一色単に捉えられることが多く、そのイメージはサファリやマサイ族、貧困や内戦。「でもアフリカってそれだけじゃない」、1 つ 1 つの国にそれぞれ違った歴史やバックグラウンドがあり、文化や抱える問題も違うことを、滞在したジンバブエ、モザンビークそしてボツワナ 3 カ国を挙げて実際に自身の撮った美しい写真などを交えて詳しく伝えてくれました。最後に、アフリカの生活を振り返り、アフリカの人達の問題を全て解決することは自分にはとても不可能だけれども､恵まれた環境にいる自分に感謝し「日本」や「豊かさ」について考えるようになった今、将来は自分にできることで何か少しずつでも問題を解決できるようになりたいと話してくれました。今日がその一歩になったとも。後者の講演のタイトルは「社会主義とメディア」、副題は「学校では教えてくれない社会主義の実態」でした。社会主義ってどんなイメージだろう、実際はどうだろう、そしてこの資本主義であるが故の問題を抱える現社会において、社会主義、共産主義の思想は 100%否定されるものではないのではないかという問いかけを、自身の家族の体験などを交えて詳しく伝えてくれました。また北朝鮮とアメリカの行動を比較したスライドでは、自分の意志が反映されていることを説明し、皆が得ている情報は誰かに操作されたもので、このグローバル社会において常に多角的に物事を捉える必要性についても伝えてくれました。日頃感じることを工夫を凝らしながらもまっすぐに伝える姿勢が印象的でした。

2 人とも 2 人の経験やバックグラウンドから 2 人にしかできない講演となりました。そして 2 人とも、正しい情報はやはりそこを実際に訪れること、そして自分で感じることで得る大切さを教えてくれました。同じクラスメイトである講演者の話にクラス全員が聞き入っていました。



3-4-12●2017/11/21 －GUSⅡ 講演－（高校 3 年生）

生徒が講演者に

今回の GUSⅡクラスは、生徒が講演者となり、このクラスで学んできたこと、また自分が考えていることなど様々な課題をベースに今伝えたいことについて講演をしました。演題は自由です。今回は、火曜日クラスの生徒の講演です。

まず講演の前に、今週末に横浜で開催される SGH 全国高校生フォーラムに参加しポスター発表をする生徒達よりどのような発表をするかについての報告がありました。この GUS(Global Understanding Skills)クラスで学んできたこととして、伝えようとする気持ち、広げようとする心、また実際に活動してきたことを発表する場となります。改めて本番の様子は別の記事でご紹介します。

本日の講演者は、講演の始めに野球好きなお父様が付けてくれた名前の由来の話をしてくれました。そして球界の国際人イチローを例に、GUS で学び考えそして目指すべき国際人とは一体どういう人だろうかという自分の気付きを踏まえて、楽しいクイズを交えながら一緒に考えさせてくれました。「自分で実際に行って学ぶことが重要」というこれまでの講師の方々の言葉に影響を受け、高 3 の夏休みに単身 NY を訪れ 2 週間生活をした体験談を話してくれました。その大きな挑戦を通して改めて実感させられたこととして、日本人として日本のことを知っておく大切さ、自分の意見を持ちそれを伝える大切さ、そして自分さえ良ければとうことから無関心ではなく関心を持つことの大切さ、この 3 つがこれからのグローバル社会に必要な国際人の要素ではないかと伝えてくれました。

やはり同じ同年代のクラスメイトの講演者の話は、どの生徒にとってもとても興味深く、どのような考えを持っているのかを知り、挑戦を通して大きく成長したことに感心し、また学んできたことによ

って育まれた価値観に共感できることも多い講演となりました。

3-5-1●2017/12/13-15　ーGUS BASIC フィールドワークー（高校 1 年生）

バイオマスツアー真庭

GUS BASIC クラスより 15 名の生徒が、本校 3 回目となる岡山県真庭市での研修に参加しました。真庭市はその豊かな森林資源を生かし、バイオマス事業を軸に持続可能な社会構築を目指し成果を出しています。生徒達の参加したツアーでは、地域資源の有効活用によって化石燃料に代わる様々なエネルギーを実用化している現場を見学することができました。

【内容】

1 日目：真庭市役所本庁舎訪問

勝山町並み保存地区見学

「木の駅」木材ふれあい会館訪問

①真庭市におけるバイオマス産業都市構想の概要等

月田総合集積場見学

①真庭地域の人工材の状況

②森林組合によるバイオマス事業

③バイオマス発電所稼働による山所有者との連携と山の管理

真庭産業団地見学

①バイオマス原料の安定供給を目的とした集積施設の見学

②山主への還元システム

③地域資源を利用した 10000KW の木質バイオマス発電施設

④電力自由化による地域施設への電力供給

2 日目：真庭市勝山地区訪問

①バイオマス発電

②ペレット製造施設

③新木質構造用材料 CTL について
CLT モデル建築物見学
真庭産業団地見学（工場内）
①CLT 製造ラインの映像、工場内見学
真庭市久世地区訪問
①地域資源活用庁舎
②冷暖房チップボイラによる熱利用
③バイオマス発電の電力供給先
④新木材構造用材料 CLT 活用のバス待合所

2 日目の朝は夜に降った雪で外は美しい銀世界となりました。
今回の研修で木林資源を無駄なく活用する“真庭モデル”を多様な場面から学習することができました。

3-5-2●2018/01/16-17　ーGUS BASIC フィールドワークー（高校 1 年生）
東京フィールドワーク　大使館・国際機関訪問

GUS の学び「環境先進国に学ぶ」の事前学習の一環として、GUS BASIC クラスより 15 名の生徒たちが、ドイツ大使館や国際機関での研修のため東京フィールドワークに参加してきました。各先で私たちの学習意図を説明し、それぞれの環境問題に関する概説を伺うことができました。また今年も本校の卒業生である JAXA(宇宙航空研究開発機構)に勤務する関川知里氏、復興庁の依頼で尽力されている伊地知亮氏からもレクチャーを受けることができ、大変有意義な時間となりました。

【内容】
17 日（火）東京へ移動
外務省外交資料館見学
外務省公式訪問
夕食後、JAXA、復興庁にて勤務する卒業生と交流
「グローバル・リーダーの条件、進路決定など」
ホテル滞在
18 日（水）ドイツ大使館公式訪問
JICA 訪問
京都へ

生徒たちの訪問の様子が紹介されています。
ドイツ大使館広報官のブログ
http://young-germany.jp/2018/01/17

3-5-3-1●2018/03/21-31 ーGUS Ⅰ 海外フィールドワークー（高校 2 年生）

ヨーロッパ研修 環境先進国 ドイツ連邦共和国・デンマーク王国

3 月 21 日から 31 日まで、SGH のプログラムとして実施している GUS Ⅰ の授業の一環として、ドイツ・デンマークを訪問し、現地での環境問題に対する取り組みや政策について広く現地研修を行いました。

ドイツではフライアムト村、ブライトナウ村で「村のエネルギー自立」について学ぶところからスタート。特にブライトナウ村では旭日単光章を受賞された前田成子さんのご案内で村長さんとも交流させていただき、温かく、活気ある村の様子に大いに感銘を受けました。その後、環境首都といわれるフライブルク市内で、授業でリサーチしてきた体系的な環境政策が街に根付いている様子を体感しました。フライブルクでの研修を終えた後、ドイツ第2の都市であるハンブルクに移動。総領事館を公式訪問し、大都市ならではの新しい取り組みやドイツ人の環境意識について、領事と懇談を行いました。

デンマークではまずロラン島を訪問し、『ロラン島のエコ・チャレンジ』著者、ニールセン北村朋子氏のご案内で、「お荷物自治体」とされていたロラン島を、現在はエネルギー自給率700％の島として有名にしたレオクリステンセン議員のお話を伺いました。高い理念を掲げ、無給で仕事をされるレオさんの姿勢そして尽きることのないアイデアから、大いに刺激を受けました。続いてフュン島では MHI Vestas 社（三菱重工とデンマークヴェスタス社の合弁企業）を訪問し、世界最大出力の風力発電機製造工場をご案内頂き、副社長の山田正人氏に、実際に仕事をされていて感じておられるクリーンエネルギーを取り巻く世界の現状についての講義をして頂きました。ここでも学校では決して見ることのできない工場での作業の様子や、聞くことのできない刺激的な講演に生徒たちは目を輝かせていました。

毎日が新しい発見と学びに満ちた盛りだくさんの 10 日間、最終日、オシャレなコペンハーゲンのレストランでそれぞれが好きなメニューを選び、最後の夕食を楽しみながら、ある生徒がふと発した言葉、「この 10 日間で人生が変わった」。どこに行っても自分たちらしい素直な視点と好奇心で質問をする本校の生徒たちに、現地で出会ったすべての人が惜しみなく、多くの知恵と知識を与えてくれました。これからも様々なことを学んでいきたいと思います。

フライアムト村

フライブルクリサイクルセンター

フライブルク遊歩道

フライブルク ホテルヴィクトリア

ロラン島 Climate Center

フュン島 三菱 Vestas 社

コペンハーゲン ゴミ処理場

コペンハーゲン風力発電

3-5-3-2●2018/03/22-03/31 －GUS Ⅰ フィールドワーク－（高校 2 年生）

ヨーロッパ フィールドワーク ドイツ連邦共和国･デンマーク

【 2017 年度 ヨーロッパ研修の概要および旅程表 】

◆授業においては、環境問題に対する様々な政策について、ドイツの取り組みを中心に学んできた。
今回、ドイツでは、都市や村の規模ごとにどのような政策がとられているか、住民による試みが行われているかについて、研修した。
そのため、ドイツに、おいては都市のサイズ（人口）について、下に示す３つの段階に分けて研修を行った。

□ 人口数千人のフライアムト村とブライトナウ村での研修
このような村の共通点としては、産業が乏しく、畜産や林業が衰退しつつある。その打開策として、また同時に環境問題の解決、雇用促進などを目的とし、エネルギーの自給率を高める試みを行っている。

□ 人口約２３万人のフライブルク市での研修
本校が位置する京田辺市近郊、寝屋川市、宇治市などに近い人口を有する都市である。
フライブルク市は優れた環境政策を実施しており、住民の意識の高さがそういった政策を支えている。その結果として、「住みたい」と思われる代表的な都市であり、住宅の価値も上昇していることから、政策の効果がうかがえる。授業で学んできた廃棄物、交通政策を中心に、街の雰囲気を肌で感じることで、日本での制度設計のイメージ作りや、日本の同レベルのサイズの都市との比較も行った。

□ 人口約１８０万人のハンブルク市での研修
自由ハンザ都市であるハンブルク市は、行政上、ベルリン特別市と同様に、一市単独で連邦州を構成する特別市である。エルベ川の支流・アルスター川の河口にある港湾都市で、ドイツ北

部における経済の中心地である。ここでは、大都市ならではの試み、環境政策と燃料電池車の公共交通への導入事例等、優れた技術を利用した取り組みについて、研修を行った。

◆また、デンマークについては、国連幸福度ランキング上位の国(2017 年は 2 位)であり、環境政策についても自然を尊重し自然の豊かさを大切にしているため、その手法を学ぶために訪れた。

（1）３月２２日（木）

研修先：フライアムト村（ドイツ：バーデン＝ヴュルテンベルク州）

案　内：イノベーションアカデミー　元 Bundesverband WindenEnergie e.V.　Mr.Erhard Schulz

講　師：MIT Energy Vision GbR　池田憲昭氏

内　容：①フライアムト村の市民エネルギー事業

フライブルクの北東２０ｋｍ、シュバルツバルトの中南西部にある人口約４３００人の村である。村の面積は５２ｋｍ^2 と広く、半分は森林、半分は牧草地である。

伝統的には、酪農、林業と観光を産業としていた。

近年、下記の再生可能エネルギーによる発電で、村の家庭と産業で必要とする電力の２倍ほどを得ている。

下記について、イノベーションアカデミーの案内で実際の農家（ラインボルト家、シュナイダー家）を訪れて、研修した。

・バイオガス発電発熱農家

・太陽光発電、残材木質チップ発熱の農家

・市民風力発電

②酸性雨の被害が著しいために有名になったシュバルツバルトの見学を行った。

（2）３月２３日（金）

研修先：フライブルク市（ドイツ：バーデン＝ヴュルテンベルク州）

案内および講師：前田成子氏

内　容：・ドイツでは、１９９１年に ドイツ包装廃棄物規制令が公布され、包装物について画期的な回収システムが完成し、リサイクルが飛躍的に促進された。（ＤＳＤ）

スーパーマーケットで扱われている商品とその包装廃棄物の分別・回収システム、リサイクルセンターの状況など、廃棄物の流れを追うことでリサイクルの現況を学習した。

・プラスエネルギー住宅

建物の気密・断熱性能を高めるとともに、冬には南に大きく開いた窓によって太陽光を効率よく住宅内に採り入れて、また夏には長いひさしが強い日差しによる温度上昇を防ぐなど、扉を閉めていても換気が可能な工夫がなされているなどしている。

このエネルギー消費を抑えた住宅の屋根全体は太陽光パネルで覆われており、その発電量は消費電力量を上回っていることから「プラスエネルギー住宅」とよばれている。

研修先：ブライトナウ村（ドイツ：バーデン＝ヴュルテンベルク州）

案　内：Josef Haberstroh 村長、Eugen F. Ketterer エネルギー組合長

講　師：前田成子氏

内　容：フライアムト村のバイオエネルギー事業

フライブルクの東２０ｋｍにある人口約１８００人ほどの村である。夏は保養地として観光客が訪れる村である。

２０１１年にエネルギーを村内の建物に供給する「ブライトナウエネルギー組合」を設立した。

風力発電施設、バイオガス施設、水力発電施設、太陽光発電設備、コジェネレーション設備を共同出資で運営している。システムは集中管理されており、小さな村でありながら、整ったシステムを有していた。

（3）３月２４日（土）

研修先：フライブルク市

案　内：前田成子氏

内　容：ゾーニングや都市計画、交通システムについて

ゾーニング、都市計画、それに伴うパーク＆ライドやトラム等公共交通のシステムについて、実際に交通機関を使用したが、非常に効率よい移動が可能であり、タクシーなどを使用する必要性を感じなかった。

研修先：フライブルク市

案　内：Johannes Spaeth 社長

内　容：ホテルヴィクトリア

ホテル内に発電設備等を備え、すべてのエネルギーを再生可能エネルギーでまかなうだけでなく、水、家具、食材など、細部まで徹底的に環境にこだわった歴史あるエコホテルであった。

研修先：フライブルク市

内　容：・小水力発電

ドライザム付近にある個人運営の発電所

一般の水力発電は自然を削り取ってダムを造るが、小水力発電はそのようなこともなく費用もそれほどかからない。急な流れがなくても可能であり、景観も大きくは損ねないため、日本でも可能性が大きと考えられる。

・ヴォーバン住宅地

世界から大きな注目を集めている住宅地であり、「拡大住民参加」「学びながら進化する都市計画」「マイカーを極端に減らし、自転車と徒歩交通を推進するカーフリー構想」などの施策に加えて、「省エネ住宅（パッシブ・ソーラー住宅）」「コージェネと地域暖房によるエネルギーコンセプト」「公園と道路、家庭を結ぶ緑のコンセプ

ト」など、各分野において持続可能な社会を構築するための新しい取り組みが住民主導で行われていた。実際に歩くと、コンパクトにさまざまな機能がまとめられており、この中で生活が完結できるようであった。

（4）３月２６日（月）

研修先：ハンブルク市（ドイツ：特別市）

講　師：在ハンブルク日本国総領事館領事　丸山史恵氏

内　容：領事館において、管轄地域であるハンブルク州、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の概況について、またその環境政策について講義を聴き、対話を行うことで、日本の大都市での制度設計について考える機会となった。再生可能エネルギーを重視し、地域暖房などのエネルギー源を分散させることを主なエネルギーコンセプトとし、エネルギー面での政策が重要視されているとのことであった。燃料電池など、先端的な技術も実験されていた。

研修先：ハンブルク市（ドイツ：特別市）

講　師：在ハンブルク日本国総領事館領事　丸山史恵氏

内　容：都市の全体像の把握

海から１００ｋｍほど内陸でありながら港湾都市であるハンブルグの全体像を水上バスにより把握した。

川沿いにも、風力発電施設があり、エネルギー面での政策が進んでいた。

また、使用しなくなった倉庫エリアを、ハーフェンシティ再開発エリアとして、再開発し、都市の再生を行っていた。

リフィルでのみ商品を提供しているスーパーマーケットの見学も行った。消費者は、ジップロックやタッパーを持ち込み、商品の重さを量って購入していた。そこでは、問題となっている包装ゴミは皆無であった。

市内では、３００ｍ以内に公共交通の駅や停留所が整備され、移動は便利であった。

（5）３月２７日（火）

研修先：ロラン島（デンマーク）

案内および講師：ニールセン北村朋子氏、レオ・クリステンセン氏（市会議員）

内　容：自然エネルギー100%、エネルギー自給率 600%の島である。余った電力は国内外に輸出している。なかでも風力発電が盛んであり、隣のファルスタ島とあわせて 500 基以上の風車が設置されており、その半数は市民の所有物である。風力発電以外にも、バイオマス発電やゴミを利用した発電、熱電併給などさまざまな先進的な取り組みが行われていた。

ミスター・エネルギーといわれるレオ・クリステンセン議員からこうした取り組みについてうかがった。また、ヴィジュアル気候センターで、ロラン市の学校で授業にも使われている科学の地球儀 Science On a Sphere”を見学して、世界の気候変動や現状について

学んだ。福島の原子力発電所からの放射性物質の拡散もヴィジュアル化され地球規模の問題であることをデンマークの人たちが学んでいることをデンマークで知り、感心した。

（6）３月２８日（水）

研修先：フュン島（デンマーク）

案内および講師：MHI VESTAS 社　副社長 山田正人氏、羽山考一氏、石光桂太氏

内　容：MHI Vestas Offshore Wind A/S（MHI ヴェスタス）社は、三菱重工業とデンマークのヴェスタス社（Vestas Wind Systems A/S）が折半出資する洋上風力発電設備合弁会社である。Lindoe にある世界最大出力の風力発電機(ナセル)の組立工場において、副社長の山田氏から、再生可能エネルギーの世界的な状況について説明を受けた。また、海外で働くことの意義をお話しいただいた。

工場では、製造の状況を見学し、日本とデンマークのそれぞれの特質を活かした方法で会社の運営がなされていることを学んだ。

その後、日本人社員の方たちや現地従業員の方たちと懇談を行い、日本での洋上風力発電拡大の可能性、幸せとは何かということなどについて、話し合った。

（7）３月２９日（木）

研修先：コペンハーゲン市（デンマーク）

内　容：地下鉄や自転車を使用した市民の移動状況を重点的に見学した。

特にデンマークは人口当たりの自転車保有率世界第三位の自転車大国である。コペンハーゲンの住民が自転車を利用する理由は、「環境に良いから」は 1%と意外と低く、「簡単、容易で速い」54%、「健康に良い」19%、「便利」7%、「安い」6%と、自転車利用が合理的であることが特徴である。その通り、自転車の使用環境が整っていた。自転車専用道路がしっかりとしており、電車内にも専用駐輪スペースが大きく確保されていた。街にはさまざまな場所に、液晶モニターを備えた貸し自転車があり、ログインすることですぐに使用できる環境が整っていた。

サイクルスランゲン、スマート信号など、ソフト面、ハード面の環境が整備されていた。また消費電力の５０％以上を設置した太陽光発電パネルで供給し、持続可能教育を行うコペンハーゲンインターナショナルスクールもあった。

一般的には、ゴミ処理工場は住民から遠ざけられる場合が多いが、屋根の傾斜を利用してスキー場にするなど、街の価値を上昇させるなどの工夫により、逆転の効果をもたらしていた。

消費税が、２５％、自動車の新車の税金が２００％などと、物価の高さが話題に上りがちではあるが、教育費、医療費、年金などのように、国民に還元されて安心して生きてゆくことが可能であるために、人々は豊かな気持ちなれるようであった。したがって、街は非常に落ち着いていた。

3-5-3-3●2018/03/21-03/31 －GUS Ⅰ フィールドワーク－

ヨーロッパ研修 旅程 研修内容計画表

２０１８年3月 ＳＧＨ ヨーロッパ研修

日	曜	都市 および 研修	具体的な内容
21	水	関西国際空港 アムステルダム フランクフルト フライブルク	9:00集合（４階 ＪＴＢカウンター前） 11:00 ↓ KL 868 14:50 16:05 ↓ KL 1771 17:15 専用車でホテルへ
フライブルク 泊			
22	木	フライアムト村 市民エネルギー事業 MIT 池田憲昭氏	・バイオガス発電発熱の農家 ・太陽光発電、残材木質チップ発熱の農家 ・市民風力発電
フライブルク 泊			
23	金	廃棄物処理 前田成子氏 フライブルク ブライトナウ村 前田成子氏	・ゴミ収集センター見学 ・街でのリサイクル状況の見学 ・シュバルツバルト ・再生可能エネルギー(さまざまな発電) ・地域暖房
フライブルク 泊			
24	土	市内交通システム 前田成子氏 フライブルク その他のトピック 前田成子氏	・パーク＆ライドシステム ・旧市街地ゾーニング ・トラム ・ホテルヴィクトリア ・ヴォーバン住宅地 ・ヘリオトロープ ・小型水力発電 ・S.C.Freiburg スタジアム
フライブルク 泊			
25	日	フライブルク ハンブルク	9:49 ↓ ICE 76 15:35 専用車でホテルへ
ハンブルク 泊			
26	月	ハンブルク ドイツの大都市の取り組み	・在ハンブルク日本国総領事館 ・ハーフェンシティ再開発エリア ・ハールブルクエリアの自然を生かした堤防
ハンブルク 泊			
27	火	ハンブルク Rødby Færge ロラン島 ロラン市の取り組み **ニールセン北村朋子氏**	9:28 ↓ EC 33 12:13 ・ヴィジュアル気候センター (Science On a Sphere) ・レオ・クリステンセン議員による解説
ロラン島(マリボー) 泊			
28	水	マリボー Lindoe フュン島(Lindoe) 風力発電機工場 MHI VESTAS社（三菱ヴェスタス社）様	専用車で移動 ・世界最大出力の風力発電機組立て工場
コペンハーゲン 泊			
29	木	コペンハーゲン デンマークの大都市の取り組み	・交通事情 地下鉄、自転車 （サイクルスラングン、スマート信号、スーパーハイウェイ） ・コペンハーゲンインターナショナルスクール
コペンハーゲン 泊			
30	金	コペンハーゲン アムステルダム	専用車で空港へ 11:50 ↓ KL 1128 73H 13:15 14:40 ↓ KL 867 772 8:45
機中 泊			
31	土	関西国際空港	

3-5-3-4●2018/03/21-31　－GUS Ⅰ海外フィールドワーク－（高校 2 年生）
ヨーロッパ研修旅行　－生徒たちの報告－

フライアムト村
Freiamt

2018 年 3 月 22 日、滞在していたフライブルク市から３０ｋｍほどの山間部にあるフライアムト村を訪れました。フライアムトでは、事前学習でも著書を読んだ M.I.T(ミッド・エナジー・ビジョン)池田憲昭さんの案内で２つの家族を訪問しました。フライアムト村の電力自給率は 300%と高く、村内にはバイオガス発電所が２ヶ所、ソーラーパネルを取り付けている家が 150 軒もあります。

村を案内してくださった元 BUND のシュルツさん　→
Mr. Erhard Schulz, who was in BUND, conducted in Freiamt

On March 24, 2018, we visited Freiamt which is located in a mountain region about 30 kilometers away from Freiburg, where we were staying. In Freiamt, Mr. Ikeda, who works for M.I.T(Mid Energy Vision) and is the author of the book of our pre-learning, gave us a tour to two households. Freiburg's self-sufficiency ratio in the primary energy supply is 300%, which is very high. The city has two biogas power generators and about 150 of its households have solar panels.

ラインボルト家 / Reinbolts

ラインボルト家は 300 年以上の歴史を持つドイツの典型的な農家です。80 ヘクタールもの土地を所有し、昔は肉牛や豚を育てていましたが、狂牛病の騒ぎで経営難になりました。そこで始めたのがバイオガス発電でした。

・バイオガス発電
もとは豚舎として使われていた建物をバイオガス発電の建物として使っています。ここでは、草や飼料用トウモロコシと家畜の糞尿を発酵させて発電しています。毎日 10 トンもの家畜の糞尿が近隣の酪農家から運び込まれ、発酵後の残りかすは肥料として利用されます。

・熱供給
2001 年からバイオガス発電の冷却の過程で出た廃熱を利用して、周辺の施設（小学校や観光施設）への熱供給も行っています。廃熱からお湯を作り、地下に通っているパイプを通して熱を供給しています。熱供給を受けている施設、家庭にはボイラーがありません。また、余った熱は温水プールに利用されています。

Reinbolts is a typical farmer with over 300 years of history. They own 80 hectare of land and they have raised beef cattle and hogs, but the business went rough when the mad cow disease hit the area. Then, they started biogas power generation instead.

・Biogas power generation
They use a building, which was a pigpen, for biogas power generation. They generate power by using fermented animal feed and livestock excreta. 10 tons of livestock excreta are gathered

from neighboring farms every day, and the remains of the fermentation process are used as manure.

・Heat supply

From 2001, they started to supply neighbors with heat which is produced during the cooling process of the fermentation and they use it to make hot water. They provide heat by sending the hot water underground through pipes. The households which are provided with heat do not have boilers. Moreover, the remaining heat of each household is used for heated pools.

シュナイダー家 / Schneiders

シュナイダーさんはかつて乳牛を育てていましたが、経営難に陥りました。そこで、今は再生可能エネルギーに投資しています。

・風力発電

自身が持っている土地の一部を風車を建てるために貸しています。また、個人の家庭用風力発電機も持っています。

・太陽光発電

自宅の三つの屋根にソーラーパネルを設置しています。合計で 40 万ユーロの投資をしましたが、シュナイダーさんは良い投資をしたとおっしゃっていました。

・木質チップを使った暖房

2003 年から木質チップを使って暖房を始めました。ちなみに、シュナイダーさんはペレットではなく、チップを利用しています。ペレットは工業製品であり、保管場所を取らないというメリットはありますが、輸送コストがかかり輸送の際二酸化炭素を排出してしまいます。この点を考慮すると、森が近くにあり土地に余裕がある場所（フライアムト村など）にはチップがより適しているといえます。3〜4 年で元を取ることができ、石油を使うよりも年間 3000 ユーロの節約になります。

← シュナイダー家の屋根に取り付けられたソーラーパネル
Solar panels on Schneiders roofs

Schneiders used to raise dairy cattles, but their business went rough, too. So, they now invest in renewable energy.

・Wind power

They use some of their land to build windmills. Also, they have a home wind turbine.

・Solar power

Schneiders installed solar panels on three of their house's roofs. They say it was a good investment, even though it costed forty-thousand euros.

・Biomass power

In 2003, Schneiders started biomass power generation. Incidentally, they use chips and not wood pellets. Pellets are industrial goods and have an advantage of not having much space to keep, but they also have a disadvantage of transportation cost and the exhaustion of CO2. Considering this point, we can say that using chips is a better way for place with a lot of room and near

mountains, like Freiamt. They could make a profit three to four years, and it saves them about 3000 euros per year compared with when they used fossil fuel instead.

風力発電 / Wind power

風力発電機は、多くの市民が投資し、共同所有しています。また私たちが見学した風車では、各自治体が事業税の負担を軽くするために、村の境界線に建てるという工夫もされていました。

Many citizens invest in wind power and they co-own wind turbines. The windmill we saw was built on the border of two towns so that each towns' business tax burden will be lighter.

感想 / Impression

フライアムト村では再生可能エネルギーへの投資や、風車の共同所有などを村民が積極的に行っていました。ブライトナウ村の取り組みは組合と行政が協力していましたが、フライアムト村では村民が個人の事業として取り組んでいると感じました。私はドイツが環境先進国であると言うことは知っていましたが、ここまで環境について考えている一般市民がいるとは思っていませんでした。また発電の廃熱だけでなく、発酵後の草まで利用するなど、最後まで資源を無駄にせずに利用しようとする考え方はすばらしいと思います。

In Freiamt, citizens willingly invest in renewable energy and own windmills as a community. They work on environmental issues as individuals, while in Breitnau, the government and some associations cooperate to work on it. Before visiting Germany, I did not think that there are so many citizens who care about the environment, even I knew that Germany is called an environmentally advanced nation. Also, I was impressed by the fact that people use resources as much as they can. It is impressive that they use the remaining heat and the remains of the fermentation.

ブライトナウ村
Breitnau

2018 年 3 月 23 日、私たちは前田成子氏の引率のもと、ドイツ南西部のバーデン＝ビュルテンベルク地域で一番広い村、ブライトナウ村を訪れました。まだまだ肌寒く雪も多く残っていました。

最初に村長のヨセフ・ハーバーストロウさん、組合長のエウゲン・F・ケットラーさんと素敵なレストランでランチをご一緒させていただき、ゆっくりお話することができました。お二人ともに、日本では馴染みのない狩猟の話をはじめとした、村のことをたくさん教えてくださったのはもちろんのこと、日本や私たちの学校のことにも興味を抱いてくださり、話も弾み本当に貴重な時間となりました。

On March 23rd 2018, We have visited to Breitnau where the largest village in Baden-Württemberg region with warm guiding of Ms Shigeko Maeda. It was still quite cold there and had some snow

remaining on the ground.

At first, We had lunch with the village mayor Mr Josef Haberstroh and the union president Mr Eugen F Ketterer at a lovely reustaurant. Both of them told us a lot of things about Breitnau, such as about hunting that is not common in Japan. Also we could talk a lot about Japan and our school as well. Over all, it was really precious and joyful moment.

自然豊かなこの村の住民の主な職業のひとつとして農家が挙げられ、現在は 74 軒の農家があり、そのうち半分が専業、もう半分が兼業だそうです。多くの農家の方々は夏にグリーンツーリズムを行っており、観光客に住宅の一部を宿泊施設として提供し、一緒にハイキングやクロスカントリーを楽しむそうです。

One of the main occupations for the villagers is farmer. There are 74 farmers today and a 50% of them are full-time farmers and the rest is part-time. Also many of them are organizing the green tourism; rent some rooms of their house as accommodations and enjoy activities such as hiking and cross-country with tourists.

← ソーラーパネルがびっしりと設置された民家
Left: A house with a full-covered roof of solar panels

バイオエネルギー施設 / The bio energy facility

ブライトナウ村はバイオエネルギーの村として有名です。バイオエネルギーの村として認定されるには

①電力消費を 100%再生可能エネルギーでまかなっていること
②50%の熱消費を再生可能エネルギーでまかなっていること
③住民参加率が高いこと　　が、条件です。

村では水力発電、風力発電、バイオガス発電により 300%もの電力自給を成功しており、今回は実際にバイオエネルギー施設を見学させていただきました。

村のバイオエネルギー施設 →
bio energy facility

The Breitnau village is known as a bio energy village. There are 3 criteria.

①100% of the power consumption is covered by renewable energy.
②50% or more of the heat is covered by renewable energy.
③A higher participation by the residents.

This village is archiving 300% of self power supply by generation of water power, wind power and

biogas power and we had an opportunity to visit the bio energy facility.
このバイオエネルギー施設ではバイオガス発電、バイオマス発電に加え、発電時に排熱を利用したコージェネレーションシステムも行われており、村の 180 世帯もの家庭に地下配管で温水と暖房を供給しています。
In this facility, not only a biogas power generation and a biomass power generation, but also cogeneration systems which uses exhaust heat created by the power generation is being conducted. They are supplying heated water and air heating through the underground piping over to 180 households in the village.

↑ 左：バイオガス発電機　中央：バイオマス発電機　右：燃焼用の木質チップ
Left: A biogas power generator　Middle: A biomass power generator　Right: Wooden chips for combustion

これらの設備は全て個人の共同出資によるもので、行政による金銭的出資は一切受けていないそうです。また、管理室では配管が繋がっている各家庭の電力の使用状況がコンピューターで制御されており、どの家で今どれくらいの電力が使われているのかが一目瞭然でした。

Also, these equipment are all funded by private investors and they are receiving no funding from the government.
In the control room, you can monitor the usage of the heater at each household where the piping runs and it was obvious how much power is being used at each household at that moment.
さらに、裏にはバックアップとして 5 万リットルの温湯が貯蔵されており、緊急時の 10〜11 時間の供給に対応できるようになっていました。
In addition, there are 50,000 liters of heated water is stored as an emergency backup, which can last for 10-11 hours.

聖ヨハネス教会 / St. Johannes Church

施設見学の後、村のカトリック教会である聖ヨハネス教会を訪れました。白を基調とした清潔な雰囲気の教会で、特に天井の絵が非常に綿密かつ幻想的で美しかったことを覚えています。ここでは村長さんがオルガンを弾いてくださりました。ドイツ語の賛美歌を一緒に歌う生徒もおり、とても心温まる時間となりました。

After visiting the bio energy facility, we visited St. Johannes Church, one of the Catholic churches in Breitnau. It was a white-based church and was really clean. Also I remember that the decorative ceiling painting was incredibly detailed and romantic. The village mayor played the organ for us and one of the students sang some hymns in German there. It was precious that we could have a heart-warming moment at the end.

村長さんのお話 / A converse with Mr Haberstroh

施設を案内していただいた際、村長さんに理想の村作りについて直接お話を伺うことができました。印象に残っているお話としてショートウェイの町という概念があります。ショートウェイの町とは"車を使わなくても子供もお年寄りも自らの足で全て行える街"のことで、若い家庭を誘致しつつ、高齢者層を追い出してしまわない理想の村のためには必要不可欠な要素なのだそうです。具体的には、幼稚園や介護施設の充実を進めていきたいとおっしゃっていました。とはいえ、既に、ブライトナウ村は小さな村でありながら平均年齢は 40 歳と非常に生き生きとしており、過疎とは程遠い印象を受けました。それはきっと"都市化するためではなく村を維持するための発展を"という村長さんを含め村民たちの、村を愛する気持ち、より良くしようとする意識から生まれた賜物なのだと私達一同感じました。

When we visited the facility, we had a chance to hear some opinions for making an ideal village from the village mayor Mr Haberstroh. One of the impressed stories he told was about the concept of “A short way town”. A short way town means the town that anyone including children and elderlies can do whatever they want without using any cars, and it’s an important prerequisite to invite young families and keep elderlies stay in the village. For more details, he mentioned that he hopes to enhance more kindergartens and nursing facilities.

By the way, even though the Breitnau village was just a small village, it was a quite vibrant place with a fact that the residents’ average age is about 40 years old. It was truly hard to connect the word “underdeveloped” or “underpopulation” to the Breitnau village. I think that’s because the spirit of love for the village and motivation of making the village greater that exists in the residents’ heart.

At the end, let me conclude the great saying of the village mayor.

“Let development proceed not for urbanization but for keeping the village.”

フライブルク
Freiburg

交通 / Transportation

一枚目の写真は中央駅の写真で、ＤＢという国鉄の駅や、トラム、バスの停留所があり、とても機能的でした。また、フライブルク内での移動で、わたしたちはトラムを利用しました。トラムとは路面電車のことで、現地の人から旅行客まで多くの人が利用していました。トラムの中は静かで清潔感があり、犬も乗っていましたが乗り慣れているようでとてもおとなしくしていました。しかし、突然行き先が変更することもあり、日本の電車の正確さを実感しました。

このトラムに乗車するために、レギオカルテという定期券を利用しました。わたし達は、ホテルでこのような定期券をもらいました。この定期券を使うことによって何回でも乗ることが出来るので、一日の内に多くの目的地を回ることが出来ました。

The first picture is a picture of the Central Station. In it, there is a train station called DB and a bus stop. It is very functional. As we moved in Freiburg, we used a tram. A lot of people use trams, from citizens to tourists. The inside of the tram is quiet and clean and you can take your dog on it. However, in some cases, the tram suddenly changes destination, we discovered the accuracy of Japanese trains.

In order to get on a tram, we bought a commuter pass, Regio Karte.

We could ride on the tram many times, because we had this pass. So we could go to many places in a day.

市の中心部には自動車を規制してトラムを整備し、パークアンドライドに力を入れていました。市民の 95%は停留所から五分以内に住んでいます。またフライブルクでは自転車の普及率が増え、町のそこら中に自転車が並んでいました。スーツを着たサラリーマンも実際に自転車に乗っていて、本当に自転車は市民の生活に根付いていることを実感しました。

Government controlled the number of cars that can enter the city from countryside and so they made the tram(LRT). They wanted to enforce “Park and Ride”. 95% of the citizens can get to the bus stop in five minutes. Also, the number of bicycles increased, so there were a lot of bicycles in Freiburg. A businessman wearing a suit was also riding a bicycle and I thought that the bicycle has really taken root in the citizens’ lifestyles. （3 月 24 日）

ヴォーバン住宅 / Vauban Area

ヴォーバン地区の住宅は、ソーラーパネルから風通しを良くするための窓のブラインドまで、環境に

配慮した仕組みを数多く見つけることができました。また、トラムも地区内を走っていて、中央駅から直接行くことが出来ます。現代の社会の仕組みにも寄り添っている印象を受けました。そしてトラックを住宅にしていたり、壊れているように見えるものをたくさん置いている場所もありました。ヴォーバン住宅地は、それぞれの形で環境に配慮した設計や生活を表現していました。(3 月 24 日)

Houses in the Vauban area had a lot of environmental systems. For example, there were solar panels and window blinds that made the ventilation better. Trams were convenient in the Vauban area and you can go directly from the Central Station. I got the impression that it fits the structure of the modern society. Also, trucks were used as houses and many broken things seem to be put there. Vauban houses made various lifestyles possible.

小水力発電 / Small hydraulic power

この小水力発電設備はミシェルワーグナーさんという人が個人で作りました。想像していたよりも底が浅く、流れも緩やかな川で行っていました。トラムを利用することで、短時間で向かうことが出来ました。近くには公園もあり、小さな子供たちが遊んでいました。幼いころからこのような環境下で遊ぶことは、学校で先生に教わるよりも分かりやすいと思います。この経験が、後の市民の意識に繋がるのだと思いました。(3 月 24 日)

Small hydraulic power was made by Mr.Michael Wagner. The river was shallow and gentle, which I had not expected. By using a tram, we were able to arrive in a short time. There were parks in the neighborhood, and the children were playing. I thought that playing in such an environment from an early age is easier to realize the importance of protecting the environment than teaching it in the classroom. This experience leads to build the citizen's consciousness afterwards.

スタジアム / Stadium

SC フライブルクのスタジアム、シュヴァルツヴァルド・シュタディオンを訪れました。屋根にはソーラーパネルがあり、発電量を表示するパネルが設置されていました。(3 月 24 日)

We went to Schwarzwald Stadion in Freiburg. There were solar panels on the roof, which displayed the amount of generated electricity.

感想 / Impression

実際現地を訪れてみて思ったことは、環境対策をするにしても再生可能エネルギーを作るにしても、我慢して行っているのではなく、楽しんで実行しているということです。このような仕組みが持続可能なシステムを作っているのだと思います。

When I visited there I got the impression that people were trying to enjoy the various environmental policies, rather than trying to endure the lifeless convenient. I believe these systems can make a sustainable system.

フライブルクの廃棄物政策
Waste policy and system in Freiburg

1. 家庭ゴミ / Household garbage

家の外に色分けされたゴミ箱が置かれています。ゴミ箱の色分けによってゴミを分別しています。ゴミ箱の大きさに応じて料金が決められているので家庭によってゴミ箱の大きさがそれぞれ違っていました。ドイツで見たゴミ箱は日本のゴミ箱よりはるかに大きさが大きかったです。高さが 1 メートルぐらいでした。

ドイツのスーパーには、必ずデポジットの機械が設けられています。空になったペットボトルやビンを自らスーパーに持参し、この機械に入れると容器代の一部が返金されます。ドイツに行って驚いたことは、このペットボトルのデポジット制度があるため、スーパーに並んでいるペットボトルの一部は傷だらけだったということです。日本でデポジット制度を実施するためには、学校や駅など公共の場所からデポジットの機械を取り入れ、デポジット制を身近にすることが大切だと思います。その他にも日本で実施しようと考えるならば、衛生面や金銭面でも工夫をする必要があると思います。具体的には、ペットボトルが傷だらけにならないような工夫や飲み口の部分だけを交換するなどの工夫です。金銭面では、あらかじめ飲み物の値段にペットボトルの利用代金を上乗せし、デポジット制度を利用しないと損するような制度を作れば日本でも実施できるようになるのではないかと思います。

In Germany garbage boxes are colour-coded to classify garbage for recycling easily and correctly. German residents have to pay more money for garbage collection if they produce more garbage, therefore they try to reduce the amount of regular garbage by classifying it for recycling. In supermarkets as well, we can see an innovative approach to recycling; the deposit machines. A deposit charge is applied to glass bottles, plastic bottles and cans. When bottles are placed in the recycling machines, the deposit is returned to the customer, encouraging them to recycle as much

as possible. Thanks to the machines and repayment for PET bottles, cans, and glass bottles, people are willing to participate in this eco-friendly system.

2. フライブルクのリサイクルセンター / Recycle Center

フライブルクと日本ではリサイクルセンターの仕組みが大きく異なっています。

There are some major differences in the system of recycling between Freiburg and Japan.

１つ目に、フライブルクでは廃棄物を市民自らが持ち込む点です。市民がこの施設を利用するためには、この地域の住民であることを証明することができる書類が必要です。住民の方は車で施設に来て書類を係りの人に見せてから施設に入り、ゴミを分類していました。

First, in Freiburg, residents bring the waste to the recycling center by themselves. The residents bring the waste along with their residents ID cards. They classify the waste themselves to make recycling efficient.

２つ目に、分別の種類の多さです。例を挙げると、日本では庭木などは燃えるゴミとして、処理しますが、フライブルクでは市民が持ち込み専用のボックスに入れ、業者が処理します。日本でいう粗大ゴミに当たるような大きなゴミからワインのコルクの様な小さなゴミまで持ち込まれ、分類が行われていました。

Second, they classify the waste more specifically, in contrast with Japan. Where we tend to separate only the burnable and unburnable, German residents sort waste into a larger number of categories, including coarse dust to cork in wine bottles.

3 つ目に、コルクや使わなくなった衣類、家具などはリサイクルされます。ドイツに 30 年間住んでいらっしゃり、勲章を受賞された前田成子さんによると、コルクは、靴の中敷きや建築材に利用され、使わなくなった衣類は、バザーなどに出されます。また、使わなくなった家具は、難民や学生が自由に持ち出し、利用することが出来るそうです。学生や難民が自由に持っていけるというのは日本では考えられないことなので驚きました。

Third, clothes and furniture can become reused here too. Mrs. Maeda, who has lived in 30 years in Germany, told us that corks are recycled to make shoe insoles and materials for buildings. In addition, students and refugees can pick up and take home furniture without needing any special permission.

4 つ目に、危険物専用の処理スペースが設けられています。ここには、農薬、ペンキの缶、引火性のある物などが持ち込まれ、係りの者が、いつ、何を、どの位持ち込まれたかを管理し、業者が処理します。

Fourth, hazardous materials such as agricultural chemicals, paint cans, flammable substances are separated because of safety. These are then treated and disposed of by professionals.

ドイツに行って実際に政策を視察して驚いたことは、何度も繰り返しますが分類の多さです。分類の多さは家庭から出るゴミも、リサイクルセンターに持ち込まれていたものもとても細かく分類されていました。そして分類されたものの多くがリサイクルされていることを知りました。前田さんによると、フライブルクでは日本のように燃えるゴミ、燃えないゴミという分類ではなく、リサイクルゴミ、リサイクルすることができない最終ゴミという認識で分類しているそうです。こういった盛んなリサ

イクル政策がフライブルクをはじめとするドイツの都市で行われている理由の１つに国民の協力的な姿勢が大きいことも知り、とても驚きました。また、リサイクルセンターの職員の方がとても気さくで明るかったことがとても印象に残っています。とても楽しそうに仕事をされていたので、また行きたいと思いました。こういった姿勢も市民にリサイクルセンターをはじめとするリサイクルへの意識を与えるきっかけになっているのではないかと感じました。

In Germany, they try to encourage recycling and reusing as much as possible, In Japan, we tend to burn many things, even when we could reuse and recycle them. For Germans, it's not difficult to participate in 3R thanks to such excellent and organized systems. We can more easily realize 3-R (reuse, reduce, recycle) if we make reference and learn from the German system.

ホテルヴィクトリア
Hotel Victoria

概要 / Synopsis

2018 年 3 月に、フライブルクのエコホテルであるホテルヴィクトリア（Hotel Victoria）を訪れました。ヴィクトリアでは気さくなオーナー、ヨハネスさんがホテルの歴史やコンセプトについて英語で説明をしてくださり、ホテルの設備や客室の案内もしてくださいました。

In March 2018, we visited an eco-friendly hotel, 'Hotel Victoria'. There, Mr.Johanes Spaeth, the owner of the hotel who was nice and friendly to us, told the history and concept of his hotel while showing us around the hotel.

歴史 / History

1985年にホテルを父から受け継いだ現オーナーのヨハネスさんは、以前から可能性を感じ興味を持っていた、再生可能エネルギーを利用した環境にやさしいホテル経営を目指し、計画を立てられました。最初は地産地消の有機栽培・有機飼育の食べ物を取り入れることで個別包装を減らすことから始め、徐々に規模の大きな改造を実行されました。2000 年にはホテルの屋上に太陽光発電システムが設置されました。客室で使用する電力は全てこの屋上に設置された太陽光パネルと後述する小型風力発電により賄っています。

屋上では日光が眩しいほど照っており、なるほどこれなら客室用の電力が賄えそうだと思いました。

In 1985, Mr.Spaeth inherited the hotel from his father. Having an interest and feeling the possibility in renewable-energies, he decided to manage the hotel using those energies as a source

and make it more eco-friendly. He started the project by buying food that's organic and produced locally to reduce the amount of the packaging. Slowly, but surely, he started reforming the hotel. In 2000, a solar power generation system was installed on the rooftop. All the electricity that's used in guest rooms are all provided these solar panels and small windmills that will be mentioned later. When we went on the rooftop, the sun was radiating so we understood how they managed to provide all the electricity.

空調システム / The air conditioning system

2007 年には新しい空調システムが設置されました。その冷媒は 1620 メートルの深さから汲み取られた 10-13℃の地下水です。新しい空調システムは旧式の 50 分の 1 のエネルギーを使っています。そして 2009 年からは小さな風力発電タービン 4 基を屋上に設置されました。それでも電力が必要であれば、再生可能エネルギーのみを提供する Elektrizitätswerke Schönau 社で電気を購入します。

66 室の温水に必要な熱は全て屋上にある太陽熱温水器だけで賄っています。太陽が雲の後ろに隠れている日に必要な熱は、地下室にある木質ペレット給湯器（コージェネレーションシステム）で作られています。

In 2007, a new air conditioning system was installed. The refrigerant of this system is water that's drawed from 1620m underground and is approximately ten to thirteen degrees Celsius. It only uses 1/50 of what's used in the old air conditioning system. From 2009, small windmills are being used on the rooftop. When those windmills and solar panels can't produce enough electricity, the hotel buys some form an energy company called Elektrizitätswerke Schönau which only provides renewable energies.

The hot water consumed in all 66 rooms are produced with solar water heating system. When the weather's bad, the heat is created in the basement using hotel's cogeneration system.

コージェネレーションシステムに使われるボイラー →
Victoria Hotel's boiler used for the cogeneration system

コージェネレーションシステム / Cogeneration System

ホテルの地下にある木質ペレット給湯器（コージェネレーションシステム）はもともと化石燃料を燃料として使っていた機械でしたが、それを木材ペレットに切り替え、引き続き使用されています。木材ペレットは木材チップと比べると小さめの約 2 センチで加工が必要ですが、ホテルが都市部にあり、運送に便利なのと、地下室の収容容量に限りがあるためこちらを使用されています。また、エネルギー生産過程に排出される灰は栄養分が豊富なのでホテル内で栽培されている植物の肥料として活用されています。

Fossil fuel was initially used for the boiler but Mr.Spaeth changed it to a wooden pellet and used the boiler effectively. Pellets are bigger than chips and requires an extra process to produce. However, because the hotel is in an urban area it's more convenient when transporting if it's

smaller, and the capacity of the basement has a limit, pellets are being used. Moreover, ashes produced in the process of creating energy, which is highly nourished, are being used for plants at the hotel as a fertilizer.

客室 / Guest rooms

客室は寄せ木張りの床で、ベッドカバーを始め、多くの寝具、家具、シャンプーまでも環境に配慮した、かつ落ち着いた色使いで空間が構成されていました。「またフライブルクにきたら私たちもここに泊まりたいね」とみな声を揃えていました。

Guest rooms have a parquet flooring and furnitures, bedding like bedspreads, and even a shampoo are all eco-friendly but also compose the calming space. Everyone was saying that they want to stay in this hotel if they ever revisited Freiburg.

その他 / Others

さらに、ホテルの駐車場にはゲストが自由に使える自転車、電気自動車の充電ステーションがあります。オーナー自身も電気自動車を愛用していらっしゃいます。さすがホテル経営だけでなく環境についても考えるオーナーとだけあって、電気自動車もおしゃれでした。

オーナー所有の電気自動車、テスラ・ロードスター →
Mr.Spaeth's car: Tesla Roadster

The hotel even had bikes that guests can freely use, and a charging station for electric cars. The owner, Mr.Spaeth owns an electric car himself. It wasn't just an ordinary electric car but a stylish one.

業績の認知 / Acknowledgement of achievements

これらの業績は「世界一環境に優しいホテル」賞を 2000 年と 2004 年に受賞するなど、世界的にも評価されています。ロビー階の壁一面には思わずみんなから歓声が上がるほどたくさんの賞状がディスプレイされていました。

These achievements have been acknowledged globally, including receiving the "World's Best Environmentally Friendly Hotel" award in 2000 and 2004. A lot of prize cards were displayed on the wall of the lobby floor. There were so many that we all were impressed.

壁に飾られた賞状の数々 →
Prize cards displayed in the lobby floor

日本ではなかなか見られない、エネルギー自給自足型のホテル。そのシステムはいい意味で、シンプルで日本のホテルでも取り入れやすいものでした。こんなに素敵で環境にも優しいホテルが少しの努力と投資でできるのに、日本でもつくらない理由はないのでは、と考えずにはいられないホテルツアーでした。

Energy self-sufficiency hotel is something we rarely find in Japan. Its system was simple and something that can be adopted in Japanese hotels too. This hotel tour made all of us wonder if a hotel that's so eco-friendly and stylish can be built with such small effort and investment, if there's a reason why not to build one in Japan.

ロラン島
Lolland

ロラン島はヨーロッパのデンマークにある人口 6 万人という小さな島です。前までは日本よりも自給率が低かったにも関わらず、現在では自然エネルギー自給率 700%の島として知られており、私たちは実際にロラン島を訪れ、ロラン市議員の方のお話を伺いました。

Lolland is one of the small island in the Denmark with the population of 6 million people. Their energy self sufficiency rate used to be lower than Japan, but now they use 700% natural energy from all the resources from their country. To learn about the process of the successful change, we went to learn in Lolland.

私たちはこの島にある「climate center」という施設に訪れました。最近できたこの施設は廃墟となった砂糖工場をリフォームしてできた施設だそうです。この施設の特徴として、世界で数個しかない地球儀 Science on a sphere が設置されていて、気候変動が起こった経緯や放射線拡散の経路などがプロジェクションマッピングで示されます。

So, we went to a place called “climate center” in Lolland. This new place was recently reformed as a museum, but it used to be a sugar factory. As a special factor, there is a big globe ‘Science on a sphere’that shows the overall climate change in the earth, or the radiation flow from the projection map.

地球儀 Science on a sphere を見たあと、私たちはミーティングルームに行きロラン市議員レオ･クリステンセンさんとニールセンさんのお話を伺いました。そこでは今ロラン島で行われている様々な発電方法を紹介してくれました。

これらのお話を通して、最終的にレオさんたちが伝えたかった事は自立社会を作るべきだ、というこ

とです。最近の若い世代はすぐに娯楽や商業が盛んだからと言って大都市へ引っ越し、島の人口がどんどん少なくなってきています。しかし、レオさんたちの工夫により、現在、地方（ロラン島）でエネルギーを作り都市（コペンハーゲン）へ輸出しており、都市は地方なしに存在できないという事実があります。レオさんはこうした事実をコペンハーゲンに示し、その結果、ロラン島とコペンハーゲンは現在協定を結ぶほどになりました。私たちは渡り鳥ラインでフェリーを使ってハンブルクからロラン島に渡りましたが、ここにトンネルが開通するため、ドイツにももっと簡単にいける様になるそうです。ロラン島で様々なアイデアを構想し、実現しているレオさんは先進国はエネルギーを輸入するのではなく自給自足するべきだとも強く語っていました。つまり私たちが次の世代を継ぐのであり、私たちの将来のために何かに依存せずに、自分たちで独立できる自立社会を目指さないといけないと強くおっしゃっていました。

After seeing the globe, we went to the meeting room to have a talk with Leo Christin and Nielsen. They explained thoroughly about the types of methods of power generation occurring in Lolland. Throughout their story, they mentioned that to create an independent society is the most important factor. The young people thinks only about themselves, prefering to move out of the rural cities to enjoy or to be in a bigger company, leading the population in the island to decrease. They say that this is the core problem. However in Lolland, due to Leo's creativity of new solution to make the energy, Lolland is making the energy by itself and releasing it to Copenhagen. As fact, this made Lolland now a necessary existence to the big city. Leo has emphasized the necessity of Lolland, even making an agreement between both countries now.

We went to the Hanbulk by riding on a ship, but Lolland is working on making a tunnel, so the transportation would be much easier for people, making it easier to get in touch.

The owner of huge creative idea that has changed Lolland, Leo has stated strongly that we, the children, are the ones to inherit the next generation, so we should be the ones to put a target on creating the independent, self sufficient society. Because we are in the developed countries, we should not depend on the other countries to import the energy from other countries, and we should be able to gain energy self sufficiently.

MHI ヴェスタス社への訪問
Visit MHI Vestas

2018 年 3 月 2 8 日、フュン島にある洋上風車の開発・設計・調達・製造・販売に携わっている MHI ヴェスタス社を訪問させていただきました。

We visited the MHI Vestas on 28th of March, the 8th day of our study tour. They manufacture, innovate and sell offshore wind turbines.

副社長山田正人さんのレクチャー / Lecture from Vice President Mr. Yamada

山田さんには、洋上風力発電や欧州での洋上風力発電市場の変化、日本の再生可能エネルギーに対する認識と現状などについてお話していただきました。

かつて、洋上風力発電は、初期コストが高いとされていました。政府の計らいと投資により、コストが下がり、欧州では洋上風力が主力の一つとなりました。それに比べて、日本の再生可能エネルギーへの認識は昔から変わっておらず、その現状は嘆かわしいものだと山田さんはおっしゃっていました。そして、これは世界のエネルギーシフトの動きを正しく理解せずに、変化を恐れて、短期的なその場しのぎの対応を続けてきた結果である、と聞いて、まさに日本人の変化を恐れる、リスクを嫌う性質が今の日本を作っているのだと感じました。この問題解決には、長期的視野に立って、一貫した対応をとっていくことが重要だとの結論に至りました。

私たちは山田さんがおっしゃった再生可能エネルギーについての日本における理解の現状を聞いて、無知とは恐しいものであることを感じました。実際に、山田さんのお話を聞くまで「再生可能エネルギーには初期コストが多額に必要」ということを私自身、信じて疑いませんでした。また、このような情報がテレビや新聞などのメディアに溢れていることにも気がつき、知識がないままではこのような情報を鵜呑みにする可能性があることに危機感を感じました。

Mr. Yamada gave us a detailed explanation of the facts and his opinions on offshore windmills, the changes that Europe is taking on the wind-powered generation, and the use of renewable energy in Japan.

Once, the wind power generation was thought to be expensive, but though through planning and investing from the national government, the cost of windmills decreased. Now, it is becoming one of the main power sources in Europe. However, Mr. Yamada pointed out the fact that Japan has not taken steps towards renewable energies, and has been left behind with traditional way of generating electricity. The reason behind this is that most people do not understand the energy shift that is happening in the rest of the world and are avoiding taking risks to only consider what is best for the present. After hearing the lecture, we felt that the Japanese tendency to fear change and avoid risks is responsible for our current situation. We realized that Japan must act with a unified, long-term perspective to solve this issue.

Listening to Mr. Yamada's lecture about the present situation on renewable energy in Japan, we felt ignorant and understood the urgency of the current situation. I never doubted the idea that "Initial cost of the renewable energy is expensive." up until Mr. Yamada's lecture. Furthermore, I realized that this kind of false information is all over the media and I sensed danger in the possibility of people accepting this false information without the correct knowledge.

工場見学 / Factory tour

工場では風車の心臓部であるナセルを製造していました。このナセルには人工知能が搭載されています。これは風向きを瞬時に分析して、最も風が効率良く当たる場所に風車を移動する役割を担っています。

製造過程では、この 100 トンを超える巨大なナセルを８つの工程に分けて、それぞれ４０時間以内に完成させるといったシステムでした。１つ１つの工程での作業量や難易度の違いを考えたうえで、このシステムが設計されていることに感銘を受けました。また、工場といえば、日本での工場見学の経験から作業員の方々が黙々と作業をしているイメージを私はもっていましたが、ここでは音楽が流れていたり、話していたり、と自由な職場に見えました。このそれぞれが自由な働き方であるのはデンマークの慣習だと後の懇談で現地社員の方がおっしゃっていました。

In the factory, they were constructing nacelles, the heart of windmills. With their gigantic size, they weigh over 100 tons each. Nacelles are controlled by the artificial intelligence. This quickly analyses the direction of the wind, which then proceeds to turn the wind turbines to the most efficient direction.

The manufacturing process is divided into 8 sections and takes only 40 hours to complete. We were impressed by the vast amount of labor and their efficiency in completing the strenuous process of making each windmill. When we imagine factories in Japan, we have an image of people working silently. However, at MHI Vestas, the people were listening to music and talking, making the atmosphere feel free and joyful. Later in the tour, a local employee told us that this is the Danish custom and how a workplace should be.

現地社員との懇談 / Friendly talk with the local employees

最後に、現地社員の方とデンマークでの暮らしや日本人社員と一緒に働いて感じることなどについてお話していただきました。中でも、“働く”ことは社会と繋がるものであるので、人と人との関係を大事にしているとおっしゃっていたのが印象に残りました。

そして懇談の中、私たちは、「デンマークは世界一幸せな国と聞いてこのデンマークに来ましたが、物価が高く、なぜこの国が世界一幸せであるのかわからない、世界一幸せな国とはどういうことなのですか」と正直な質問をぶつけました。すると、現地社員の方は「あなた達は家で何もないのに家族と８時間話をしますか？」と問いかけました。そこで私たちはハッとしました。教育や医療が無料であることで、物質的な事よりも、不安がなく、家族や友達と楽しく快適に過ごす生活が豊かさを表しているのだと思いました。そして、幸せの価値観が違うということに気づきました。デンマーク人は、家で家族と過ごす時間を大切にしているため、長時間の労働ではなく、効率的な労働に念頭に置いています。

この懇談を通じて、MHI ヴェスタス社が社員の方々を含め、雰囲気がとても良いと私たちは感じました。それには、デンマーク人と日本人が一緒に働くということが関わっているのだと思いました。お

互い、異文化の故に、相手の文化的背景や言い回しの違いなどを考えて議論し、物事を進めていく必要があると感じました。また、日本人同士での推し量る・察するということがここでは通じにくく、自分の意見をはっきりと主張することが求められ、そうすることで意思疎通を図ることができ、お互いの良いところを取り入れて仕事を進めることができるのだろうと感じました。私はこのような職場を理想的であるだと感じ、将来このような環境で働きたいと強く思いました。

Finally, we talked with local employees about their lifestyle and what they feel about their Japanese co-workers. The most memorable phrase was that “work” has a connection with society; therefore it is crucial to have a good relationship with people.

During the talk with local employees, we asked them with honest curiosity, “We heard that Denmark is the happiest country in the world, even though the commodity prices are high, we don’t understand why this country is the happiest. Could you explain the reasons behind it?” Then they answered with a question “Do you talk 8 hours a day with your family?” We were blown away because they don’t have to worry about school fees and medical bills. Instead of worrying about financial matters, people in Denmark show happiness from being with family and friends. Through this, we felt that they have a different standard of happiness.

Also, they value their time spent with their families. Because of this, their aim is not to work longer, but to work efficiently in a short period of time to spend more time with ones they love.

Through the talk we had with the local employees at MHI Vestas, we noticed that they are very cheerful even during their work. I came to the conclusion that this positive atmosphere is possible due to their integration of Japanese and Danish people. Through this mix of cultures, they are able to debate, express and move forward by thinking about each other’s background and culture. The guessing and empathizing between Japanese people is invalid with Danish people, therefore their ability to express their own opinions and ideas is crucial. As a result, they are able to be in a mutual understanding and are capable of picking up other’s strong points and integrating them to further improve their work. I strongly felt attracted to the working conditions at MHI Vestas, and I felt that this should be the ideal condition in Japan.

ハンブルク・コペンハーゲン
Hamburg・Copenhagen

ハンブルク / Hamburg

①領事館 / Consulate

２０１８年３月２６日、私たちは在ハンブルク日本国総領事館を訪問し、丸山史恵領事によりハンブ

ルク州とシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の概要について講義をしていただきました。また、ハンブルクの環境政策についての質疑応答を行っていただきました。質疑応答では、ハンブルクの環境に対する新しい取り組みである公共交通での燃料電池車の使用についてから、教育の話まで多くのことをお話していただき、私たちの疑問にも丁寧に答えてくださいました。ハンブルクの教育のお話の中で小学校の時から環境問題に対して議論する機会が設けられているということが一番心に残りました。日本では環境問題について議論する、学ぶ機会は限られています。日本でも小さい時から環境問題を学べる機会を作る必要があると強く感じました。

On 26th March, 2018, we visited the Japanese consulate in Hamburg. The consular, Ms. Fumie Maruyama, taught us about overviews of Hamburg and Schleswig-Holstein. In addition, she kindly answered our questions about environmental problems. After we asked about Hamburg's efforts on transportation and education, she answered our questions specifically. She told us about using electricity for transportation and education to children Hamburg. According to Ms. Maruyama, children in Hamburg start to learn about environmental problems when they are in elementary schools. In Japan, the number of places where we can learn about environmental problems is limited.

We thought we need places to learn and debate in Japan.

②交通政策 / Transport Policy

a.自転車 / Bicycle

ハンブルク内の道路はすべて歩行者用、自転車用、自動車用に分かれていました。

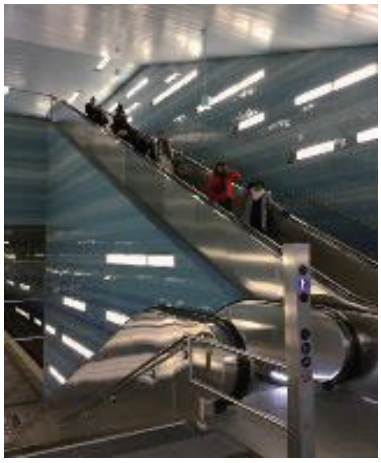
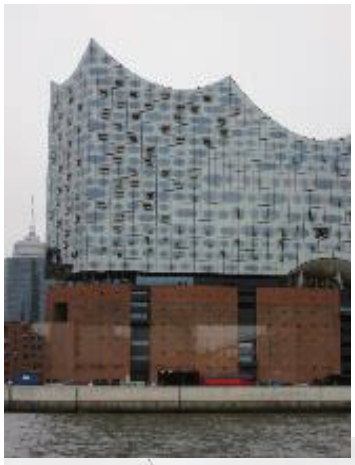
町中に貸し出し自転車が所々にあり、会員登録して入れば、30 分間無料で乗れます。

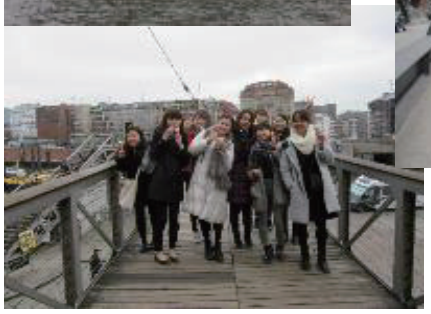
All the roads in Hamburg were separated into sidewalks, bicycle roads and car roads. In the city, there were many places where you can borrow a bicycle. If you are a member, you can rent a bicycle for 30 minutes for free.

b.地下鉄 / Metro

再開発の一環として、地下鉄も新しく整備されていました。再開発エリアには日本人の方が音響を担当された、エルプフィルハーモニーのホールが建てられ、街を昔からの倉庫街などの景観を利用しながら新しく生まれ変わらせる工夫がされていました。

There was a new subway running as one part of the redevelopment. In the area of redevelopment, Japanese people built a hall called Elbphilharmonie, where people can enjoy music. Also, by making the city look old and unique, it can be new and original.



c.バス、U-Bahn / Bus, U-Bahn

ハンブルク内には３００m以内にバスの停留場やU-Bahnの駅がありました。

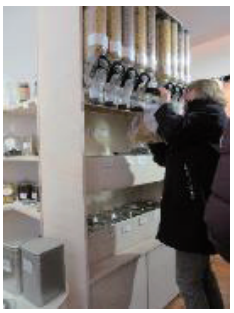
Wherever you are, there is a bus stop or U-Bahn station less than 300 meters away in Hamburg.

③その他 / Others

a.リフィルのスーパー / Unpacked Supermarket

このスーパーは容器がないスーパーとして知られており、買い物に行くときはジップロックを持参する必要があります。

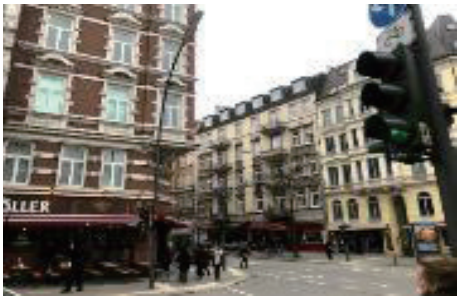
This supermarket is known with unpacked items. When you are going shopping, you must bring your own ziplock bag.



b.街並み

ハンブルクは総面積の約半分が緑地帯、約一割がアルスター湖をはじめとする水域で占められているため、大都市でありながら自然を感じることができます。また、建物は一つ一つがとても大きく、外装が豪華なものばかりでとても高級感がありました。

About half of the area in Hamburg is a green belt and about 10% of the city is covered with water, such as Alster lake. Even though Hamburg is a big city, people can feel close to nature. In addition, the buildings are huge and they all looked luxurious.



コペンハーゲン / Copenhagen

①交通政策 / Transport Policy

a.自転車 / Bicycle

コペンハーゲンには貸し出し自転車がたくさんあります。各貸し出し自転車にはタッチパネルが設置されており、そこでログインすると使えるようになっています。

In Copenhagen, there are many rental bicycles. On every rental bicycle, there is a touch screen. To use the bicycle, you have to login using the screen.

また、自転車専用道路が設備されていて利用しやすい環境になっていました。これはその１つで、サイクルスランゲンといって空中を飛んでいくような道路です。とても寒い中、自転車を利用する人がとても多かったです！

Also, there were bicycle roads and is a good environment for people to use bicycle often. This photo shows a road called **Cykelslangen**

which feels like flying in the air. Even on extremely cold days, there are many people who ride bicycles.

b.地下鉄 / Metro

コペンハーゲンの地下鉄は自転車と一緒に乗れるようになっています。ラッシュ時は一分半に一本来るので、いつでも座って通勤できるとのことです！

In Copenhagen, people can ride trains with their bicycles. Trains come every one and a half minutes, so people can always sit down when they go to work!

また、静かに電車に乗りたい人用のエリアも設けられています。

In addition, there are areas in the trains for people who want to ride quietly.

②ごみ処理場 / Landfill

ごみ処理所の建物の屋根をスキー場にしたことにより、ごみ処理場でありながらその周りに人が住みたいと思うような環境作りを工夫していました。既存の施設を新しい発想で作り変える工夫が見られました。

Efforts into making a good environment, such as building a ski slope on the roof of a waste processing plant, made people want to live around that place. We saw some good ideas of making an existing building to a new facility.

③学校 / Schools

a.教育 / Education

コペンハーゲンでは環境に良いことをするという考え方は当たり前のこととして教育しています。基本的に夫婦共働きで子どもは、小さい時から保育所で過ごすので生活指導委員の方々が指導しているそうです。

People in Copenhagen are taught that doing something good for environment is usual and expected. In most families both parents work, so children are given educational guidance on environmental issues by specialists in daycare centers.

b.インターナショナルスクール / International School

コペンハーゲンにあったインターナショナルスクールの建物は全体が太陽光パネルでおおわれていました。１万２０００枚のソーラーパネルを使っており、学校が一年を通して消費する半分以上の電力を供給できるそうです。

The international school in Copenhagen was covered with the solar panels over the entire

building. About 12,000 panels are used and they can produce more than half of electricity that the school uses in a year.

④その他 / Others

a.イヤマスーパー

そしてこれはデンマークで有名なイヤマスーパーです。オーガニック食品やエコバックなどエコをテーマとした実用的なアイテムを販売しているスーパーです。このスーパーのロゴであるイヤマちゃんがとても可愛くデザイン性もとても高い商品がたくさんありました！

This supermarket, which is famous in Denmark, is called **Irma**. There are selling many useful items with an ecological theme, such as organic food and eco-bags. The logo of this supermarket was especially cute and the products showing this character were well designed.

b.洋上風力発電

コペンハーゲンの海沿いには沢山の洋上風力発電がありました。この風力発電は日本にない大きさで大量の電力を発電しています。洋上風力は島国である日本にも取り入れることができる発電方法なので、将来日本でもこのような光景が見られる日が来るといいと思いました。

By the seashore in Copenhagen, there were many offshore wind power installations. These windmills are enormous compared to the ones found in Japan, and provide a large amount of electricity. Offshore wind power can also be used in our island country. Therefore, it would be nice to see this view in Japan in the future.

c.街並み

コペンハーゲンの建物はデザイン性がとても高いことが印象的です。特に観光地であるニューハウンは運河沿いにカラフルでかわいい建物がたくさん並んでいて、色鮮やかなのに、古い街並みを生かし落ち着いた雰囲気がありました。

Buildings in Copenhagen are well designed. Especially in Nyhavn, which is a sightseeing spot, there were many colourful and cute buildings along the canal. Even though the buildings are colourful, streets there had an old and cozy atmosphere.

3-6-1●2017/03/26, 05/21 その他の活動

The Global Enterprise Challenge 高校生対象の 12 時間の国際競技

本校の高 3 のチームが 3 月 26 日に開催された国内予選を 3 位で突破し、5 月 21 日の Global Youth Entrepreneurship Challenge 世界大会に進みました。

【国内予選 課題】

「Develop a piece of innovative low-priced agricultural equipment that could be used on small fields such as rice terraces where existing farm machinery like tractors and combines cannot be used. You will propose your business idea to a group of investors who wish to contribute to the solution of social problems through their investments. 」

【GYEC 課題】

「To design a system or service to utilize and/or store energy that does not directly produce electricity, and make that idea into a feasible working business model.」

DOSHISHA INT'L（同志社国際高等学校）

東郷七摘、トラウデン直美、丹羽彩佳、丹羽舞佳、山口侑梨江

写真 ： 大会サイトより

（大会サイト）

http://www.entreplanet.org/GEC/2017report/index.php#b

3-6-2●2017/07/05 その他の活動

WORLD SCHOLAR'S CUP 2017 世界大会へ！

ハノイで行われた国際大会で本校チームが優秀な成績を納め、世界大会への出場が決定しました。

April 29th 2017 I took a group of 27 students from Doshisha International to the Kansai Round of the World Scholar's Cup; 24 were competing and 3 were volunteers for the day. In total there were

120 students competing from 7 different schools but all of our teams made the cut and qualified for the Global Round in June.

The Kansai Scholars Group – Senri International School April 2017

But, what IS the World Scholar's Cup? The competition started in 2007, growing out of the American Academic Decathlon and morphing into an event that celebrates learning, and also focuses on creating true global friendships. Students receive a rigorous curriculum that covers six academic disciplines, and then engage in a 60-minute exam, 60 minutes of collaborative writing, three team debates, and finally a giant quiz that asks them to view the ideas learned in the curriculum in a very lateral manner. The debates are particularly challenging; students receive the debate motion and have 15 minutes' preparation time, then each team member speaks for 4 minutes. Some topics from this year were: ` Schools should do more to teach students how to fail`, and `Governments can be justified in carrying out false flag operations. ` While the Regional Round lasts two days, the Global Round is six days in total. This year`s event was held at the Vietnam National Convention Centre and saw a total of 3600 students from 40 different countries taking part.

Junior Round Teams at the Vietnam National Convention Centre – June 2107

However, the Global Round is much more than a high stakes testing competition. Team Doshisha arrived in Hanoi on a humid Sunday afternoon, and we slowly acclimatised to the ambience of this incredible and vibrant city. On Day One we attended the Opening Ceremony and listened to a keynote speech from Lawrence Watt-Evans, one of the authors from the competition booklist. Following that, we were bussed to Bao Son Gardens where the students were assembled into new teams for the Scavenge Hunt. This is one of the best events of the week; 15 students per team, each student from a different country, so straight away new friendships are formed across continents and these last through the week and beyond. Day Three saw the first of two Talent Shows that had

our jaws banging the floor in awe as we witnessed incredible performances of music and dance from participants in the event. Day Four was a chance to explore another piece of Vietnam, with a day trip to Halong Bay, then back in the evening for the Scholars Ball. The Seniors got dressed up and we headed to the Grand Palace hotel for three hours of loud music, (some) dancing, and the chance to deepen friendships and forge new ones with scholars from around the globe.

Senior Round teams preparing for debates at Vin School, Hanoi - June 2017

Our hotel was also home to a number of WSC delegations from a range of countries, allowing us to mix with a variety of nationalities at all points of the day. Each morning on the bus to the venue I chatted with three lovely Indian ladies; met teachers from Dubai, Qatar, Kuwait, Switzerland, South Africa and Thailand, and also judged debates for students from Vietnam, China, Australia, Myanmar, Dubai, South Korea, Singapore and Malaysia. It truly was a global experience, especially when people answered the question `Where are you from? ` So often the answer was "I'm from X, but I go to school in Y." On the final day's awards ceremony, we waited anxiously to see how our students had fared against the best and brightest scholars around. The opening Flag Ceremony saw a representative of each nation present carry their country's flag into the auditorium and onto the stage to celebrate the incredible diversity present. Once the awards got underway, our students were often called to the stage to receive medals and trophies in recognition of their efforts in the different disciplines of the event. One of our teams then placed 25th out of the 500 competing Senior teams and will be going to Yale University in November for the final Tournament of Champions, where they will be joined by two other Dokoku groups, for more adventures in their new-found unlikely world.

Victorious Team 255: Kai Omote, Suzu Kitamura, and Tomoharu Miura

For more information on the World Scholar's Cup, please go to: http://scholarscup.org/

3-6-3●2017/07/19　その他の活動

ハーバード大学　Mary C. Brinton 教授の講演会

ハーバード大学 Mary C. Brinton 教授の講演会を行いました。

7 月 11 日(月)、ハーバード大学社会学部長、ブリントン教授を本校にお招きし、先生の研究分野について講義をしていただきました。

日本の労働市場や雇用についてのお話をお伺いし、普段特に意識せず受け入れている日本の労働、雇用慣行や社会について、相対的に考える視野を得ることができました。また、教授の専門である社会学のおもしろさにも触れることができました。

司会進行は Harvard Summer School Program に参加した高校３年生がつとめ、生徒たちにとって、大変貴重な機会となりました。

3-6-4●2017/09/18　その他の活動

第4回　同志社英語プレゼンテーション大会－立石杯－

９月１８日（月）に行われた「第４回　同志社英語プレゼンテーション大会－立石杯－」で、本校生徒が優秀な成績をおさめました。

中学生の部Ⅰ部門　優秀賞　３年　堀 綾香　３年　香月 琉梨乃　３年　武井 彩香

高校生の部Ⅰ部門　優秀賞　１年　菅野 万里子　１年田中　葵　１年永島 花華

当日は「Japan is most livable country in The Western Pacific Region.」のテーマで、本校高校生による模擬ディベートも行われました。
参加者は以下のとおりです。　３年和田 恵美　１年辻林 芽宮　１年白　理沙　１年川上 海斗　１年梶崎 妃那　１年フェルナンデス 摩耶　１年矢羽田 里菜　１年上村 あいの　１年小泉 慧哉

（大会サイト）
http://www.doshisha.ed.jp/information/new_20170918.html

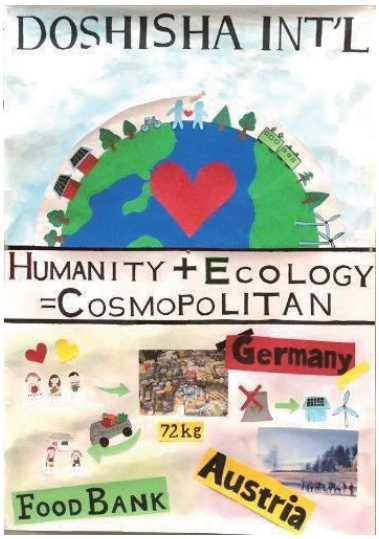
3-6-5●2017/11/25　－GUSⅡ　その他の取り組み－（高校３年生）
2017 年度 SGH 全国高校生フォーラムに参加してきました

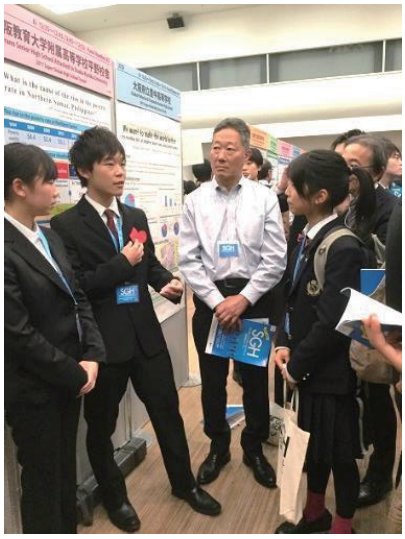
パシフィコ横浜で開催された文部科学省と国立大学法人筑波大学との共催による『2017 年度スーパーグローバルハイスクール(SGH)全国高校生フォーラム』に、GUSⅡより 4 名の生徒がポスターセッションに参加しました。セッションの準備に取り組む中、エコに取り組む活動のインパクトをより鮮明にするため、あえてポスターは印刷ではなく、手書き、また動きのある仕組みのものにしました。

本校のタイトルは『Humanity + Ecology = Cosmopolitan』、ドイツでのフィールドワークで学んだことから環境問題に取り組んできた自分たちの活動を紹介し、そして何よりも環境問題に取り組む大切さについて、4 分間英語でセッションをしました。その後は質疑応答にも答えました。

参加校は全てで 211 校でした。
他校とのセッションを通しての交流も
大変有意義なものとなりました。

フォーラムのサイト
http://www.sghc.jp/2017forum/





3-6-6●2018/01/24 その他の活動

経済協力開発機構(OECD)特別講義

高 3 選択科目「経済研究」「世界史研究」のクラスで、経済協力開発機構(OECD) 東京センター副所長 樋口厚志氏による特別講義が行われました。

1 月 22 日、高 3 選択科目「経済研究」「世界史研究」のクラスに、経済協力開発機構(OECD) 東京センター副所長 樋口厚志氏をお招きし、特別講義が行われました。
OECD って何？という説明から始まり、生徒たちが事前に送った質問に次々お答えいただき、OECD と日本の関係や現在の世界情勢、また自身のお仕事やキャリアについてなど、幅広く、深い内容をお話してくださいました。日常の学校の勉強や資料だけでは得ることができない世界の息づかいを感じることができ、受講生にとっては貴重な経験となりました。
このような機会を与えられた時の本校の生徒たちは、真剣そのものです。
講義に惹きこまれてあっという間に 100 分が過ぎ、次の授業が始まるギリギリの時間まで残って質問をする生徒が絶えませんでした。
「自身の経験や学びを世界の役に立てたい」という樋口さんの言葉が、とても印象に残っています。

追記：東京に戻られた樋口さんから、本校へのご感想をいただきました。

「生徒さんが積極的に発言してくれてとても助かりました。同志社国際には非常にポジティブな場の空気が流れているのを感じ、こういう学校で育ったら魅力的な人になるだろうなと、帰路感慨にふけりました。」

3-7●2018/02/17 －GUS その他の取り組み－
2017 年度 SGH 活動報告会開催のご報告

2 月 17 日（土)、同志社大学今出川キャンパス良心館にて、2017 年度 SGH 活動報告会を開催しました。本校の SGH の学びもいよいよその第 1 期生が卒業しようとしています。ひとつの区切りとなるこの日の報告会では、同志社大学 国際連携推進機構長 副学長である圓月先生よりご挨拶いただいた後、本校 SGH 研究開発実行委員長の山本教諭より一年の活動を通しての振り返り、高校 3 年生による SGH 全国フォーラム参加、SGH 甲子園参加に向けて、そして提言についての報告、担当の坂下教諭から 1 年間の取り組みについての報告に続き高校 2 年生による活動報告と 3 月のヨーロッパフィールドワークに向けての報告、続いて高校 1 年生によるバイオマスタウン真庭フィールドワーク、国際機関を訪れる東京フィールドワークの参加報告が行われました。生徒達はこれまでの SGH プログラムの学びを通して、またフィールドワークでは実際に肌で感じたことを踏まえて考え、自分たちで行動に移す、そして提言をするというインプットからアウトプットへのステップへと学びを進めています。これまで、講演や講義でご指導いただきました講師の先生方、フィールドワークでたくさんの学びの場を提供し共有していただいた関係者の皆様、そして本日報告会に参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。

受付

開会の辞：川井国孝校長

司会：戸田光宣教頭

挨拶：同志社大学 国際連携推進機構長

副学長 圓月 勝博 先生

授業の概要説明：山本真司教諭

高３　：全国フォーラム参加報告

高３：提言

高２：GUS I での取り組み

高１：真庭 FW 参加報告

高１：国際機関東京 FW 参加報告

3-8-1●第3回同志社国際高等学校 SGH 運営指導委員会

下記の通り、第３回ＳＧＨ運営指導委員会を開催いたしました。

日時：７月１３日（木）　１４：００～１６：３０
場所：同志社国際高等学校　啓真館３階　大会議室
　　（京田辺市多々羅都谷６０－１　Tel:0774-65-8911）
内容：2016 年度、2017 年度の取り組み報告と今後の展望
　　意見交換･質疑応答
出席：外部指導委員：　安倉　公彦氏（京田辺市部長）、十倉　良一氏（京都新聞論説委員）
　　学内：　川井　国孝校長、戸田　光宣教頭、山本　真司ＳＧＨ研究開発実行委員長

3-8-2●第 3 回同志社国際高等学校 SGH 運営指導委員会【別紙様式 1 自己評価表】

（別紙様式１）

平成２９年度スーパーグローバルハイスクール自己評価票

京都府		私立学校法人 同志社	同志社国際高等学校（どうししゃこくさいこうとうがっこう）	
評価項目		評価の観点	当初計画	自己評価コメント
①研究計画の進捗等の評価	研究計画の進捗状況	研究計画や具体的目標値の達成に向けて、予定通り進捗しているかどうか。また、特に構想により設定したグローバル・リーダー像を踏まえた卒業時に生徒が習得すべき具体的能力等の育成・向上に向けて、予定通り進捗しているかどうか。	持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特性に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。その提言を日本語と英語で作成し、日本語版は京都府と京都市に、英語版は国連環境計画（UNEP）と経済協力開発機構（OECD）に提出する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発を本構想の目的とする。	研究開発計画に基づいて順調に教育課程の研究開発を進めることができている。 **○ＳＧＨ科目からの拡充** 教科学習としてのＳＧＨ科目はもとより、主題関連の講師を招いたレクチャー、国内では「真庭エコツアー」、「東京フィールドワーク（ドイツ大使館、オーストリア大使館、ＥＵ代表部、外務省、ＪＩＣＡ、ＪＥＴＲＯ訪問）」、卒業生（ＪＡＸＡ研究員、ＪＥＴＲＯ職員、内閣府参与）を招いた講演会の実施など多角的なプログラムを展開することで生徒の学習意欲を刺激し高めた。グローバルイシューへの関心を惹起し、コミュニケーション能力の必要性を感じ、学ぶ生徒が増えている。
	学校の研究体制	学校全体として体制を整え、組織的に取り組んでいるかどうか。（一部の教員ではなく，各教科・担当部署が連携・協力しているかどうか。） また、指導体制・指導方法は研究のねらいに適したものとなっているかどうか。	学校法人同志社の組織として、「SGH 管理委員会」を設け、外部委員からなる「SGH 運営指導委員会」と共に、申請校の SGH の取組状況を確認し、必要な助言・指導を行う。 校内では校長、教頭、事務長の三役を SGH 本部とし、教育面、経理面の全てを、責任を持って監督する。教育内容は、研究開発実行委員会（15 名）と授業担当者会（6 名）とを組織し、密に連絡をとりながら、小冊子や報告書の作成に至るまで当該委員会が担当する。SGH の授業を担当しない教員は、SGH 事業実施に当たる際の、多方面に及ぶ周辺的なサポートを担当する。また、経理面は、法人から配置された担当者と本校の経理係の SGH 経理担当者会が担当し、事務長がそれを監督する。	研究体制は当初計画を上回る規模と内容で進捗している。学校体制と組織、それらの有機的関連は構想調書と通りに実施している。ＳＧＨ科目兼開発委員と授業担当者は主体的に参加を促した結果、教科を超えた多様な構成となった。（宗教科、社会科、国語科、数学科、理科、英語科、第二外国語科） **○ 構想からの拡充** 英語科は構想調書に挙げた科目に加えて、新たに「ワールド・イングリッシュ（World English）を自由選択科目として設置し、初年度２クラス４０名受講、二年目には６クラス８３名が受講した。 **○ 日常的協力体制** また、リーフレット、報告書、ポスター等の作成に関しては、特に芸術

			このように、本校の教職員全員が何らかの形でSGH事業に関わり、この事業に臨む体制を作る。 添付資料 研究開発組織の概要	科の全面的協力があり、授業運営とホームページ作成についてはコミュニケーション・センターと事務補助を設置し、バイリンガルで発信している。ＳＧＨ授業担当者、研究開発委員の研究出張等に関しても全教職員がそのバックアップを担っている。この充実した体制の下で、直接担当者１２名（全教職員６１名校長、教頭、事務長を含む）は研究開発の目標を達成する努力を続けている。
	運営指導委員会	運営指導委員会が、専門的見地からＳＧＨの運営に寄与しているかどうか。	以下の構成で運営指導委員会を構成し、定期的にＳＧＨ事業の取り組み状況について内容や実施状況を確認し、必要に応じて申請校を指導する。 運営指導委員会（依頼） 京都新聞社論説委員　十倉良一 京田辺市市民部部長　松尾憲雄 ＮＰＯ代表　原田紀久子 （アントレプレナーシップ開発センター）	運営指導委員として、十倉良一氏（京都新聞論説委員　琵琶湖、淀川からボーデン湖とライン川取材経験を持つジャーナリスト）行政から、松尾憲雄氏（２年目　林敢太氏　京田辺市市民部長、同志社連携担当）原田紀久子氏（スタンフォード大学学生インターンシップ担当、アントレプレナーシップ教育、ＧＥＣ担当）を招聘し、年間二回定期委員会を開催している。 **○　運営指導の実際** ＳＧＨ科目授業のゲスト講師として直接生徒に接し、指導と助言を担っている。それぞれの立場で有益で適切な助言と指導を日常的にメールベースで受けている。
②教育内容等の評価	教育課程の編成	ＳＧＨ課題研究を実施するために学校が設定した教科・科目および対象人数は適切であったか。	１年生必修科目（２７０名）授業担当教諭６名研究開発委員８名Global Understanding Skills（Basic)」を総合的な学習の時間（１単位）として設置した。２年生（２単位）（６０名）授業担当教諭２名「Global　Understanding SkillsⅠ」を選択科目として設置した。３年生（２単位）（６０名）授業担当教諭２名「Global Understanding Skills Ⅱ」を選択科目として設置した。	構想調書に従って、１年生は必修１単位科目として設定し、ＳＧＨ構想を徹底した。２年生は受講希望者からレポートと面接を課して、進路希望を勘案しつつも原則継続履修者として６０名を選抜し、そこからさらに海外研修１８名を選抜した。１年生で設定している二つの国内研修と合わせて参加希望者が多かったが、適切な選抜をし、十分な実地研修を体験させることができた。

		グローバル・リーダーを育成するため、現代社会に対する関心と深い教養、論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション能力、問題解決力、行動力等を育成するための先進的な教育課程の研究開発が効果的に進んでいるかどうか。	帰国生徒の個別体験を全生徒が共有するとともに、世界的課題について系統的に学ぶことで、自己の経験のみによって形成された世界観から脱却し、より普遍的な課題の中に、自らの体験を位置づけることができるようになる。その際、同志社大学、同志社女子大学から講師を招聘しテーマに即した講演を企画することで、一貫校としての連携がより組織的なものとして強化される。 また、世界的な課題を解決するための具体的方策を考察することで、現状においては教科指導内に留まっている課題発見能力、プレゼンテーションやディスカッションの能力の育成を、実際の政策提言の策定の作業にも拡大していくことができる。こうして策定したものを、最終的に関係諸機関に対して提言することにより、その提言が具体的な働きかけの次元に発展させられる。 以上の方法によって、地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーを育成することができると考えられる。	計画に従って、２年間のカリキュラムを完成し、三年目の実践を始めようとしている。 **○　一年次ＳＧＨ科目** Global Understanding Skills-Basic グローバル課題についてMDGｓからSDGｓへグローバル化時代における国際協力。環境経済学の基本的な考え方、政策学の基本的な考え方、京都の森林活用事例、岡山県真庭市の取り組み、ドイツ・フライブルク市の取り組み、オーストリア・ギュッシング村の取り組みを学ぶ。ヨーロッパの環境法、エネルギーシフトの現実、ヨーロッパの都市計画や政策事例について調査する。 **△　方法論**　これらの課題を自らの問題としてとらえ、主体的に多様な方法で調査し、意見交換をする、調べ学習とマイクロラボと名付けた小グループでまとめ全体でシェアーする授業を展開した。 **○　二年次ＳＧＨ科目** グローバルイシューをグローバル・リーダーに学び グローバル・リーダーのイメージを獲得する。そのためにグローバルイシューを多様な切り口で抽出する。抽出された問題を一定の成果を収めている先行事例から学び、フィールドワークへと結びつけた。１２月にドイツ・オーストリアでのフィールドワークを実施（行動記録はブログで学内に発信）し、成果を研究発表会で発表し、ＨＰを用いて発信した。

	校内の授業改善	ＳＧＨによる取組が、独自の取組と併せて、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業になっており、また教科の連携・協力により学校全体の授業改善が図られているかどうか。	生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。 ○課題研究以外の研究開発選択科目「English Elective」２年生に新講座「Research, Debate, and Presentation」３年生に「Advanced Academic English」を設置し、プレゼンテーション、ディベートの方法を学び議論の質を高めるためのリサーチスキルを身につけさせる。さらに、3年生にCambridge Academic Englishを用いて基本的な文献調査の方法、レポート作成方法のスキルを身につけさせる。 ○グローバル・リーダー育成課外の取組内容・実施方法 提携校Smith College、Phillips Academy Andover、Harvard University サマープログラムへ参加を奨励する。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、台湾、大韓民国の提携校との交換留学と在籍生徒との意見交換の場を設定していく。	計画通りに進捗している。 **○　英語科とのコラボレーション** 既存講座はもとより、新設講座「Research, Debate, and Presentation」（２年生）、「Advanced Academic English」（３年生）ではプレゼンテーション、ディベートの方法を学び議論の質を高めるためのリサーチスキルを身につけさせることができている。新規採用を始めたCambridge Academic Englishは基本的な文献調査の方法、レポート作成方法のスキルを身につけさせることに成功している。 **△　新たなニーズ** ＳＧＨの取り組みから英語圏以外で教育を受けた生徒実践的な英語講座の開講を求めてきた。それに応えて、新規に「World English」を課外に開講した。開講状況 2015年度　２クラス４０名 2016年度　６クラス８３名 生徒が自主的に開講を希望したことは特筆すべき事項であり、それに応える体制が出来上がっていたことは学校全体の取り組みとしてＳＧＨ構想が定着しつつある証明である。
	特色ある教材開発	課題研究を効果的に推進するための教材を開発しているかどうか。	帰国生徒、一般生徒の生活経験を共有し、グローバルな社会課題への視野、知識、態度を養う。生徒は、研究のまとめとしてレポートを作成する。レポート集を作成し、問題の共有をはかり、次年度に開講される「Global Understanding SkillsⅠ」での実践に向けた準備とする。 教材開発項目 １　生徒の生活経験からの、グローバルな社会課題 ２　グローバル市民社会という発想 ３　グッド・ガバナンスとは	**○　導入として** 1年次に、ジャレド・ダイヤモンドの問題提起「銃・病原菌・鉄」「文明崩壊」「+6℃」を視聴し、ＰＤＣＡサイクルを用いて課題理解を試みる。次に、シェアーされた意見を題材にクリティカルシンキング（ＣＴ）を意識させながら議論させ、ポスター作成などで達成感を持たせていく。GUS Basicという必修科目の中で、基本的なアクティブラーニングの方法を身に着けさせる。 **○　フィールドワークを意識した展開** ２年次では、グローバル・リーダー

			４　環境問題に対する森林からのアプローチ ５　持続可能な社会の構築 先進事例の学習（フライブルク、ギュッシング、京都） ６　デジタルデータの作成および公開 ７　フィールドワークの準備と京都への応用可能性の探究 ８　１年次で得た問題意識に基づき、グループワークによって課題解決型学習を行う。海外の提携校と共通のテーマ学習を行い、スカイプやＳＮＳを利用したディスカッションなどを実施して、問題をより深く、多角的に考察する。生徒は、フィールドワークのまとめとして、報告冊子やホームページを作成し、現地での学びを昇華させるとともに発信を行う。	からその着眼と発想法を学ぶ教材を開発している。ＴＥＤｘとMujica大統領の絵本とスピーチを用いて表現能力を磨く。仮想水と「+６℃」、Ｇ７環境会議コミュニケを教材に課題発見と発題法を学ぶ。 **○　課題への取り組み** すでに獲得している教養や語学力を一層伸長する持続的な学習方法を用いリーダーシップを育む基礎とする。○　**教材**　境界を持たない種々の媒体を利用する。ＣＴ、ＡＬ、ＬＴＤ、マイクロディベート、ジグソー、ＴＰＳ、ラウンド・ロビンをシミュレーションしながら習得させる。３年次終了後に独自の汎用型テキストを作成、出版する計画である。
③外国語教育・国内外研修等の評価	外国語教育に関する取組	外国語教育に関する取組は、課題研究との関連性が明確であり、研究課題に取り組むために必要な能力を向上させるための取組が日常的に行われているか。	○　English Elective Research, Debate and Presentation プレゼンテーション力に加え、相手の主張を踏まえて論点を整理する力、相手の主張を予測して、自分の主張の論法を操作する力を身につけさせる。そのためにはディベート形式での練習が最も効果的である。ディベートを行うためには、十分な事前調査、論点を整理して計画的に論点を挙げていく能力が必要である。 Advanced Academic English 課題研究において最終的に提言を作成する過程では、学術論文を読んだり、国際機関に提出するのにふさわしい形式の英語で、提言内容を表現したりできる能力、つまり英語を学術的なレベルで高度に運用する能力が求められる。 Cambridge Academic English のユニットの中から選択し、内容を組み	計画に従って実施している。 ○　１年生（２単位） English Elective 11 （科目のねらい）In this class students will become familiar with the style and content of TED Talks. They will learn how to adopt some of the presentation skills they see and also organize a TED themed event. （学習の進め方）Students will create a personal library of TED Talks based upon their interests. They will share these in small groups and also make presentation to the class based on the groups choice of favorites. In addition the students will organize at least one small TED themed event in school ○　２年生（２単位） English Elective 2 （科目のねらい）Object of the

			合わせながら学習を進める。【レクチャースキル】【リーディングスキル】【ライティングスキル】【スピーキングスキル】それらを用いてWikispace、 Edmodo、 Moodleなどの教育目的の交流サイトを利用する。	Course: To work on and improve research and presentation skills with a focus on Global issues facing us. Towards the end of the course, there will be a focus on debating one of the Global issues. To prepare students for future SGH research and presentation activities. (学習の進め方) Method of Conducting the lessons: Students will work alone and in groups. Researching in the C.C or on iPads in the classroom. Working on presentations skills. Making real presentations on contemporary topics working in teams to debate the issues. 上記以外の外国語科目に関しても日常的にＳＧＨを意識した授業展開を実施している。
		英語等も含めたグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、探究的学習等は、課題研究を実施するための効果的な取組となっているか。		本校においては全ての教科、科目でできうる限り少人数クラス、進度別クラスをクラスを編成し、一方的な講義形式の授業を避ける努力をしている。象徴的に外国語科ではTED.com, Prezi, Flipagram, Edmodoなどを積極的に利用、応用して生徒の意欲を刺激している。
	国内海外研修等に関する取組	フィールドワークや成果発表等のための国内海外研修等が、課題研究を実施するための効果的な取組となっているか。	先進事例に対する環境経済学、森林科学のアプローチ 岡山県、真庭市エコツアー（国内フィールドワーク）の実施。 海外研修への事前学習として在京ドイツ大使館、オーストリア大使館、ＥＵ代表部訪問、外務省、ＪＩＣＡ、ＪＥＴＲＯ等の訪問。(国内東京フィールドワーク)	計画通りにフィールドワークと研修を実施した。 **○　１年次** （１）バイオマスツアー真庭に参加した。豊かな森林資源を生かし、バイオマス事業を軸に持続可能な社会構築を目指している真庭市を訪問し、ツアーに参加した。ツアーでは、地域資源の有効活用によって化

			1. フィールドワークの実施 ・オーストリア、ドイツにおいてフィールドワーク（１０日間）を実施する。	石燃料に代わる様々な新エネルギーを実用化している現場を、より効果的に学習する。木質ペレットの国内生産ではトップシェアをもつ工場も実際に見学し、発電施設等の見学をおこなった。 （2）東京フィールドワーク「環境先進国に学ぶ」事前学習の一環として、海外研修国のドイツ連邦共和国とオーストリア共和国の各大使館を公式訪問した。　表敬訪問と共に私たちの学習意図を説明し、それぞれの国の環境問題に関する概説を聞く。 公益財団法人日本ユニセフ協会と独立行政法人国際協力機構を訪問し、レクチャーと体験学習を実施した。**○　２年次** 「環境先進国に学ぶ」フィールドワークをドイツ連邦共和国とデンマーク王国で実施した。
④外部連携・その他の取組の評価	国内外の大学や企業、国際機関等との連携	国内外の大学との定常的な連携により、専門性の高い指導（外国語による指導も含む）や高大の接続の改善を図るための効果的な取組が行われているかどうか。	SGH 事業における取組内容についてのサポートは、同志社大学の国際連携推機構が担当する。同機構は同志社大学がグローバル化を推進する拠点となる組織で、グローバル教育に関する専門分野の教員や留学生の紹介、国際連携のアドバイス等について、すでに十分な経験とノウハウを持った教職員で組織されており、申請校での取り組みに最適な指導計画の立案・指導が可能な部署である。また、今回は国際連携推進機構長である副学長自らが窓口となって対応するため、大学内の調整も円滑に進める事ができる体制で、申請校を全面的に支援する。　同志社大学大学院には独立研究科として、グローバルスタディーズ研究科があり、そこではグローバルな社会課題についての研究を専門的に行っている。そして、大学院博士課程教育リーディングプログラムに採択	計画の通りに同志社大学との定常的な連携のもとに効果的な取り組みを展開した。 **○　講義・講演** １　小山田英治氏（同志社大学大学院　グローバルスタディーズ教授）「グローバリズムとは何か」 ２　金田重郎氏（同志社大学大学院理工学部教授）「家庭の視点から見るエネルギー問題」 ３　鷲見優氏）（同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科）「環境先進国ドイツに学ぶ　フライブルク」 ４　岡本由美子氏（同志社大学　政策学部教授「発展途上国のジレンマミャンマーを事例として」 ５　同志社大学ＡＩＥＳＥＣ　ワークショップ ６　同志社大学国際居住研究会ワークショップ

			された、グローバル・リソース・マネージメントの研究を行っている。まさに、SGH 事業の課題研究において、連携するのに最適の研究機関と言える。申請校の SGH 事業には、グローバルスタディーズ研究科とビジネス研究科もプログラム内容についてサポートする。	
		国内外の企業、国際機関等との定常的な連携により、実社会との関わりによる社会貢献の意義や実感を芽生えさせる効果的な取組が行われているかどうか。	京都府と京都市に、英語版は国連環境計画（UNEP）と経済協力開発機構（OECD）に提出することを最終目標とする。同時に地球規模の課題について、自ら問題を発見し解決にむけた考察を行い、国際機関を含めた諸機関に独自の提言ができる人材を育成する。	１年次（毎年）実施の東京フィールドワークに置いて、ＪＩＣＡ、ＪＥＴＲＯを訪問し、レクチャーを受けた。ドイツ大使館、オーストリア大使館、ＥＵ代表部を訪問し、広報官、書記官のレクチャーと質疑を実施した。グローバルな働きを実際見聞して、教室から見る世界とは異なった刺激を受けることができた。
	その他に関する取組	地域や学校の特性を生かした取組が行われているかどうか。 また日本の良さや伝統文化への理解を深めるための効果的な取組が行われているかどうか。	地域研究田辺 （学習のねらい）①学校の立地する田辺という地域の地理的特質を理解し、地理的イメージをもつ。②田辺の歴史的背景を学ぶことによって、歴史を今に伝えるものが身近なところにたくさんあることに気づく。③地域の歴史が、常に歴史の大局的な流れと連動しながら展開していることに気づき、地域の歴史をとおして全体史が構成されていることを理解する。特に、現地見学を行い、現地のもつ歴史的意義、地理的背景などを学習する。地域について研究する際の基本は、現地をなるべくたくさん歩き、自分の目でさまざまな発見をする。さらに、作業を通して気づくこと、目で見て 感じること、他の生徒との意見交換をとおして発見することができる。	**○地域の取り組みについて** 京都の特産品の北山スギに代表される木質資源を活かして、地域活性化に取り組む地元京都のペレット工場「森の力京都株式会社」、そして「バイオマス産業杜市」をめざすまちぐるみの取り組みが地域活性化のモデルとなりつつある岡山県真庭市を関連付けて考察した。「木質ペレット」とは製材過程で発生する廃材など木材のみを原料とする燃料ですが、この小さな粒が林業の活性化、そして地域の活性化、さらには社会全体の、持続可能なエネルギー循環のしくみにつながると期待されている。この取り組みは、日本の豊かな森林資源の価値を見直し活用していこうとする取り組みで、ともに木質ペレットを製造している２つの地域をフィールドに日本の伝統を生かす方法を学んだ。ドイツ・オーストリアと日本では組みの出発点も、また現状にも大きな違いがあるが、双方の取り組みを比較検討し、多様な視点から、それぞれの

				地域にあった理想の形を模索していく可能性を見出した。
		将来留学したい又は国際的に活躍したいといった自らの将来ビジョンを明確化し、自律的なキャリアデザインを促すための取組が行われているかどうか。	海外研修プログラム 帰国生徒と国内一般生徒が在籍する本校では、日々の学校生活自体が国際交流そのものです。そのため、海外研修は独自性を考慮して、さらに奥行きを持たせたプログラムを実施している。交換プログラム、世界中から集まってくる研修プログラム、国際会議や国際哲学オリンピックの参加まで幅の広がりを持つ。	国際教育センターを中心に以下のプログラムへの参加を推奨している。毎年、多くの生徒が参加を希望し、順調に留学や国際舞台での活躍をすべく学びを進める生徒が少なくない。 **◇トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ** ２０１５年から３名を送り出している。 **○ 本校独自のプログラム** ◇Ecole Active Bilingue Jeannine Manuel（フランス・パリ市内）ホームステイと授業参加 ◇Amherst College Summer Program 語学研修、ボランティア、スポーツ交流。 ◇Phillips Academy Andover Summer Session（アメリカ・ボストン郊外）寮生活と授業参加。 ◇The Lawrenceville School Exchange Program 寮生活と授業参加。 ◇University of California, DAVIS Extension Program TOEFL Preparation Program ホームステイと TOEFL iBT と ITP を研修。 ◇Smith College Summer Science & Engineering Program 寮生活と大学レベルの理科の研究。 ◇Harvard University Summer School 寮生活と大学の授業を受けて、入学前単位認定を実施。 その他、毎年、海外・国内で開催される国際会議、セミナーなどに多くの生徒を送り出している。

⑤成果の分析・普及等の評価	成果と課題の分析、検証	研究の課題や研究のねらいに対応した、ＳＧＨ指定前後の生徒の変容(学習意欲、進路の状況等を含む)が見られたかどうか。	持続可能な社会を目指す先進的事例を学ぶとともに、そのモデルを身近な地域に置き換え、持続可能な社会の実現に向けた取組を提言する。この活動をとおして、地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーを育成する。このようなグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発が、本構想の目的である。	生徒から提出されたアンケートから明確に変化を読み取ることができる。ＳＧＨ科目を一年次必修、二年次選択した生徒の感想の一部を掲載する。１「世界を見る目が変わった。将来わたしが何とかしなくてはならないという意識が強くなった。」２「地球温暖化などグローバル化について、実際に世界的分業有益な会議が各国で行われていることを知って刺激なった。」３「物事を主体的に考えることが可能な非常に楽しい授業だった。」４「ドイツ・オーストリア研修は濃厚な事前学習、息つく暇もない現地研修、研究発表会と忙しかったが、得たものは非常に多く、帰国後も再考し、クラスメイトと結果を共有することができ有意義だった。」５「語学力の向上を感じることができ、以前よりも充実した会話ができるようになった。」６「世界で行われている環境保全の取り組みや教育に興味がわいた。」７「改めてドイツについて現地校の友達と話して、雑談だけでなく深い話が出来た。」８「留学に対する考え方、色々なものの考え方が変わった。」９「異文化にバーチャルに現実に触れて今まで見たことのないものや言語を聞くことができて視野が広がった。同時に多様な価値観を知った。語学力が伸びた。」１０「ドイツ・オーストリア研修に参加し、多くの知識と体験で将来への新たな切り口を開くことができた。」１１「異文化に触れることで日本にいては思いつかない視点でものを多面的に見ることができた。」１２「ＳＧＨの授業を通して英語のリスニング能力が向上した。」１３「英語コミュニケーションが上がった。(授業でのディベートを通して)。」１４「多種多様な価値観や文化に触れ

				ることで、自分の価値観を再構成することができた。」１５「今まで知らなかったものを見たり聞いたり学んだことで、もっと広い世界を見たいともっと知りたいという好奇心と探究心を更に深めることができた。新しい文化に触れよりさらに世界に対する興味が深まった。（ドイツ・オーストリア研修)」
		ＳＧＨの取組を通じて、グローバル人材育成の重要性の認識等、教員の意識の変容が見られたかどうか。	課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。	日常的にＳＧＨ研究開発委員会報告、ＨＰでの情報拡散、定期的なカリキュラム報告、国内外研修内容の検討と生徒選抜など、多くの教職員がＳＧＨに取り組むことで、本校の開校時からの使命である「グローバル人材育成」の重要性を再認識し、新たな科目の開講や海外プログラムへの関心が高まっている。
		仮説に基づく成果や課題の分析が適切に行われているかどうか。	Global Understanding Skills（Basic）と選択科目 Global Understanding Skills Ⅰを通して、世界的な課題を解決するための具体的方策を考察することで、課題発見能力、プレゼンテーションやディスカッションの力を実際の政策提言の策定の作業において活用する力を身につけることができる。以上の課題研究を実施するにあたり必要となる、政策提言を英語で行うことのできる英語力を身につけさせるため、English Elective として２年生に Research, Debate, and Presentation を設置する。以上の方法によって地球規模で進む環境問題に対する問題意識とそれに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル･リーダーを育成することができると考えられる。	計画の通りに取り組みが実施されていることを定期的に研究開発委員会、授業担当者、運営指導委員会などを開催することで点検している。 **○ GUS Basic、GUSⅠカリキュラム完成** 講演、授業、多様なアクティブラーニング、国内研修、海外研修を通して、課題発見能力とその普及と解決への方法を学ぶことができた。 **○ 課題** 現状では年次報告の通り、構想調書に記載したとおりの成果を上げている。ただ、分析に関しては添付した資料の定量化に留まっているので、他校の分析を参考にしながら明確な根拠が客観的に可視化できるような改善をしたい。

	成果等の検証の結果に基づく取組の改善	明らかになった課題を基に必要な改善の取組をこれまで進めてきているかどうか。	○　生徒の評価 プレゼンテーションやレポートの担当教員による評価。個々の情報から、どのような見解を構築し、さらに情報発信していくのかというプロセスに留意して評価する。生徒が作成したしおりや報告冊子、ホームページなどを担当教員や講演を依頼した外部講師が評価する。 ○　教員の評価 研究開発委員会、授業担当者、運営指導委員会での日常的検討と報告書作成プロセスで振り返りを試行する。	生徒の評価については単元ごとのレポート、課題発見とその解決プロセスの発表によって客観的、公正な評価を行うことができた。また、生徒はそれぞれポートフォリオを作成し、成果を残すことができた。 ○　ＧＵＳ－Ｂを総合的な学習に位置付けたことで、高校１年担任団と全教科科目の教員はＳＧＨ指定校であることを常に意識することができた。また、ＳＧＨ関連事業に協力的であった。 ○　課題研究に関しては、研究開発委員会、授業担当者、運営指導委員会において検討された。最大の問題はＳＧＨ研究開発内容をいかに簡潔にすべての生徒、保護者に広報するかという点である。リーフレット作成を運営指導委員の指導の下に模索中である。 ○　二つの国内研修は各国公館、ＥＵ代表部と外務省、ＪＩＣＡ、ＪＥＴＲＯ、ＪＡＸＡ等の協力で問題なく実施できた。 ○　海外研修は当初予算を割り込んだために参加生徒を選抜したが、内容に関しては構想通りに実施することができた。
	成果の普及、共有・継承	研究成果の普及に積極的に取り組んでいるかどうか。	課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。	**○　日常的な成果普及** 授業終了ごとに本校ＨＰにバナーを貼り、日本語と英語で授業、イベントと研修ごとに掲載している。また、定期的に校内電子掲示板、プリント媒体で全校に向けて発信している。保護者に対しては毎学期発行している「学校便り」に報告と予告を掲載している。 **○　研究発表会**　２０１５年は３月、２０１６年は２月に全指定校に案内を発想し研究発表会を同志社大学今出川キャンパスで実施した。 **○　研究開発報告書**を年度末に作成した。

				○　**今後の予定**　生徒の成果物を生徒自身で編集、作成して普及していきたい。
		学校として研究成果の共有・継承が図られるような取組を進めているかどうか。	校長、教頭、事務長の三役ＳＧＨ本部は教育面と経理面の全ての責任を持って監督する。教育内容は、研究開発実行委員会が確認する。授業担当者会と密に連絡をとりながら、小冊子や報告書の作成を当該委員会が担当する。ＳＧＨの授業を担当しないその他の教員は、ＳＧＨ事業実施に当たる際の多方面に及ぶ周辺的なサポートを担当する。このように、本校の教職員全員が何らかの形でＳＧＨ事業に関わり、この事業に臨む体制を作る。	○　**主体的な担当** ＳＧＨ科目兼開発委員と授業担当者は主体的な担当希望で構成されている。教科を問わない構成は将来的にこの事業が確実に継承されていくことを予言している。 ○　**構想からの拡充（再掲）** 研究過程での成果として「ワールド・イングリッシュ（World English）があげられる。任意科目として中堅、若手の英語教員が積極的に運営し、人気講座となっている。初年度は多数の応募から２クラス４０名を選抜せざるを得なかった。二年目は希望者全員を受け入れる体制を構築した。現在、６クラス８３名が受講している。 ○　**日常的協力体制（再掲）**研究体制は当初計画を上回る規模と内容で進捗している。学校体制と組織、それらの有機的関連は構想調書と通りに実施している。ＳＧＨ科目兼開発委員と授業担当者は主体的に参加を促した結果、教科を超えた多様な構成となった。（宗教科、社会科、国語科、数学科、理科、英語科、外国語科） ○　**構想からの拡充** 英語科は構想調書に挙げた科目に加えて、新たに「ワールド・イングリッシュ（World English）を自由選択科目として設置し、初年度２クラス４０名受講、二年目には６クラス８３名が受講した。 ○　**日常的協力体制** また、リーフレット、報告書、ポスター等の作成に関しては、特に芸術科の全面的協力があり、授業運営とホームページ作成についてはコミ

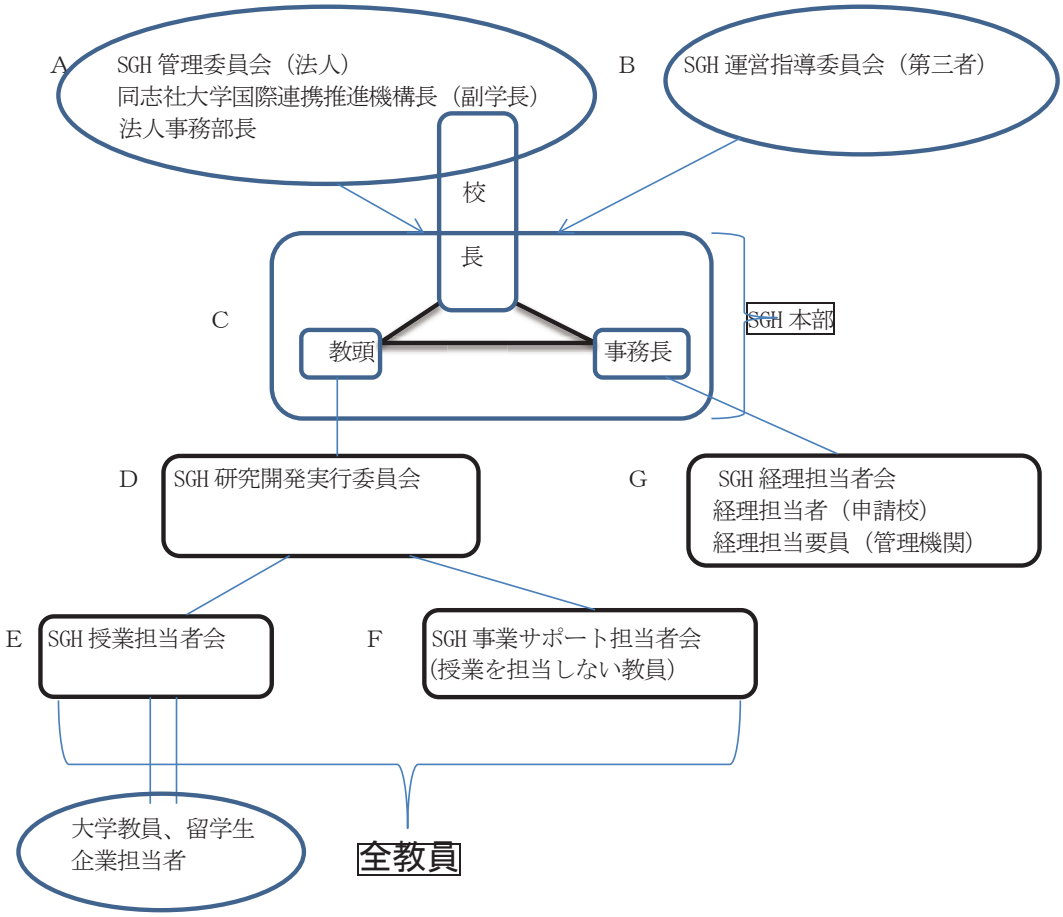
				ュニケーション・センターと事務補助を設置し、バイリンガルで発信している。ＳＧＨ授業担当者、研究開発委員の研究出張等に関しても全教職員がそのバックアップを担っている。この充実した体制の下で、直接担当者１２名（全教職員６１名校長、教頭、事務長を含む）は開発研究の目標を達成する努力を続けている。 リーフレット、報告書、ポスター等の作成に関しては、特に芸術科の全面的協力があり、授業運営とホームページ作成についてはコミュニケーション・センターと事務補助を設置し、バイリンガルで発信している。ＳＧＨ授業担当者、研究開発委員の研究出張等に関しても全教職員がそのバックアップを担っている。この充実した体制の下で、直接担当者１２名（全教職員６１名　校長、教頭、事務長を含む）は開発研究の目標を達成する努力を続けている。
総合評価	これまでの取り組みを振り返って、構想に従って、順調に研究開発を実施できていることを報告したい。特に、授業担当者を中心に研究開発委員会が有機的に機能したこと、同志社大学の法人内学校として惜しみない協力を成果の背景として感謝している。 **（1）外国語への関心**　帰国生受け入れ校として改めて生徒のニーズを確認することができた。【資料ＳＧＨ科目（二年次受講生）2015 年から 2016 年への語学資格変化】必修ＧＵＳ－Ｂと選択ＧＵＳ－Ｉを受講した生徒の外国語資格変化をまとめている。対象が６０名で定期的な受験ではないことを考慮すると中位の能力を持った生徒が伸長していることを読み取ることができる。また、【資料　２０１５年度語学関係資格取得者】毎年実施している全校語学資格調査でも同じような傾向を示している。ＳＧＨ指定が全校的に語学学習への意欲を高めていると考える。 **（2）学習方法の検証**　ＧＵＳ－Ｂでは多様な学びのスキルを体験させることに成功している。生徒自身がどのような学習スキルを学んでいるのかを理解し、その名称や方法を理解していることがわかる。【資料　用語理解】また、多様な教材を提供していることで、社会的課題への関心が高まっていることにも気づくことができる。【資料　学習意識変化】 **（3）関係機関等との連携**　構想時に連携を依頼した各機関の協力によって、授業と研修は順調に成果をあげた。授業に関しては同志社大学の教員、大学院生の派遣、研究発表会での関係教員の講演を得た。岡山県真庭市は総合政策部長を講演に派遣し要請に応えて下さった。ＪＥＴＲＯ、ＪＩＣＡ、ＵＮＩＣＥＦ、ＪＡＸＡは職員の派遣、レクチャーと助言、ドイツ大使館、オーストリア大使館、ＥＵ代表部、外務省は見学と職員のレクチャーを引き受けて下さった。 **（4）課題**　おおむね構想調書にしたがって、研究開発を実施することができた。残された課題は成			

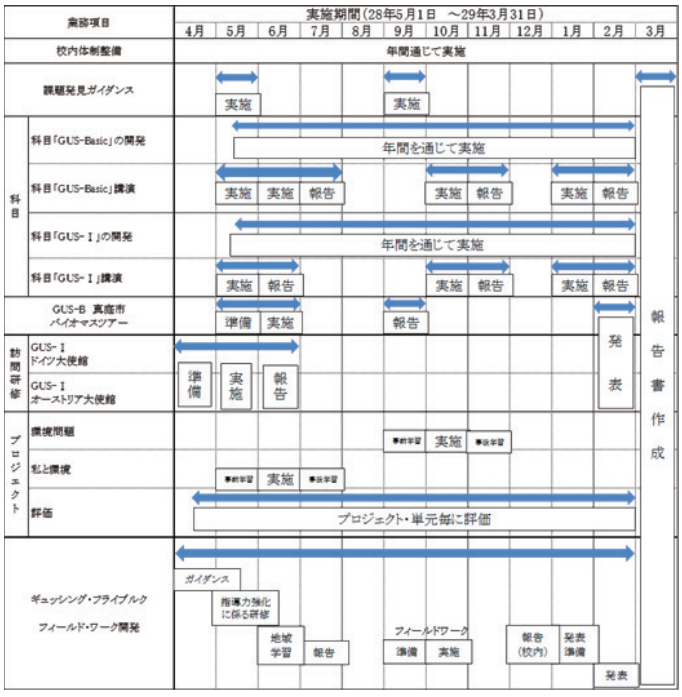
果の発信と客観的評価の分析とそれをもとにした改善である。バイリンガルのＨＰは有効に機能している。リーフレットやフライヤーなど既存の媒体ではなく、今後はＳＮＳを有効かつ安全に留意しつつ利用しなければならないだろう。

（5）生徒の声　最後にＳＧＨ科目を二年間学んだ生徒たちの声をお聞かせしたい。「世界を見る目が変わった。将来わたしが何とかしなくてはならないという意識が強くなった。」「地球温暖化などグローバル化について、実際に世界的分業有益な会議が各国で行われていることを知って刺激なった。」「物事を主体的に考えることが可能な非常に楽しい授業だった。」「ドイツ・オーストリア研修は濃厚な事前学習、息つく暇もない現地研修、研究発表会と忙しかったが、得たものは非常に多く、帰国後も再考し、クラスメイトと結果を共有することができ有意義だった。」「語学力の向上を感じることができ、以前よりも充実した会話ができるようになった。」「短期留学でも文化の違いを直に感じることができて自分の知る世界の狭さを知った。」「世界で行われている環境保全の取り組みや教育に興味がわいた。」「改めてドイツについて現地校の友達と話して、雑談だけでなく深い話が出来た。」「入学前にアフリカに住んでいたが、学習を通して違う視点からアフリカの魅力を理解しようと思った。」「ドイツ語を学びたいと思った。」「留学に対する考え方、色々なものの考え方が変わった。」「11ヶ月の長期交換留学に行って、日本とは違うフランスの文化や語学を学ぶことができた。」「アメリカに住んでいたが、ヨーロッパは初めてで、旧い「先進国」が環境への意識が強いことを実感した。」「ジャカルタで貧富の差を感じた。カンボジアで現地の子ども達と触れ合うことで未来を担う私たちには希望があふれていることに気が付いた。」「

異文化にバーチャルに現実に触れて今まで見たことのないものや言語を聞くことができて視野が広がった。同時に多様な価値観を知った。語学力が伸びた。」「初めてヨーロッパ、アジア・アメリカに比べて深い歴史を感じた。」「ドイツ・オーストリア研修に参加し、多くの知識と体験で将来への新たな切り口を開くことができた。」「異文化に触れることで日本にいては思いつかない視点でものを多面的に見ることができた。」「ＳＧＨの授業を通して英語のリスニング能力が向上した。」「シリコンバレーで企業家や教授からお話を伺うことができて将来の設計図ができた。」「知らなかった分野に出会うことができた。また将来の生き方について考えるきっかけとなった。」「英語コミュニケーションが上がった。(授業でのディベートを通して)。」「多種多様な価値観や文化に触れることで、自分の価値観を再構成することができた。」「By going to Smith College, I met many people with different backgrounds and motivated me to go to college in the US.」「今まで知らなかったものを見たり聞いたり学んだことで、もっと広い世界を見たいともっと知りたいという好奇心と探究心を更に深めることができた。」「新しい文化に触れよりさらに世界に対する興味が深まった。(ドイツ・オーストリア研修)」「ドイツで行われている環境政策を学び、日本と比較することができた。」「アメリカに英語力の低い状態で行ったが、1ヶ月の間に自分の意思をつたなくても伝える力がついたと思う。ドイツでは10日間だったが他の文化に触れ、多様性を学ぶことができた。」

研究開発組織の概要（経理等の事務処理体制も含む）





4　SGH 事務室

カリキュラム開始と同時に設置された SGH 事務室では、関連図書、今までの資料、他機関からの送付物、生徒たちの発表資料、また iPad 等機器を管理しています。全ての資料を教職員で共有できるようにし、また SGH での取り組みについては、随時ホームページの他にも学内では Email、掲示板でも案内もしています。

２０１７年度(平成２９年度)第３年次

スーパーグローバルハイスクール

研究開発報告書

２０１８年3月２３日発行

発行　同志社国際高等学校

編集　ＳＧＨ研究開発実行委員会

印刷　有限会社木村桂文社